かくして彼は外國の大學教授には珍らしい位短命にして仆れた。然しその講義によりその人格により周圍に及ぼした影響は巨大であつた。今二三の人の言葉を引用してみよう。ジョン・モーレー（John Morley）は彼より二年の年少で、後年の自由黨領袖であるが、「回顧錄」（Recollections, 1917. vol. I. pp. 24—25）の中で云ふ。

オックスフォードに於て、千八百六十年から八十年にかけての指導的精神は、トーマス・ヒル・グリーンであつた。彼は思想的能力と影響との何れに於ても顯著な人であつた。彼は先づ論理學者形而上學者としてのミルの優越的勢力に一撃を與へた。然しミルは誤れる哲學は不合理な制度の支持者であると確信したに拘はらず、此の場合批評者たるグリーンの直覺主義の哲學は、グリーンをして崇拜者としてコプデンとブライトとを持つ熱烈なる改革者たらしむることを妨げなかつた。千八百五十八年彼は大學の討論會で、ジョン・ブライト禮讃の動議を提出した。さうして彼れの云ふが如く、その動議は激昂を以て反對された。二日の對論の後彼は僅か二名の少數派に自己を見出した。暗黑の此の狀態に在る大學に籍を置くことを殆ど恥辱とするとさへ云つた。だが光りは空の一角より輝きつゝあつた（譯者いふ——新自由主義の擡頭を意味する）。その現はるゝに至れる徑路は、オックスフォードの卒業生に負ふ所少からざるものがある。而してそれは彼らのすべての內最も赫々たるグリーンの指導に依つてであつた。

アスクィスはグリーンの後輩であり、後の自由黨首領であるが、「ヴィクトリア時代の樣相」（Some Aspects of the Victorian Age, 1918. p. 19.）の中に云ふ。

ある種の淸敎徒的の嚴肅さと熱烈さとが、グリーンの生活を支配してゐたやうに、彼れの思想を貫く一筋の金線であつた。彼は決して他人の思想と體系との單なる借用者ではなかつた。實にその思考の方法と表現の姿態との二つながらに於て、彼は殆んど銳角的の個性を持つてゐた。此の點に於て外部に對する宣傳者としての效驗に關しては、より流暢にして平明な盟友エドワード・ケヤードには及ばなかつた。然し人を敎育する權威に於ては——柔軟自在な學園の原料たる學生に制約的及び構成的感化を及ぼすことに關しては——彼はヴィクトリア朝時代に於ける最も力ありしものの一人であつた。

曩に擧げたハンフリー・ウォード夫人は、小說「ロバート・エルスミア」（Robert Elsmere, 1888）の主人公グレーのモデルとしてグリーンを描寫したが、その「一作家の追憶錄」（A Writer's Recollections, 1918. p. 132.）の中で云ふ。

然しペリオルはマスターなるジョウェットよりも更により多くを私に意味した。トーマス・ヒル・グリーン敎授——「ペリオルのグリーン」——は、當時に於て偉大なるカレッヂの精神的解放的の勢力として、ジョウェットに劣らざる代表者であつた。今や彼れの死後經過した時間は明に示した、彼れの哲學的勞作とその影響とは、十九世紀思想の歷史に於て、恒久的な赫々たる地位を保持すると云ふことを。グリーンと夫人とは私共の親密の友達となつた、さうして「ロバート・エルスミア」の中の「グレー」に於て私は彼れの性向の一端を再現しようと試みた——偉大なる思想家にして又偉大なる敎師たりし彼れの性向、その人は亦人間の中で最も單純な最も眞摯なさうして又最も實際的な人であつた——高き敎養と氣高き性格とがオックスフォードに價値ある限り、オックスフォードは決してそれを忘れることが出來ないだらう。

かほどの感化影響を及ぼした人は、その人格と思想とが分離してゐる筈はない、必ずやその人格を思想に浸透させ、その人格は思想の表現であるに違ひない。かくして彼れの生立を辿つた後に、私はグリーンの思想體系を語らねばならない。

(五) 着眼と構想

十九世紀の中頃に巖の如くに亭立してゐたベンサムの思想體系を、ぢつと眼を離さずに諦視してゐた一人の青年學徒があつた。彼は此の體系の中に、己れを牽引するあるものと、己れを反撥させるあるものとを、二つながら感じたのであつた。思索と檢討との幾年を經た後に、彼は遂に此の體系への去就を宣明した。トーマス・ヒル・グリーンが一八六八年「北英評論」誌に掲げた論文、「人生に關する當代流行の哲學」は、グリーンにとつて又英國思想史にとつて、誠に意義深き文獻である。

彼は當時の青年の傾向の特徴として、次の三點を指摘した、曰はく「自由ならんとし、事物を理解せんとし、更は人生を味はんとする」と。之が近代精神の要求である。此の要求は日に日により正確に表現され、日に日にそれ自身がよりよく意識されつゝある」と。私をして註釋を加へしめるならば、「自由ならんとす」とは、社會制度を改革して、あらゆる成員に自由なる地位を與へようとすることを意味するので、當時都市勞働者に選擧權を擴張し、又各種の社會的立法を行ひつゝあるを指すのであらう。「事物を理解せんとす」とは、宇宙に於ける一切の事物を不知に拋擲することなしに、その原因結果を追窮せずんば止まざる科學的精神の横溢してゐることを意味する。「人生を味はんとす」とは、狹隘な人生を送ることに滿足しないで、詩歌音樂繪畫等の藝術に浸つて、豐

かな教養を高めることを云ふのである。ウァーヅウァース、テニソン、ブラウニング等によつて、當時の青年の教養は、十九世紀初期とは比ぶべくもなかつた。社會改革の情熱と、科學的檢討と、廣い視野と高き教養と、之を當時の青年に認めて、グリーンは英國民の進歩の傾向がこゝにあると考へて喜んだのであつた。

然るに一八六〇年代の「當代流行の哲學」は何かと云へば、ベンサム、ミルの自然主義の哲學に外ならない。之によれば認識は感覺より成立し、人は唯自己の快樂苦痛によつてのみ必然的に動くのである。若しその認識論によれば、科學は當然に崩壞の悲運は逢會するではないか。又その人間觀によれば、人は必然の法則は支配されるが故に、藝術上の美醜の差別は消滅するのではないか。又人は快樂苦痛によつてのみ動くが故に、社會改革も科學的檢討も教養も、皆すべて快樂（云ふまでもなく物質的快樂）の衝動の結果だと云ふこととなり、又更は社會改革者は自己の快樂を犧牲として同胞の爲に圖りつゝあるは拘はらず、それさへ彼自身の快樂の爲だと誣ひられてゐるではないか。彼の喜ぶべき三つの傾向、社會改革の情熱と科學的檢討と高き教養とは、凡そそれとは矛盾し對立し反撥する哲學の基礎の上に置かれてゐる。よき傾向はよくありえざる哲學の上に立ち、人とは惡くあらざるをえぬ哲學の上に、よき傾向が現はれてゐる。之こそ正に當代の思想的悲劇にあらずして何であらう。若しあの傾向がよきものであるならば、青年は口にベンサム、ミルを唱へながら、實はそれとは反對の哲學を暗默の裡に援用しつゝあることとなる。又若しベンサム、ミルの哲學が眞に把握されてゐるならば、あのよき傾向はやがて消ゆべき假幻のものでなければならない。英國の哲學界は此の矛盾の前に立たされてゐる。弊害は單に

理論的矛盾にのみあるのではない。あのよき傾向は內的に調和した哲學的支持を缺くが故に、情熱を缺き徹底を缺く、一步を進めつゝ躊躇と逡巡とを伴ひ、やがて枯死するの憂れがある。若し當代青年のよき傾向を永く保持せんとするならば、之とは矛盾するベンサム、ミルの哲學を淸算し、その傾向と照應し調和し、之を理論付ける哲學を提示せねばならない、こゝに哲人の使命がある、而してその哲學とは理想主義の哲學を措いて他に求めることは出來ないと。之がグリーンの「人生に關する當代流行の哲學」の要領である。

此の一文は彼が自己の未來を語る一篇の宣言書とも云ふべきものであつた。僅に三十餘頁の短いもので、文辭必ずしも平明暢達とは云ひ難い。然し筆力雄勁にして高邁の氣全篇を貫いてゐる。こゝに時代の動向を把握する炯眼さと、時弊の所在を觀破する明確さと、現實社會に深き關心を持つ志士としての情熱と、當今の課題を新しき哲學に求めゝ哲人の識見とが躍動してゐる。思ひ起す、ジョン・スチュアート・ミルは直覺說を以て保守反動の哲學なりとして排擊したのであつた、然し今や「自由ならんとする」改革者によつて、理想主義は求められてゐる。否理想主義こそ社會改革の哲學として、好個の哲學であり、功利主義こそ保守反動と宿命傍觀とに歸結すると唱へられるに至つたのである。社會改革と科學的檢討と高き教養とが、矛盾する哲學の上に立つことは、一八六〇年代の英國のみとは限らない。筆者は十年前、此の一文を讀んで感激に胸を躍らした當時を想起せざるを得ない、私がマルキシズムの哲學に對立するは、全く之と同一の理由によるのである。

功利主義——詳しく云へば功利主義をその一種相とする自然主義經驗主義——に對する反對は既に宣告され

た。だが經驗主義が何故に採るべからざるかが、更により詳細に檢討されねばならない。彼はかくして英國經驗主義哲學の研究に沈潛し、その成果が一八七四年と七五年とに公にされたダヴィッド・ヒュームの「人性論」(David Hume, Treatise on Human Nature) 二卷に附した二個の長篇の序文となつて現はれた。第一卷は認識論に附して三百頁、第二卷は道德哲學に附して約七十頁、序文と云ふも裕に獨立の書物となるべき論文である。グリーンによればヒュームこそは、英國が最後に持つた偉大なる哲人であつた。彼逝いて後哲學界に凡庸の時代が來た、ベンサム、ミルの如きは、要するにヒュームの殘滓を弄ぶ末流に過ぎない。英國當代の哲學の沈滯は、實にヒュームの殘したる課題に臆する所なく直面せず、之に大膽に答へることを回避するに在る。末流の業績から去つてヒュームに返り、その結論を諦視することにこそ、正に進步の出立が始まるのである。之がグリーンのヒューム批判の冒頭の言であつた。

ヒュームはロックの前提と方法との上に立つ、故にグリーンの批判は先づロックから始まる、而してロックの批判は又そのまゝヒュームに妥當する。既に華々しき業績を擧げた自然科學的方法、卽ち原因結果を飽く迄も追窮する方法を、認識は就ても適用せんとするのがロックの意圖であつた。彼は認識卽ち知識の要素たる觀念の起源を求めて、感覺と反省とにえた。始めに心は白紙(タブラ・ラサ)の如くであつて、何等の觀念も存在しない。白紙の心に觀念が成立するのは、一は外界から感官を刺戟して生ずる感覺であり、他は感覺の上に反省が加へられることによる。若し感覺と反省とからのみ觀念が生ずるならば、こゝに「先天的(アプリオリ)」なるものの存在は否定され、理想主義は

倒れて經驗主義が確證されることとなる。いかにせば「先天的」なるものが存在しないか、唯經驗から認識が成立するかを、說明することがロックの企圖する所である。所がこゝで區別されねばならないのは、「感覺」と「感覺の觀念」である。前者は唯感官に齎らされた印象であり、後者は此の印象に對する觀念である。認識に必要なるは「感覺」ではなくて「感覺の觀念」である。感覺は感覺の觀念の對象ではあるが、それ自身が觀念ではない。然らば感覺の「觀念」は、いかにして生ずるか、それは最初の感覺に於て既に存するから、感覺から生ずるものではない。感覺の前に心が與へられてゐなければならない。更に感覺の觀念の上に反省が加へられる爲には、感覺の觀念を或は採取し或は捨去する心なるものが豫想されねばならない。かくしてロックにより心とは白紙と看做され空家と考へられたに拘はらず、今は活動的に作用する心となつた、此の心の作用を感覺から說明することが、經驗主義者の意圖たりしならば、經驗主義はその出發に於て既に蹉跌したのである。更に物質から感覺が到來すると云ふ時に、物質の存在が既に前提とされてゐる、然るに物質の存在がいかにして認識されるかが、その認識論に於て說明されなければならないのに、そして今感覺からと說明されたのに、その感覺の到來する前に物質の存在が認識されたものとして豫想されてゐるならば、此の說明は前後顚倒語法の誤謬を犯すこととならう。流石にロックも遂に之に氣付かないではなかつた、かくして彼は一切を感覺から說明することの困難を思つて、物の性質を第一性質と第二性質とに分けて、後者は味覺視覺嗅覺等に起源するが、前者は大小、形狀、數、地位、運動その他凝固的の部分で、物自體に具有するとして、之に對する觀念は感覺から由來せざるものと認めた。知識の起源は感覺にありと云ふロックは、既に局部的讓歩をなすべく餘儀なくされ、「心の創設するもの」を豫想せざるをえなくなつた。

だがかくして經驗論的認識論の矛盾を次々に指摘するは煩に堪へないから、私は急いでロックの因果關係と云ふ觀念の說明に往かねばならない。彼は因果關係も亦外より與へられた感覺の複雜に結合したものに外ならないと云ひ、次の如くに說明する。

> 吾々の感官が物の絕えざる變化に注意を留むるや、幾多の特殊の性質實體が存在し始めたことと、物が此の特殊の存在を受くるに至れるは、ある他の存在物の當然の適用と作用とに依るものなることを觀察せざるをえない。此の觀察よりして吾々は原因と結果と云ふ觀念を取得する。單純或は複雜な觀念を生ずるものを、原因なる一般名稱により呼び、生ぜられるものを結果と呼ぶ。かくして吾々が蠟と稱する實體に就て、以前その中に含まれざりし單純觀念なる流動性なるものが、ある熱度の作用するや絕えず生ずるものなることをみて、蠟の流動性に對して熱の單純觀念を原因と稱し、而して流動性をその結果と云ふ。

此の說明も亦不成功に終るの外はない、何故なれば「物の絕えざる變化に注意を留むる」と云ふが、變化と云ふ以上は變化せざるあるものを前提とする、それこそ變化する諸多の性質實體の上に超然たる物の「同一性」である、然るに「同一性」なる觀念は、唯變化する特殊の性質のみから由來する感覺からは成立しえない。從つてロックに於て變化なることが說明されえない。更に變化が他の物の作用に依ると觀察することから、原因結果の觀念が生ずると云ふが、變化がある他のものに歸すると云ふ觀察をする時に、既に原因あらば結果あり結果あら

は原因ありと云ふ觀念が働いてゐるのであつて、然らずんば變化が何に歸するかと云ふことさへ吾々の注意に上らないだらう。かくして因果關係は觀察の前に豫定されてゐて、觀察の後に成立するのではない、こゝにも前後顚倒の誤謬が犯されてゐる。科學は因果法則の體系である、而して因果關係がロックによつて說明しえないとすれば、科學は不成立の危機に瀕することとならう。だがまだ之だけではない、因果の法則に於て原因となり結果となるものは、これ又はそれと云ふ特殊の物の觀念に非ずして、凡そある物と云ふ一般的觀念である。ロックによれば、一般的觀念（此の人彼の人でなしに人といふ）は、特殊の觀念から特殊を捨象した結果だと云ふのであるが、特殊とは既に一般を前提して後始めてありうるので、特殊を捨象して一般が成立するのではない、從つてロックに於て因果法則に現はれる一般的觀念は成立しえないこととなる、こゝにも亦科學崩壞の一因が伏在する。更にロックによれば一般的觀念は「時間と空間の事情から分離され」抽象されたものだから、唯名的なるもので實在的のものではない（nominal but not real）。だとすれば因果法則とは實在に妥當しない空虛なものとなる。かくて因果關係が成立せず、一般的觀念が成立せず、法則が實在に妥當しないこととなつた。こゝに於て科學の基礎は崩壞を來さざるをえぬ、ロックは既に自然科學は不可能だとの疑を懷いた（suspected）（「人間悟性論」第四篇第十二章第十節）。グリーンのロックの批判はそのまゝヒュームにも妥當する、何故なればヒュームはロックの後に續いて、更に大膽に更に峻嚴にロックの意圖を實現せんと欲するものであつたからである。ロックは心を白紙と看做して、所謂「先天的なるもの」がいかに經驗から成立するかを、說明せんとして失敗したのであつた。ヒュームはロックの失敗を回復せんと努力した、だが之も亦徒勞に終つた、のみならずその努力に伴つて科學は更に崩壞の運命を確證されたのである。例へばヒュームは因果關係の說明を觀念の聯合に求めた、卽ちAなるものが直接にBなるものに伴ふ場合が反覆される時に、AとBとの觀念を聯想する慣習を生じ、かくてBは原因であり、Aは結果であり、AとBとは因果關係に在ると考へられるに至ると云ふのである。之に就てはロックに加へられた批判は當然にヒュームにも與へられるが、更に因果關係が單に聯想の慣習によるとするならば、此の慣習の成立せざるものに對しては、因果關係は成立せず、唯此の慣習の成立するほど長期の經驗を有したもののみに、因果關係が成立することとなる。かくて因果關係は必然でなくなつて、唯慣習が成るか否かの偶發事情に支配されることとなつた。科學的法則は必然でなくて偶然となる。こゝに於て科學の崩壞は遂に收拾の餘地なき最後の窮境に陷つたのである。近世當初以來の華々しき自然科學の業績に眩惑されて、人間及び社會にも自然科學的方法卽ち因果關係を追窮する方法を適用せんとして、認識といふことにも之を適用した。その際科學の成立は必然不可疑の前提として、豫想されてゐたのであつた。然るに見よ、科學的方法を適用した認識論の歸結は、科學の崩壞といふ恐るべき破局に到達したではないか。自然科學の謳歌者ロックにより、科學の成立は懷疑され、更にヒュームに於て不可能なるべく體系にまで精練された。ロックとヒュームとの方法に立つ限り、此の恐怖すべき破綻を甘受せざるをえぬ、若し此の歸結を甘受しないならば、出立に遡つてロックとヒュームとの方法を再檢討せねばならぬ、英國の學徒は此の二者擇一の窮境に立たされてゐるのである。

然るにロックとヒュームとの方法に立ちながら、ベンサム、ミルの徒は科學崩壞の歸結を知らざる如くに、科學を云々し經驗を喋々する。何故なれば彼等はヒュームの殘滓を弄んで、徒に半途に彷徨するのみで、ヒュームの如くに論理を最後まで開展する明晰さを缺くか、ヒュームの如くに恐るゝ所なく歸結に直面する大膽さを缺くからであつた。當代の哲人の課題は、ヒュームの殘した恐るべき歸結を諦視して、此の科學の崩壞と云ふ歸結を甘受するか、此の歸結を回避する起死回生の路を發見するかでなければならない。幸にしてヒュームにより獨斷の假睡を覺まされ、ヒュームと共に歩んでヒュームの歸結に直面し、科學の崩壞を既倒に回す壯擧を敢てした哲人があつた、それがインマヌエル・カントである。カントの「純粹理性批判」はヒュームの「人性論」と、接續して讀まるべきである。ヒュームを解せずしてはカントを解しえない。英國がカントを理解しえないのは、「英國の持つた最後の偉大なる哲人」ヒュームを理解しないからである。之がヒュームの認識論に附したグリーンの序文の要領である。

認識論から去つて、快樂主義の人間觀と功利主義の道德哲學とを見ると、こゝでもベンサム、ミルの先師はヒュームである。グリーンは快樂とは觀念上成立しえないものであると云ひ、從つて最大多數の最大快樂が善であると云ふ功利主義の道德哲學は、一見理想主義に缺如する內容實質を備へるが如くであつて、實はさうではないと云ひ、更に功利主義の最大の難點を保守宿命に墮すると云ふことに置いた。若し當時の社會制度が最大多數の最大快樂に反すると、現に最大多數が考へるならば、功利主義の原理により制度の改革が行はれるだらう、然しかかる場合は寧ろ少くして、多くの場合は唯少數の者が、現存制度が最大多數の最大快樂に反すると思つてゐるだけで、最大多數は現存制度に滿足してゐる場合である。此の場合は最大多數の最大快樂と云ふ原理からは、現存制度の維持と云ふ保守主義のみしか導かれない。或は云ふかも知れない、少數の先覺者が最大多數の最大快樂と信ずる方向に、現存制度を改革すればよいのだと。然し最大多數の最大快樂とは、民衆自體の現實の感情を意味するのであつて、少數の先覺者の主觀に映じた民衆の感情を云ふのでないことは明かである。從つて功利主義を社會改革に導かうとする爲には、少數の先覺者が最大多數の民衆を啓蒙して、今は自己の最大快樂と合致すると信じてゐる制度への盲信を打破して、制度が自己の最大快樂に反すると考へさせることだけが殘されてゐる。然るに今現に制度に滿足してゐる民衆にかかる宣傳を試みることは、民衆の滿足を打破することで、それこそ最大多數の最大快樂に反することであり、功利主義自體に矛盾することとなる、かくて功利主義からは、民衆をして現狀に執着せしめる保守宿命しか導き出されない。

更に功利主義は快樂主義と聯關してゐて、後者は人とは彼自身の快樂にのみ動くと云ひ、前者は最大多數の最大快樂を圖れよと云ふ。若し最大多數の最大快樂を圖ることが、自己の快樂に合致するなら、快樂主義あれば足り、敢て功利主義の道德哲學あるを必要としない。若し又最大多數の最大快樂を圖ることが、自己の快樂に反するならば、快樂主義の人間觀を正しとする限り、最大多數の最大快樂を圖りえないこととなり、功利主義は不可能の原理となり終り、人は唯自己の快樂のまゝに放任すると云ふ宿命論に歸着する。かくて功利主義の道德哲學

は、一見改革的原理たるかの如くであり、又その名に於て幾多の改革が爲されたに拘はらず、論理を追窮すれば、結局現狀を維持する保守反動の役目しか果しえないといふ結論に到達せざるをえぬ。而もその名に於て改革が爲されたのは、功利主義の信奉者が自ら意識せずして、理想主義の道德哲學を援用し盜用してゐたからである。然らば功利主義はそれ自身相對立した反撥する二つの原理を漫然として包有することによつてのみ、改革的役割を果しえたこととなる、之が理論的不統一に非ずして何であらう。

認識論と道德哲學とに對して、ヒュームを批判したグリーンは、所謂「當代流行の哲學」の理論的缺陷を餘蘊なく指摘した。既に一八六八年自己が未來に果すべき哲人としての使命を宣言し、一八七四年と翌年とに亙つて、反對陣營の破壞に成功したグリーンは、「自由ならんとし、事物を理解せんとし、人生を味はんとする」要求に相應する新しき哲學をば、今や積極的に建設すべき任務の前に立つたのであつた。ベンサム、ミルの體系は代置さるべき、認識論、本體論、人間觀、道德哲學、社會哲學、社會思想、之等を網羅する一大思想體系が彼れの幻影に浮んで來た。それでは彼はそれを構成する素材を、何れから求めたか。基督敎、カーライル、モーリス等、プラトー、アリストートル等が、夫々彼れの偉業を果さしむべく參加した、だが最も重大なるは、カントとヘーゲルとであつた。彼はヒュームの第二の序文の末尾に次の如くに云つた。

> 然し吾々の仕事は道德の敎へを說くことではなくして、自然の認識に關しても道德に關しても、感覺の抽象に基礎を置いた經驗主義の哲學は、ヒュームを以てして既に窮極まで往き盡くしたと云ふことを示すことであり、更に思索に於ける前進の次の一步は、自然と人間行爲との過程を、思惟に於ける眞正の出發から再吟味する努力あるのみだと云ふことを示すことであつた。若しその目的にして何等かの方法で達せられ、年齡廿五歲未滿の英國青年の注意が、今まで吾々の間に支配してゐた時代錯誤の哲學の體系から去つて、カントとヘーゲルとの研究に向はしめられるならば、筆者の倦怠を催ほさせる此の勞作も決して徒勞ではなかつたらう。

だがたとへカントはグリーンに對して、經驗主義の克服を方向付けたとは云へ、彼はカントを以て止まつてはゐなかつた。カントは未だ經驗主義の餘沫を蟬脫せざりしもので、カントに始まる理想主義をあるべき所に開展させたのは、フィヒテでありヘーゲルであつた。グリーンはカントに立つてヘーゲルへの方向に進んだ。限られた本文の紙面では詳述を省くの外ないが、カントの直覺の形式の處置に於て、物自體の考へ方に於て、カントに缺如した人間觀の充足に於て、カントが道德哲學に於て不必要に欲望を嫌忌した爲に無內容となつたのを訂正したことに於て、カントに缺如した社會哲學を提示したこと等に於て、之を要するに客觀と主觀、快樂の衝動と理想、現實の社會制度と理想の社會制度との二元的對立を克服し、一元的統一の下に於ける異る表現だとする、所謂 sub specie aeternitas と sub specie temporis との調和を圖らんとしたことが、グリーンがカントと對立する特異性であつた。

然しグリーンはヘーゲルを以て滿足したのではなかつた。ヘーゲルが現實と理念とを混同し、價値の抹消、價値の無差別視を齎らすことに對して、彼は理念と現實とを峻別したカントに繼着を禁じえない。彼は云つた。

ヘーゲルの學說は今日まで半世紀の間世界の前に存在してゐた。而してそれを低く評價するものさへ、無視することが出來ないほど、當時の科學と哲學とに影響を及ぼした。然し一つの學說としてはそれは進歩してはゐなかつた。それを哲學の最後の言と看做す人々にさへ、徹底的に滿足を與へたか否かは疑はれる。吾々がヘーゲル以前の研究者によつて殘された問題を考へ抜く時に、智的必然性により當然にヘーゲルに到達せざるをえないやうに覺える。然し一度反省する時に、吾々が氣付くことは、吾々がヘーゲリアンたりうるは、云はば唯吾々の思想の一部に於てである、眞想の日曜日に於てのみであつて、決して平常週日の思想に於てではない。……

（一）

彼は「現實のヘーゲルの體系は餘りに大望過ぎ、少くとも早急であつたとの疑惑を以て之に對し」、而して「すべては試み返されねばならない」と云つたさうである。彼れのヘーゲルへの反對は、ヘーゲルが現實の國家を以て理想の國家と同一視し、國家主義、保守主義、專制主義に墮した點に於て、特に顯著である。然らばグリーンをカントの形式性から免れしめ、ヘーゲルの國家主義より脫せしめたのは何か。ロック、ヒュームからベンサム、ミルに傳はる經驗主義と、ヴェーンからベンサム、ミル、コプデン、ブライトに至る自由主義とであつたらう。かくてグリーンに於いて、英國的のものと希臘的のものとは、渾然として調和する。等しく理想主義と呼ばれつゝ、グリーンを又英國理想主義を特出せしめるのは、かかる複雜なる素材を併せて止揚した所に在る。

（六）思想體系

かくして構成されたグリーンの體系は、彼が短命に倒れた爲に決して完成してはゐなかつた。然し生前に書いた「倫理學序說」と、死後門弟ネットルシップにより編纂された全集三卷（Works, 3 vols., 1885—1888）とによれば、略々その外廓だけは示されてゐる。詳細は拙著「グリーンの思想體系」二卷に讓らねばならないが、私は次にその要領を語ることとしよう。

（1）哲學

グリーンにとつて最初の哲學の課題は、人は自然の一部に過ぎないか否かであつた。若し人も自然の子なりとすれば人に關する自然科學が成立するのみで、哲學と云ふ特殊の學の成立する餘地はなくなるであらう。此の課題に答へるのが認識論である。經驗論者は云ふ、認識は感覺より成立すると、果して感官と云ふ生理的機關の作用たる感覺よりして認識が成立するならば、こゝには自然的事件があるのみで、自然と異る何ものもない。だが問題は、いかにして感覺より認識が成立するかにある。感覺は物が感官を刺戟した結果だと云ふ時に、物の質と量と、物の存在する時間と空間と、物と人との對立的關係と、因果の關係とが、當然の前提として豫想されてゐ

る。之等の前提なくして凡そ認識は成立しえない、グリーンは之等の前提を總稱して「關係」と云ふ。或は云ふが知れない、關係も亦感覺より成立すると。然し感覺の成立に先だつて豫想される關係は感覺よりして成立しうる筈がない。然らば何から成立するか、感覺即ち經驗より成立するものに非ざるが故に、それは「先天的（アプリオリ）」なるものであり、それが悟性の所産である。悟性とは理性が認識に際して現はれる時の名稱である。

以上の說明よりして、重要なる二個の結論が導き出される、即ち第一は人は自然の一部ではないと云ふことである。自然とは吾々の悟性により自然として認識されるならば、人は自然の一部に非ずして、自然こそ吾々の悟性の所産である。故に自然に非ざる人を對象として自然科學は成立しえない、こゝに自然科學と對立する哲學の領域がある。第二に悟性卽ち理性は無條件的であり無制約的であり、從つて自由だと云ふことである。自然に於けるあらゆるものは、空間の中に時間の中に因果關係の中に在るが故に、條件的であり制約的である。だが理性は之等の關係の本源なるが故に、關係の外に在らねばならない、卽ち無條件的であり無制約的であり卽ち自由であらねばならない。然し理性は認識に際しては、自らの職能を時間と空間との間に限局せしめる。たとへその限局は自らの課したものなるが故に、依然として理性が自由たることを妨げることにはならないが、尙限局は依然として限局である。然らばかかる限局なしに、理性が無條件的に無制約的に活躍する場合はないか、それが道德の場面に於てである。理性は認識に於てさへ、單に認識を可能ならしめる條件たるのみならず、認識の目標として理想として、認識を鞭撻し指導してゐた、此の意味に於て理性は命令であり規範であつた。命令規範として理性は道德に於てより完全に活躍するのである。かくしてグリーンは、認識論よりして道德哲學への路を開いたのである。

だがこゝに道德哲學へ急ぐ前に、別の問題が控へてゐる。人は云ふかも知れない、なるほど自然は人間悟性の所産であると云ふが、その場合自然を今吾々の云ふ自然たらしめるのは、悟性の形式も必要條件ではあらうが、形式のみで認識は成立しない、質料たる感覺も亦他の必要條件であらう。その感覺は「物自體」が吾々の感官を觸發した結果である。それならば悟性の所産である自然と物自體と云ふ二元的世界が存在することにならうと。だがかかる疑問はカントに對して向けられようともグリーンには向けられない。カントは物自體なるものを認めた點に於て、經驗論者の殘滓を脫却することが出來なかつた。グリーンによれば、質料と形式と云ひ、感覺と關係と云ふ時に、吾々の思惟の便宜上暫らく兩者を對立させたに過ぎないので、形式なく關係なき質料感覺を考へることは出來ない。考へうべからざるものを、考へうるかの如くに抽象したに過ぎないのである。「始め知に入らざるものは感覺の內になし」との言は、正に此の事を云ふに外ならない。彼の物自體なるものも、物自體を語る時に、既に思惟された意識された物自體であつて、カントの所謂物自體ではない。若し假りに物自體なるものがありとすれば、それは思惟とも意識とも沒交涉の世界なるが故に、吾々は考へることも語ることも出來ない。始めに物質ありと前提する唯物論者も、物自體を認めるカントも共に、二元的不統一性を犯すもので、グリーンは一元的說明を以て貫徹し、彼自身之を「實在世界の唯心性」(spirituality of the real world)と稱してゐる。或は云ふかも知れない、人なき以前に地球は存在したと。それは今吾々に認識された地球を暫らく、科學上の假定

として、人なき以前に類推するに過ぎない。感覺よりして認識が成立すると云ふ經驗論者の立場からしても、人なく感覺なき以前に、いかにして地球に關する認識が成立しえたかは、說明に苦しむ所でなければなるまい。

再び認識論の末尾に戻つて、道德哲學への門口に立たう。曩に理性は自由であることが明かにされた。然しそのことは人間がその行爲に於て自由であることにはならない、何故なればまだ行爲と理性との間に何等の聯關が付けられてはゐないからである。それでは人の行爲はいかに說明さるべきであるか、之を明かにするのが人間觀である。行爲を內面的に見たものが欲望であり、欲望を外部的に見たものが行爲である、だから行爲と欲望とは二にして一である。ベンサムに於て、人は行爲に於て自己の快苦により必然的に決定されるものとされた。カントは善き行爲に於て人は自由であるが、惡しき行爲に於ては決定されてゐると見て、前者を自律と云ひ、後者を他律と云つた。ベンサムによればすべて他律であり、善惡の選擇の餘地がない、その故に道德の路が塞がれる。カントによるも自律の行爲は聖人の稀な行爲にしか過ぎないと云ふから、大部分の行爲は他律であり、從つてカントはその意圖に反して、大多數の行爲に道德の路を閉ざした。グリーンはベンサムの決定論に對立すると共に、カントにも對立し、カントと異つて人の行爲を出發に遡つて再吟味する必要を感じた。そして彼によれば、人は行爲によつて自我の滿足を感ずる、自我の滿足は快樂を感ずる、然し快樂は自我滿足の結果であつて、自我滿足の目的でもなければ行爲の目的でもない、結果たる快樂を目的と錯覺した所に快樂主義の人間觀が導かれたのである。

例へば飢餓と云ふ自然的事件がそのまゝに行爲となつて現はれるのではない。自然的事件に觸發されて、人は何が自我を滿足せしむるかを判斷し、その結果自我を滿足せしめるものとしてある行爲を決定する。自我を滿足させるものが何たるかを判斷する時に、彼は彼自身を對象とし、自然的事件の系列の外に自己を特出せしめる。若し飢餓と云ふ自然的事件がそのまゝに行爲とならば、行爲も亦一の自然的事件であり、人は行爲に於て自由ではない。然し行爲に於て人は一旦自然的事件を阻止し、自己が自己を特出し、自己を滿足せしめるものを決定することの故に、彼は自然的事件の外にある、恰も感覺と感覺の觀念とが異り、感覺の觀念を持つことにより、經驗ならざる心が作用すると似て、自我を滿足するものを自己が意志することによつて、經驗ならざるものの自然なものを自己に作用する。之れ卽ち理性の所業である。かくて人は行爲に於て自由である。何が彼れの自我を滿足せしめるかは、人によつて異るであらう、然し何れにしても人は行爲するに際し、全自我を背負うて、行爲に自我を表現する。さればこそ人は行爲に於て責任を負ふ、何故なれば彼れの行爲は全自我の躍動したものだから。こゝに於て何に於て自我は滿足すべきであるかが、それだけが問題となる、之を決定するのが道德哲學の課題である。

善とは何か、何が最高の價値あるものか、グリーンは之に答へて曰はく、人格の完成、自我の實現と。それでは何が人格の完成であるか、之を說明することは出來ない、何故なれば說明とは既存のものと善とを關係付けることである。然し善とは未だ實現されざるもの卽ち理想であるが故に、既存のものを以て關係付けることは出來

ないからである。然し人格の完成の中に、狹義の道德と學問と藝術とが重要な要素を爲し、夫々が高度に成長されたものを指すことは明かである。彼は狹義の道德に就ては多くを云ふが、學問や藝術に就て將に語らんとして不幸中道にして倒れた爲に「倫理學序說」が此の點で中斷してゐることは、返す〳〵も遺憾である。狹義の道德とは、吾々が同胞の成長を希求することを云ひ、此の欲求こそ人が生れながらに具へたもので、原始未開の時代に於てすら、人は自らを犧牲としても同胞を助くるに非ざれば自己を滿足させることが出來なかつた。自己を成長させることと、同胞の成長の爲に圖ることとは、二にして一である。之れ人格の完成が毫も他人と牴觸し衝突せざる所以である。

何が善たるかと云ふ問題に對する答への進化と、善を行ふべき同胞の範圍の擴張とは偶然にも一致してゐた。始め原始時代に善は、身邊の貨財であるとされた、次で身體に在るもの卽ち腕力容貌等に求められ、次で精神的なるもの例へば勤勉とか正直とかの德に求められたが、遂に諸多の德の背後に在る「人格」に求められ、來るべき所に到達したのであつた。之と共に善の行はるべき範圍は、始めは家族に限られたが、次で部落に次で種族に、やがて國民に及び、今や將に國境を越えて人類にまで及ばんとしつゝある。然しまだ完全には人類が同胞となるには至らない、戰爭と云ふ場合に國民の外なるものは、同胞の埒外に置かれるからである。善が貨財等の物に求められた時に、物は有限の存在しかないから、善の行はるべき範圍も自ら局限されてゐた。善が人格に求められた時、人格の完成は無限に及び毫も他人と牴觸することがないから、善の行はるべき範圍も亦自ら國民に又人類にまで及ぶに至つたのであつた。

善が人格の完成と云ふだけでは、餘りに抽象的であつて、現實にいかなる行爲を爲すべきかを決定する指針とならないと云ふかも知れない。然し幸にしてこゝに法律道德等の社會制度がある、之等の制度は吾々に內在する人格の完成への希求を實現してゐる、「盜む勿れ」「殺す勿れ」「正直なれ」等の法律的道德的命令は、決して吾々の內面的要求と沒交涉ではない、自己の成長と同胞の成長とへの要求を具體化したものなるが故に、此の命令に遵ふことが、吾々の善き行爲となる。だが更に一步を進めると、單に之等の命令を遵守することは、通常の意味に於て善き行爲にはならうが、眞正の善き行爲とはならない。それには人格完成の意識を以て行爲が爲されることを必要とする。かかる意識の生ずるには相當の發達の段階を經ねばならない。幼少時代の人間は、一意法律道德の命令に遵つて、他を顧みることを知らない。次で年長じた後あるものは、之等の命令に何故に遵はねばならぬかと云ふ疑問を懷き、始めて命令の背後にある人格完成の概念に到達する。具體から抽象へと推移した時に、始めて善を把握する。この以後彼は善の意識を以て行爲を爲し、行爲は始めて眞正の善き行爲となるのである。以上は吾々の善に及ぼす社會制度の關係を考察の中に置いたのであるが、飜つて善卽ち人格完成と云ふ點から出發して、社會制度を觀察する必要が起る、こゝに道德哲學は社會哲學に接續する。

社會制度は前述したやうに、吾々に內在する善卽ち人格完成の意識の表現である。之を制度の一なる道德的思想に就てグリーンは次の如くに云ふ。

すべての道德的思想は、理性にその源泉を持つ。卽ち出來うる限り自己の完成に近づかんとする行爲者の理念にその源泉を持つのである。かく云へばとて行爲者がその進歩のいかなる段階に於ても、此の理念を抽象的の形に於て、自己に說述し得たと必ずしも云ふのではない。恰も苟くも自然に關する智識を獲得する以上は、いかなる智識階段に於ても、自然の統一と云ふ概念を抽象的の形に於て、必ずしも自己に說述しうると云へないのと同じである。その實自然の統一と云ふ概念は、終始彼れの智識の獲得を條件付けるのではあるが、理念は始めに抽象的な表現を形成してから、存在に來るものでもなければ、活動し始めるものでもない。此の抽象的の表現は、具體的の經驗——それは此の理念によつて可能とされたものであるが——の分析の結果、始めて到達しえられるのである。かくて吾々は自己の經過し來れる自己改善の經驗を分析することによつて、始めて自己完成の理念を抽象的の形に於て表現することを學ぶのである…。此の理念にすべての個々の道德的思想は——その源泉を發するのである。尤も之等の思想の抽象的表現は、その源泉たる理念の表現よりも、ずつと早く到達するものではある。

社會制度は一方に於て吾々をして人格の完成を爲さしめる條件を爲すと共に、他方に於て吾々の善の意識を喚起すると云ふ教育的作用を爲す。卽ち法律が殺す勿れ盜む勿れと命令すればこそ、吾々は殺人と偸盜とから防がれて、安穩に生活を營みうるのである。又制度は善の意識の實現なるが故に、制度はその實現する善の意識を助長する職能を持つ。之をグリーンは次の如くに云ふ。

かくて市民生活の制度の價値は、それが意志と理性との諸能力を發揚せしめる作用に係つて存する。その特殊の異例は今暫く別として、その一般的結果から云ふならば、制度は人をして外なる力の爲めにあちこちに驅使せらるゝことなきやう、自己を滿足せしめんとする思想によつて、自由に自己を決定しうることを可能にするものであり、かくて制度は意志と稱せらるゝ彼の能力を發揚せしめるのである。又更に制度はすべての人が他人の幸福に貢獻しうる社會組織の一員として働くことにより、彼の理性卽ち自己完成の理念を發揚することを得しむるものである。

社會制度の意義がかくの如くであるならば、制度の任務に關して二つの原理が派生する、一は制度は社會の成員の人格の成長を目的とするが故に彼等の人格の成長を阻止するが如き制度は、凡そ制度の存在の目的に反すると云ふことである。第二は成員の人格成長の障害となるべきものを除去し、進んで成長に必要なる條件を供與せよと云ふことである。制度は吾々の善の意識の實現ではあるが、善の意識そのものが不斷の進化の途上にあり時の制度が善の意識を實現する程度も、決して完全ではありえないから、制度と善の意識と合致しないことが起りうる。此の時吾々は社會制度の改革を企圖せねばならない、而して前述の制度の任務に關する二つの原理が、改革の指導原理となるであらう、然らばグリーンの當時の英國の社會制度は、此の原理に徵して果してどうであつたか、こゝに吾々は社會思想に接續する。

(2) 社會思想

以上の哲學に基礎付けられて、グリーンの當面の社會に對する態度卽ち社會思想が決定された。そこで吾々は本篇第二項に述べた「時代の要求」の一節を思ひ返す必要がある。前世紀の中頃を過ぎて、資本主義が勞働者階級に對してその病弊を現はすや、勞働者を保護しようと云ふ勞働立法の必要が、主として保守黨の人々から唱へ

られ、從來自由放任主義を標榜して來た自由黨は、その主義を固守すべきか勞働立法に贊成すべきかの去就に迷ひ、自由主義を根本的に再檢討し、出立を新にする必要に迫られた。此の要望に應じて一八五九年ミルの「自由論」は現はれたが遂に要望を充分に滿たすことが出來なかつたのであつた。自由黨は新時代に處すべき社會思想を渴望してゐた。而も來るべき社會思想は、從來の自由主義と內的聯關を持つものでなければならない。勞働立法に贊成することは、自由主義に矛盾するのであるか、若し自由主義に矛盾しないとすれば、從來自由主義によつて主張された信仰の自由とか言論の自由とかは、自由主義の內容から削除されねばならないのか。之等の問題が哲人の手に托された、何故なれば主義を前提として、それから派生する結論を扱ふことは哲人を俟たなくともよからう。然し主義そのものを前提に遡つて批判することは、哲人の能力を俟つて始めて可能だからである。之がグリーンに課せられた課題であつた。

彼は前述した社會哲學上の原理に立つて、當時の英國の社會制度を見た、その時第一に彼れの眼に映じたのは、社會の成員の人格の成長を圖るべき制度が、却て成長を阻止しつゝあることである。例へば信仰とか思想とかは、人の內面生活であつて、國家の權力の如何とも指を染めえざる領域である。然るに權力を以て之に干渉する時に、人は內面に於て依然として從來の信仰や思想を抱きつゝあるに拘はらず、外部からの干渉により異る方向へ向ふべく强要され、內面に動搖と不秩序とが生ずる、之は自然なる人格の成長に反する、況んや强要に從ふは、刑罰に對する恐怖の故であり、安逸平和を貪らんとする利己心を誘發することにより强要するとは、人格の成長を企圖する社會制度の本來の目的に矛盾する。彼は云ふ。

> 社會的關心よりして流れ出づべき性質の行爲に對して、刑罰の威嚇によつて之を直接に强要することは——かくの如き行爲を要求する法律は、必然に之に從はざる場合に刑罰を課することを前提とするものである——かゝる社會的關心の自然的流露に干渉するものである。さうして之によつて權利を有益に行使する條件たる能力の成長を阻止するものである。

かくして之等の內面生活に對して、國家の爲すべき任務は、干渉を爲さずして自由に放任することである。此の限りに於て彼は信仰の自由言論の自由等を主張した從來の自由主義を肯定する。然し等しく從來の自由主義的要求を是認しながら、彼は人格の成長の名に於て之を云ふ。その論據に於てベンサム、ミルと異ることが注意されねばならない。既に論據が異るが故に、ベンサムが自由の名に於て反對した勞働立法は、彼によつては等しく人格成長の名に於て是認されることとなる。卽ち彼は社會哲學上の第二の原理に立つて、制度は果して成員の人格の成長に必要なる條件を供與しつゝあるかを見た時に、彼れの眼前にプロレタリアの貧窮の狀況が髣髴として現はれる。彼は「貧窮に對して神聖なる憤激の念を發し」「プロレタリアの出現は文明失敗のインデックスなり」とした。善の行はるべき範圍が家族より徐々として擴張し、今や國民に及びたるに拘はらず、國民の中の勞働者階級は、恰も善の行はるべき範圍の外なるかの如くに、考慮の外に置かれてゐた。彼は之に對して云ふ。

> 吾々が兄弟同胞と稱しつゝあるもの、永遠の運命に於て吾々と共に在るものと宣言しつゝある民衆の一群が、疑ふべからざる人格の潛在力を有するに拘はらず、行爲に於て之を實現せしむるの機會をば、他人が與ふべく努力すべき筈なるに、かゝる機會を與へずして放任しつゝある間は、吾々は耳目の快樂、智識追求の快樂、社交の快樂、演說や作物の賞讚

の快樂を享樂すべき時ではない。……

かくして古代道德學者の視野に入らざりし自己抑制の各種の形態が發生する。若し吾々自身の時代の倫理的進歩なるものを求めうべしとせば、正にこゝにこそそれを求める權利がある。……

然らば之等プロレタリアに對して、國家は當然に資本家と勞働者との契約に介入して、後者の爲に有利なる勞働條件を確保すべきである。彼は云ふ「なるほど道德的善を直接に助長することは、國家の任務ではない。何故なれば道德的善の善たる本質上、國家が之を爲すことは不可能であるからである。然し條件を缺くが爲に、人間能力の自由なる發揮が不可能となるべきその條件を保持することは、正しく國家の任務である」と。だが此の時に反駁が來るだらう。かかる保護的立法は、資本家勞働者何れもの「個人の自由」に反すると。此の反駁に答へたのが、彼れの一八八一年レスター市の自由黨の會合で爲した講演「自由主義的立法と契約自由」と稱する劃期的の論文である。之によれば從來「自由」の名に於て幾多の改革が爲されたが、それは「自由」が終局の目的だからではなくて、實は人格の完成が終局の目的であり、此の目的に對して從來「自由」が必要な手段だからであつた。「自由」の名に於て爲されることと、「人格完成」の名に於て爲されることとが、偶然にも合致してゐたからである。既に偶然の合致であるが故に「自由」と「人格の完成」の爲とは、互に對立し反撥する時が來らねばならない、而して今正にその時に到達したのである。「自由」の名に於て、いかに社會制度が本來あるべき目的たる「人格の完成」が阻止されつゝあるか。「自由」とは「强制なき狀態」を意味し、强制なきことは確かに人格完成に必要な一條件には違ひない、然し既に一條件に過ぎないから「自由」よりもより必要な條件の前に路を讓らねばならない。强制なき狀態は消極的自由であり、「自己の意志を實現しうる狀態」は積極的の自由である。此の積極的自由の爲に消極的自由は去つて、別の手段が行はれねばならない、之が正に勞働立法である。從來自由主義の名に於て爲された改革は必要であつた。何故ならば偶然にも人格完成の障害となるべき强制が、自由の名に於て排除されたからである。然し今や曾ての自由主義を基礎付けた根本目的、卽ち成員の人格の成長の名に於て、勞働立法に直進することこそ、啻に從來の自由主義と矛盾せざるのみならず、却て首尾一貫するものだと云ふのである。

更に別個の反駁が來るかも知れない。勞働立法は資本家の私有財產權を侵害することにならないか、而して私有財產制度はグリーンが述べた如くに「自由なる道德的生活を爲すに纏はる一切の桎梏よりして、個人を解放する爲であり、之が爲に必要なる財貨を彼に供する爲である」ならば、不可侵の制度として保護さるべきではないかと。之に對してグリーンは答へる。

されど歐洲に於て、その一般政治的發達の一部としての所有權發達の現實の結果を見るに、事態の窮極する所、すべての人が所有を爲し得る筈なるに拘はらず、事實に於て大多數は之を持ち得ないと云ふ有樣である。人生の計畫を實現し、美しき思想を表現し、善き意慾を實現し得べき永久の手段として、之が價値ある意味に於ては、大多數の人は之に與らないと云ふ事情である。法律の眼に於て、彼等も所有の權利を持つ、然し實際に於て彼等は、自由なる道德的生活に必要な

る財貨を得ることと、善き意志を卽ち社會の幸福に對する願望を、助長し表現し實現せんとする機會を持たない。唯勞働しか持たざるもの、而も辛うじて日々の生活の爲に資本家に之を賣らざるを得ざる人間は、所有と云ふことが奉仕すべき倫理的目的より見て、全然所有の權利を否定さるゝものと云ふに等しい。

一人に依る所有が他の人の所有を妨げ、一群の人がその意志を實現する財貨を獲得し保持する力を保證される反面に、その事の爲に、他の者が事實上同一の力を否定されるが如きことあらば、その時に於てのみ所有はその理念と矛盾したる狀態に於て保持さるゝものと云ふべく、出來うるならば廢止されねばならない狀態に在るものと云はるべきである。その場合に於てこそ、所有は窃盜であると云ふは宜なるかなである。

然らば彼は私有財産制度の廢止を唱へて、社會主義にまで到達したかと云ふに、さうではなかつた。彼は私有制度を以てプロレタリアの貧窮の根本的原因とは思はなかつた。現存資本主義の下に於ても、プロレタリアは裕福になりうると斷じ、寧ろ弊害の眞因は、英國の土地所有制度にありとして、之に對してはかなり急進的の改革意見を提唱したが、私有財産制度に對して根本的變革を試みようとはしなかつた。かくして彼は自由放任主義に反對して、勞働立法に贊成し、之こそ却て從來の自由主義に忠實なるものだと稱したが、所謂社會改良主義の範疇に止まつて、社會主義に至らずして停止した、後人之を「新自由主義」といふ。此の立場に就ては後に批判を加へよう。だが千八百七八十年代の問題は彼によつて見事に解答された。資本主義は不可侵ではなくなつた。資本主義の修正は、信仰の自由、言論の自由等と矛盾することなく、同一の論據に於て企圖されうることが明かとなつた。

(七) 批判

グリーンの手に於て、從來の自由放任主義は社會改良主義にまで展開され、而も從來自由主義の名の下に主張されて來た信仰の自由や言論の自由等は、依然として保持すべきことが確立された。彼は議會政治卽ち政治上の自由に就ては多くを述べてゐない。然し既に云はずして明かなるからであつた。かくて自由黨は社會問題の出現に際して、出所進退に窮したが、今や再び黨の指導原理を確立することが出來た。誠に彼れの思想は自由黨にとつて、起死回生の妙藥であつた。一八九一年ニューカッスル・オン・タインに於ける黨の例年大會で、彼れの後輩ジョン・モーレーとハーバート・アスクィスの努力により、黨は明白に社會改良主義へと轉回を聲明したのであつた。グラッドストーンは當時大會に缺席したが、古き自由主義の立場から、大會の決議に不滿であつたと云ふ。爾來自由黨はグリーンの思想的支配の下にあり、一九〇五年バンナーマンの自由黨內閣（後のアスクィス內閣）成るや、ビスマルクの社會政策をさへ凌ぐ活潑な社會政策に着手したことは周く人の知る所である。ベンサム、ミルが十九世紀前半を支配した如く、彼は十九世紀末から廿世紀大戰前までを支配したのであつた。

だがグリーンの解決した課題は、自由放任主義が社會改良主義かといふだけのことではなかつた。本篇第二項「時代の要求」で語つたやうに、當時解答を迫つてゐたのは、科學と道德藝術宗教との對立相剋であつた。否更

に一歩を進めれば、ベンサム、ミルの經驗主義の哲學は、却て科學の崩壞に歸結することであつた。後の問題に就て多くの人が氣付いてゐた譯ではなかつた、然しやがて氣付くであらう、又夙に氣付くべきであつた。前の問題は、既に喧しき焦眉の論點であつた。而して多くの人は、闇を手探るが如くに、道德藝術宗教と科學との何れをも否定せず、而も何れも夫々の安住の領域を認める新しき哲學を要望してゐたのであつた。グリーンは此の要望に答へて、こゝに理想主義の哲學體系を提供し、科學を既倒に回し、道德藝術宗教の爲に門戸を開き、更に此の哲學の上に新段階に發展した自由主義なる社會思想を置いた。彼が一八六八年に發表した「人生に關する當代流行の哲學」に於て宣明した、「自由ならんとし、事物を理解せんとし、人生を味はんとする」當代青年のよき傾向に照應する新しき哲學は、思想界に與へられた。彼は壯年時代の宿望を見事に達することが出來た。

今にして彼れの思想體系を諦視すると、その着眼は非凡にしてその構想は雄大である。曾てのジェレミー・ベンサムの體系も亦、その規模の宏壯なることに於て、グリーンと匹敵する。だがベンサムは自然主義を以て貫徹せんとし、遂に破綻を暴露せざるをえなかつた。之に代置されたグリーンの體系は、哲學に於て本體論、認識論、人間觀、道德哲學、社會哲學を網羅し、之に嚴くに社會思想を以てし、上下渾然として調和し、之を貫くに理想主義の一元を以てする。殊に彼に多とすべきは、通常の人に於て調和しえざる學風が、少しの無理も不自然もなしに、彼れの人格に於て調和されてゐたことである。第一に彼は哲人であつた、殊に理想主義を奉ずる哲人であつた。哲人殊に理想主義の哲人は動もすれば獨斷妄信に陷り易いか、又は現實と離れた空虛な抽象に耽り易い。然し彼は獨斷の上に眠ることなしに、常に批判し檢討することを回避しなかつた。彼は理想を抱懷してゐた、然し彼の足は現實を離れることなく、彼は現實の中に理想を眺め、現實の內に理想を浸透せしめんと欲した。彼れの理想主義は論理を飛躍した非合理的のものではなかつた。嚴密なる科學的追窮に耐へうるものであつた。凡そ理想と科學と云ふ、一見對立するかの如くに思はれるものは、彼に於て立派に調和してゐたのであつた。第二に彼は學徒であつた、殊に大學に於ける哲學の學徒であつた。多くの場合に學徒は象牙の塔に隱遁し、現實の社會から沒交涉であるべく想像されるに拘はらず、彼は本篇第四項「生立」の所で述べたやうに、或は國會議員の選擧に或は教育制度の改革に、或は地方行政に或は禁酒運動に關心を抱いて、自ら活動したのみならず、彼が現實社會への關心は、その思想體系の中に躍動してゐる。彼は學徒ではあつたが、他面に於て憂國慨世の志士であつた。第三に彼は理想主義者たりしに拘はらず、改革進歩の人であつた。由來理想主義と保守主義とは同一視され、ミル以來保守主義に反對するが故にとて、理想主義に反對するものは尠くなかつた。然し彼の理想主義は決して保守主義ではなかつた。今日に於てこそ、社會改良主義は不徹底だと誹られようとも、グリーンの當時に於ては、急進的であつた。シドニー・ウェッブはその「英國社會主義史」の中で、グリーンを以て學界の急進派に數へたのである。彼にとつて理想主義は曾に保守主義ならざるのみならず、經驗主義こそ却て保守宿命に陷ると云ふことが、彼を驅つて理想主義を採らしめたのであつた。之を要するに、理想と科學、學問と實踐、理想と改革進歩、從來調和すべからざるが如く思はれた對立物が、彼に於て各々その所をえて安住することが出來た。グリーンに

偉とすべきは、此の點にあらうと思ふ。

だがグリーンの思想體系も決して缺點なきものではなかつた。之を次の三點に分けて批判することが出來ると思ふ。第一は彼れの哲學である。理想主義を以て貫徹しようと試みたことは正しい、然しその體系の內部に於て、多くの疑問を挿みうる個所あること、同一の用語を多義に使用して曖昧ならしめたこと、意を盡さずして說明を拋棄してあること等が擧げられる。私は「グリーンの思想體系」で之を指摘したが、今は餘りに細微に亙るので省略しよう。彼れの爲に遺憾なりしは、彼が四十六歲の壯年に於て夭折したことであり、生時自ら手を加へた著作は「倫理學序說」のみであつたことである。彼こそ八十の高齡を惠んで、推敲を盡さしめたかつた。第二に彼れの自由主義に就てである。彼自身は自らを自由主義者と云はず、ベンサム、ミルの自由主義を發展させたとは云はない、自由黨が彼れの思想を採用し、後人が新自由主義と稱したに過ぎないから、彼を自由主義の立場から批判するのは酷ではあるが、彼は「自由」を「强制なき狀態」と稱しながら、別に又「自由」を「自己の意志を實現しうる狀態」と稱して、後者の名に於て社會改良を肯定したが、自由の語義を二樣に解して、積極的の自由の名に於て社會改良を肯定するよりも、依然として「自由」を「强制なき狀態」と解することに一貫し、唯從來は「國家からの强制なき狀態」のみを自由と考へたが、今や「資本主義からの强制なき狀態」が、自由主義の目標たるべきだと云ふ風に主張したならば、自由主義を古今に通じて一貫した社會思想とすることが出來たらうと思ふ。況んや積極的自由なるものは、屢々保守專制主義者の壓迫干涉を容認する危險があるに於てをや。第三は彼れの社會改良主義に關してである。彼はプロレタリアの貧窮を資本主義に歸せしめずして、その原因を英國の土地所有制度に求めたのであつた。土地所有制度の改革すべきは、固より云ふまでもないが、之をプロレタリアの貧窮の最大原因として、私有財產制度の根本的變革を看過して、社會改良主義に停止したのは、彼れの體系中最も批判さるべき點であらう。若し全成員の人格の完成に必要なる條件を供與することが社會制度の目的なりとせば、資本主義自體を容認して、その埒內で營む改良施設は、結局姑息彌縫の糊塗策に止まつて「必要なる條件」を供與しえず、常に惡しき循環（ビシアス・サークル）に終るの外はない（拙著「改訂社會政策原理」二八五—三〇四頁參照）。彼は竿頭一步を進めて社會主義にまで到達すべきであつた。思ふに彼は哲人にして科學者ではなかつた。彼は科學の爲に門戶を開いたが、自らが科學するものではなかつた。資本主義を解剖分析して、その弊害の出所を明かにするには、彼れの精力は限られてゐた。從つて當時有力なりしミルの「土地社會主義」やヘンリー・ジョージの「進步と貧困」(Henry George: Progress and Poverty, 1879.) 等に誘はれて、土地所有の變革を過重視し、資本主義の核心を把握することを阻止されたのであらう。

グリーン逝いて後三十年、英國哲學界は理想主義から「新實在論」(New Realism) へと轉移した。一八八九年のアレキサンダーの「道德的秩序と進步」(S. Alexander: Moral Order and Progress.) と一九〇三年のムーアの「倫理的原理」(G. E. Moore; Principia Ethica.) がその先驅であり、バートランド・ラッセル、ホイットヘッド、ブロード等之に續き、グリーンのオックスフォードに對立して、ケムブリッヂを中心として一學派を形成し

た。だが極めて最近に於て、不思議にも最近の自然科學の支持の下に、再び理想主義は擡頭しつゝある。グリーンの社會改良主義は「フェビアン協會」と「獨立勞働協會」とにより、社會主義にまで發展せしめられ、現に英國勞働黨の指導原理となりつゝある。勞働黨は自由黨の改良主義に對立して社會主義を採る、然しその哲學を理想主義に置き、その實現方法を言論の自由主義と議會主義とに求める點に於て、グリーンの思想體系を繼承しつつある。彼れの影響は此の點に於て、啻に自由黨のみならず、勞働黨にも及びつゝある。シドニー・ウェッブはその「社會民主主義へ」(Sidney Webb: Towards Social Democracy, 1916.) の末尾に於て、グリーンの道德哲學を以て自己等の立場の最良の表現であると云つたことは、之を示して餘りある。英國社會主義は今に至るもマルキシズムと對立して、世界の社會主義界を二分してゐるが、兩者の相違點はマルキシズムの唯物論に對して英國社會主義の哲學が理想主義であり、前者が社會主義實現方法として、暴力革命主義と無產者獨裁主義とを採るに對して、後者が議會主義と言論の自由主義とを採るに在る。而して英國社會主義の此の特異性は、それが自由主義に對立して發生せずして、自由主義を發展せしめ、それより蟬脫したる所に在る。かくてグリーンは自らの理想主義と議會主義とを、社會主義にまで浸透せしめ、之を以てマルキシズムと對立せしめるに至つた。

「以上私はベンサムからミルを經てグリーンに至るまで、舞臺を英國に取り經驗主義から理想主義へ、自由放任主義から社會改良主義へ、更に社會主義へと、思想發展の跡を辿つた。然るに舞臺を英國から獨逸へ轉じる時に、グリーンと同じくヘーゲルの影響を受けつゝ、その哲學と社會主義とを聯關させた思想家と、ヘーゲルの影響を受けつゝ、それをば唯物論に轉向せしめて、それと社會主義とを結合した思想家を見出す。前者はラッサールであり後者はマルクスである。私は先づラッサールを捉へ、次でマルクスに移らうと思ふ。」

第四篇　フェルヂナンド・ラッサール

（一）はしがき

十九世紀獨逸の社會思想界を眺めて、そこに儕輩を拔いて亭立する三個の巨人を見出すことが出來る、それはビスマルクとマルクス（暫らくエンゲルスを之と同一視して）とラッサールである。ビスマルクはその天才的の直觀を以て獨逸の問題を把握し、異常の氣魄を以て之を處理した點に於て、決して通常の政治家と目することは出來ない。その直接間接社會思想の動向に影響した點に於ても、彼を略いて獨逸社會思想を語ることは出來ない。之れ名著「十九世紀獨逸の社會的精神的潮流」（Gedanken und Erinnerungen, 1898）を讀んで吾々は、彼が獨逸の動向を適確に把握した頭腦に驚嘆せざるをえないが、然しその把握は多くは直觀を以てして理論的思索の結果ではない、從つて彼を社會思想家の列に入れることは出來ない。

獨逸自由主義者の中に指を屈するに足る巨人を見出すことをえないのは、誠に遺憾である。だが社會主義者の

中にマルクス、ラッサールの二人を擧げることが出來る。若し普通の順序から云へば、ラッサールよりも七歳の長あるマルクスを先づ傳ふべきであらうが、私は思ふ所あつてラッサールを前にしてマルクスを後にした、蓋し第一にマルクスが全歐洲的であるに反して、ラッサールは飽く迄も純獨逸的である、從つてラッサールを傳へることは獨逸を語ることである、而して獨逸を語ることが、正にマルクスを語る場合に於ても必要の前提になるからである。第二にラッサールはフィヒテ、ヘーゲルの理想主義の上に坐してゐて、恰もグリーンのそれと類似してゐるに反し、マルクスはヘーゲルに對立してその哲學を構成した、之れグリーンと接續して先づラッサールを語る所以である。第三に獨逸大衆に對する思想浸潤の前後から云へば、ラッサール主義が先であつて、マルクス主義がその後だと云はねばならない。最後にレーニンを語るに際して、ラッサールとレーニンとを接續させるよりも、マルクスとレーニンとを接續させる方が便利だからである。然し何れにしても此の前後の問題はさまで重要ではない、要するに筆者の便宜上より來ると云つて差支へはないのである。

フェルヂナンド・ラッサール（Ferdinand Lassalle）が吾々の興味を惹く所以は、先づ誰でも一般に擧げる次の二點にあるだらう。卽ち第一に彼が社會思想家にして同時に社會運動家であつたと云ふことである。彼が「全獨逸勞働者同盟」の首領として社會主義運動を率ゐたのは、一八六二年から僅か二年間であつた、然しその期間の短かさに比較して、獨逸全國を搖り動かした威力は非常なものであつた。私が今まで述べて來たベンサム、ミル、グリーンの如きは、何れもかく迄に民衆運動に身を投じてはゐなかつた。なるほどマルクスは決して運動と無緣ではなかつた、然しラッサールと比べると、全國を馳驅する一國の政黨首領と、ジュネーヴの國際聯盟で各國代表者と折衝する國際政治家との差があるやうな氣がする。稍ラッサールと似るものはレーニンであるが、政權掌握前のレーニンは地下潛行の革命策士の俤があつて、ラッサールの如くに、大衆の面前に活躍する社會運動家ではなかつた。だが社會運動者決して數が乏しくはない、ラッサールの後に獨逸にもリープクネヒト、ベーベルがあり、英國にも昔はブライト、コブデンあり新しくはケヤー・ハーディー、ラムゼー・マクドーナルド等がある。彼等と比較してラッサールを特徴付けるのは、彼が運動家であつて同時に思想家であり、他人の思想を宣傳するのでなく、獨自の體系を構成した思想家であつて、街頭に於て大衆の前に當面の時事を論じながら、その根柢に組織化された思想を所有してゐた點にあると思ふ。思想と實踐との有機的聯關、吾等その好個の適例をラッサールに見ることが出來るのである。

次に彼が吾々の興味を唆るのは、彼れの特異の性格に在る。社會運動者は單なる思想家と異る各種の能力を具へねばならない。大衆を牽引する人格的魅力、人心を激動せしむる情熱と雄辯、當面の事態に適應する俊敏の智謀、多端な事務を早急に處理する事務的才腕、之等の能力を具へる主人公は、既にそれだけで吾々の關心を惹くに餘りあるが、特にラッサールに至つては、異常の名譽心と優越欲との持主であり、大衆の幸福を圖る沒我獻身の運動の中に、人間的の煩惱は經と緯となつて織り込まれ、「全」と「個」との相剋抗爭が、彼ほどに赤裸々に表現されたことは尠い。彼は全生涯に少くとも三個の女性と交涉を持つたが、彼れの沒我的の情熱と主我的の執拗

とは、その愛慾の中にも浮彫の如くに現はれてゐる。而も彼れの正直さは、自己を包まず檢討し、隱す所なく之を表白せしめた。ラッサールの少年時代の「日記」、戀人ゾフィー・フォン・ゾンツェフに與へた「魂の告白」は、此の特異の性格の自己描寫として、誠に意義深き文獻である。苟くもインテリゲンチュアより出でて社會運動に身を投ずるものは、多かれ少かれ彼れの如く「全」と「個」との內的鬪爭を體驗しないものは少いが、彼れの場合には特にその程度が顯著であるだけ、此の抗爭を擴大鏡を以て吾々の眼前に髣髴せしめる。人はラッサールの中に自らの姿を眺めることが出來るだらう。

だがラッサールを現代に呼び返すに値するのは、之だけではない。彼が社會の前面に活躍した一八六〇年代の獨逸を、同時代の英國と比較する時に、いかに大きな差が二つの間に見出されるであらう。英國は近世の始めに近代統一國家を完成して、十九世紀に於ては誰が國家權力の構成者であるかと云ふ問題に逢着してゐた。此の問題を眞向から振り翳して、自由主義は支配的の原理となつてゐた。之に反して同時代の獨逸は、外は三十六の小邦に分裂して、獨逸と云ふ統一國家はまだ成立してゐなかつた、內に各邦は封建的の大地主が勢力を擁して、王權は之と結んで政權を獨占してゐた。自由主義は外國からの影響を受けて擡頭してゐたが、その力微弱にして畸形的成長をするより外止むをえなかつた。自由主義と踵を接して社會主義も擡頭した、然し自由主義が畸形的なると伴つて、社會主義——ラッサールがその先頭に立つ——も亦畸形的ならざるをえなかつた。卍の如く封建主義と自由主義と社會主義とが、互に複雜多角な交涉を持つて、夫々に特異の印象を刻してゐた。獨逸に於ける此の狀勢は克服されることなしに今日まで持ち越されてゐるが、然し之は敢て獨逸のみに限られたことではない、英米でなく露西亞でない私の所謂中間國家が、世界到る所に負はされてゐる悲運である。日本亦その例に洩れない。現代世界のファッシズムは、此の狀勢を考慮に置くことなしに理解することは出來ない。ラッサールの當時から既に存在してゐた此の三角關係、否、ラッサールその人によつて更に色濃く浮彫に現はれ出たこの三角關係は、現代の吾々にとつて決して無關心ではありえない。私にとつてラッサールとその運動とが興味あるは、主として此の點に係つてゐる。從つて私は此の點に重きを置いて、當時の獨逸の狀勢を稍詳しく述べようと思ふ。

（二）　獨逸に於ける自由主義

(1)

獨逸に於ける自由主義の多樣な、そして又跛行的な發展を理解する爲には、吾々の說明は佛蘭西大革命以前の獨逸に遡らねばならない。

大革命直前の獨逸は、英佛等の先進國に比べると、獨逸と云ふ統一的の國家を爲してはゐなかつた。墺太利國王を皇帝とする神聖羅馬帝國は、なるほど獨逸民族を糾合した帝國ではあつた、然し事實は全く四分五裂した王

國公侯國自由都市の雜然たる集合に過ぎなかつたのである。分裂した獨逸をいかに統一するかは、此の後に於ける獨逸の大きな課題であり、それが自由主義の發展に著しい影響を與へるのであるが、今は暫らく之を後に讓らう。唯之等の雜多な分子の中で、七年戰爭を經て素晴らしく頭を擡げた普魯亞が、墺太利の壘を摩するに至つたことだけを注意して置かう。

橫斷的に見た獨逸が複雜な小國の集合であつたやうに、縱斷的に各邦國の階級構成を見ると、こゝでも亦雜多な混亂が眼に著いて來る。最上層に封建的大地主貴族階級があり、その次にやがて大資本家（ブルジョア）として活躍すべき商工業階級がある、だが十八世紀末に於ける彼等の勢力は微々たるものであつて、今は僅にその萠芽を現はしたに過ぎない。その第三位に中產階級（プチ・ブルジョア）と呼ばれる一群がある。此の群も更に小別すれば、中小農工商の小資本家階級と、著作家、教師、醫師、辯護士等の所謂自由職業者となる。大資本家が勘かつた代りに小資本家の數は多く、彼等はやがて上位の大資本家と下位の勞働者との中間に介在して、苦難な地位に立つのであるが、今は苦しい未來を豫知する術もなく、華やかな存在を味ひつゝ國民の絕對多數を占めてゐた。自由職業者の中で特に注目を惹くのは、各地方に散在する大學の教授で、獨逸自由主義者の中に光彩を放つてゐたのは彼等であつた。最下層に勞働者階級がゐた、此の中にも都市の近代的勞働者と、手工業の徒弟職人等と、農村に於ける封建的大地主に使役される農業勞働者とがゐた。獨逸資本主義の發達が幼稚であつた爲、都市に於ても近代勞働者の數は少く、手工業勞働者の數は多かつた、更に都市と農村とを比較すると、まだ農業國であつた獨逸では、農村勞働者は勞働者階級の中でも壓倒的であつた。以上述べた所で見ても、封建的大地主と大資本家と中產階級と勞働者階級とに分れ、その各々が更に小さく分裂してゐることが分る。所がそれだけではない、各階級は更に橫斷的に都市と農村とによつて、利害や思想を異にして、中小農と中小商工と都市勞働者と農村勞働者とは互に相對立して、獨逸の社會構成をいやが上にも多岐複雜ならしめてゐた。勿論英佛等の諸國でも、之だけの分類は認められる、然し英佛に於て沒落しつゝあるものが、獨逸に於て依然として繁榮しつゝあることに相違がある。獨逸自由主義の負擔者は大資本家と中產階級と都市勞働者とであつた、そして彼等の對抗する目標は封建的大地主であつた。大資本家以下の階級に就ては、次項に於て再び觸れることとして、こゝでは先づ封建的大地主に就て語らねばならない。

所謂封建的大地主と呼ばれるものには、公侯伯爵及び僧侶等その稱號の異るものがあり、その所有する土地の廣さにも色々あつた、然し彼等は何れもかなりに大規模な土地を所有して次の如き特權を享有してゐたのである。第一に彼等はその領內に於て公權力を所有してゐた。彼等に使役される勞働者は農奴と呼ばれて、それは近代勞働者と違つて、人格者ではなく半ば人格にして半ば物件であつた、大地主は之等の農奴に君臨して、後には中央政府が行使すべき裁判權その他の公權を行使してゐたのである。第二に獨逸國會に列する議員は、大地主の代表者のみで、自由都市を除いては、その他の階級は發言權を與へられなかつた、大地主は自己の階級の獨占する國會を擁して、獨逸の問題を自己の有利に處理してゐたのである。第三に大地主は國家の經費を負擔することから免除され、租稅は他の諸階級に轉嫁されてゐた。現代にも大土地を所有する大地主は少くない、然し彼等は土

地に對する私法上の權利の主體ではあるけれども、公法上の特權を享有してはゐない。然るに當時の大地主は大地主たることよりして、以上の如き公法上の特權を行使してゐた、之が彼等を單に大地主と呼ばずして、封建的大地主と呼ばせる所以である。本文の主人公ラッサールは、その著「勞働者綱領」の中で次の如くに云つてゐる。

一個の貴族が自己の室内に於て、その祖先とその土地所有とを樂しむ限りに於て、いかなる公民も之に異議を唱へることをしない。然しながら、その貴族がその祖先又は土地所有を、國家内に於ける特殊の權力權利の條件とし、國家意志に對する支配の條件となさんとすれば、こゝで公民の貴族に對する憤恨は始まり、彼は之を稱して、封建主義者と云ふのである。

私は曩に彼等の所有する土地の廣さに大小の差があると云つたが、獨逸の中でも概して云へば彼の大地主の國たる露西亞に接近した地方、即ち普魯亞の東方に於て大地主の所有土地は廣大であつた。人は此の地方を稱して「エルベ河以東」(Ostelbe) と云ふが、普國の此の地方こそ獨逸大地主の中心であつた、之れ普魯亞が獨逸封建主義の中心であり、普魯亞の中でも「東エルベ」が獨逸封建主義の不拔な堅壘たる所以である。

封建的大地主が支配的階級であつたことは、獨逸も英佛も違ひはなかつた。唯相違は之等の大地主と國王との關係に在つた。國王も亦之等の大地主の一つであつた、唯その土地が廣大にしてその勢威盛んであつた爲に、同類の大地主を排して一頭地を抜き、國王として彼等を輩下に隷屬せしめ、大地主の行使した公權を没收して、中央政府に集中せしめ、近代統一國家を形成することが出來たのである。英國に於て最も早く佛國に於て稍遲れたが、吾々が今語りつゝある時代に於ては、兩國何れも近代國家を完成して、歐洲に臨んでゐた。所が獨逸殊に普魯亞では國王が英佛ほど輩下の大地主を壓倒することが出來ないので、之と妥協提携する傾向を辿つた、蓋し英佛では國王は漸く勃興したブルジョアジーと結んで、封建的大地主を壓迫しながら、自己の特出した地位を鞏固にしえたが、獨逸では國王の結ぶほどのブルジョアジーが未だ存在しなかつたからであらう。かくして國王と大地主との提携は、大地主(ユンカーと呼ばれた)はその次男以下の子弟を官僚として又士官として、國王の政府に參加させると云ふ形態で行はれた、こゝに於て國王と大地主とは、四位一體として結合し、牢乎不抜の陣營を構成してゐた。獨逸に於ける自由主義が對抗せねばならぬ封建主義の敵陣が之であつたとするならば、その戰鬪がいかに困難であつたかが、略々推察されるだらう。英佛では國王と大地主とは對立したが獨逸では結合し、英佛では近代國家は大地主の犧牲に於て成立したが、獨逸では大地主自體が近代國家の成立に割込んだ、此の點で獨逸はまだ完全な近代國家が成立しなかつたとも云へるし、又國家が封建主義を脫却してゐなかつたとも云へるのである。之を要するに佛蘭西大革命の起る以前の獨逸は、外は四分五裂の小邦の集合であり、内は複雜多岐の階級から構成され、而も封建的大地主は國王と結んで最も强固な勢力を揮つてゐた。

(2)

獨逸のかゝる狀勢の眞唯中に、一七八九年隣國佛蘭西に大革命が勃發した。大革命は自由主義の革命である。

自由主義は封建主義に對抗し、その一切の桎梏を打破することを使命とする。フレデリック大王がヴォルテールの門弟であつた一事でも分るやうに、獨逸は佛蘭西文化の支配下に在つた、そこで大革命は燎原の火の如き勢を以て、獨逸に自由主義を蔓延させた。それでは自由主義は何を獨逸に於て爲さねばならなかつたか。封建的大地主の公權と租稅免除とは廢止され、農奴は人である限り人格者として扱はれねばならない、國家意志の構成に參加するものは、單に土地所有者のみならず、あらゆる階級でなければならない、財產所有の自由、居住移轉の自由、營業の自由、集會結社の自由、信仰の自由、言論の自由等々が確立されねばならない。佛蘭西では之だけの事が成就された、だが獨逸では强大なる封建的勢力に對抗して、自由主義を押切るにはブルジョア、プチ・ブルジョアの勢力は餘りに微弱であつた、のみならず佛蘭西本國に於ける打續く混沌たる政局と、ナポレオン帝政の成立とは、さらでだに微弱なりし獨逸自由主義を萌芽の中に切斷して了つたのであつた。否それのみではない、ナポレオンの獨逸征服によつて、獨逸と佛蘭西とは敵對の關係に立ち、爰には佛蘭西的とは獨逸人の間の誇りであつたのが、今は憎惡反感の對象となつた。

だがナポレオン戰役は、獨逸の自由主義にとつて二つの大きな影響を與へた、その第一はナポレオンの領土となつたライン河の兩岸のライン・ウェストファリア王國では、大革命の自由主義が實現されて、封建的大地主は分散して、中小の自作農となり、營業の自由、言論の自由等の諸々の自由が與へられた。かくしてライン・ウェストファリア王國が滅亡して、此の地方が普魯亞の領土となつた後にも、ライン兩岸は獨逸資本主義勃興の中心であり、自由主義思想の搖籃地となつた。之と略々似たことは、ナポレオンの半ば屬國となつた南獨逸の諸邦、卽ちバヴァリア、バーデン、ウュルテンベルグ等に就ても云ふことが出來る。南獨逸の自由主義は、普魯亞の封建主義と相對立して、獨逸自由主義運動に樣々の役割を演じ、南獨逸では後に社會主義さへ自由主義化された、十九世紀末の獨逸社會民主黨內に於けるマルキシズム修正運動の中心が南獨逸であつたことは、こゝにその遠き原因を持つのである。

ナポレオン戰役の第二の影響は、第一のそれに比して更に重要である。フレデリック大王以來兵馬を以て誇りとしてゐた普魯亞は、ナポレオンの一擊に脆くも挫折した。その領土は切れ切れに割かれた。いかにすればナポレオンに反抗して祖國の獨立を回復しうるかと云ふ問題に逢着して、封建的大地主が獨占的の特權を行使する從來の政治思想では駄目だ、あらゆる人民が平等となり自由となることによつてのみ、國家に對する愛着を喚起することが出來ると考へられ、普國は自由主義的の改革に精進した。その衝に當つたのが、シュタイン（Freiherr von Stein）、ハルデンベルヒ（Karl August von Hardenberg）、フムボルト（Wilhelm von Humboldt）であつた。殊に一八〇七年十月九日に發布された「解放令」は、一八一〇年のルーテル祭（十一月十一日）以後、すべての民衆は自由であると宣言して、農奴を解放した、之はシュタインの功績であつた。フムボルトは文相となつて教育制度を改革し、教育の目的を各個人の人格の成長に置き、所謂人文主義の原理を大學から小學に至るまで貫徹させた。彼が教育の改革を企つるや、國王の讓位を賭しても爭はうと云ふ意氣を以てしたと云ふ。之等の改革の

多くは遠く後代に至るまで保持されたが、こゝに注意すべきは、自由主義的改革は下からの民衆によつて爲されずして、宮廷の重用した人材によつて上よりして爲されたこと、從つて自由主義は現存社會秩序と抗爭せずして、それと調和する限りに於て實現されたこと、更に自由主義は國家といふ全體を個人に分解して、個人の爲に主張されずして、自由主義は國家再興の爲に愛國の熱情を鼓吹する手段として使用されたことである。獨逸自由主義歪曲の第一步はこゝに始まる、恰も明治初期に於ける日本の自由主義が之と類似する。普魯亞を去つて獨逸全體を見ると、更に吾々の注目を惹くべき事實がある。從來も獨逸は四分五裂の狀態に在つた。だがナポレオンの一擊によつて獨逸が分割された時、今更に獨逸の悲慘な分裂が、まざまざと獨逸人に意識させられた。獨逸統一と云ふ欲望が、此の時始めて彼等の胸裡に湧起した。だがいかにして獨逸は統一さるべきか、獨逸の統一はいかにしても統一した目標と共通の意識とを必要とする、彼等は之を求めて自由にえた、卽ち自由の實現を以て統一した目標とし、萬民が自由たることを以て共通の意識たらしめようとした。自由主義はこゝに於てか國家統一の用具と化した。英佛では自由主義の前に近代統一國家があつた。自由主義は統一國家の存在を前提として、國家の組織改造を目標とした。然るに今や獨逸に於ては、自由主義は自己によつて統一國家を構成せねばならない。獨逸自由主義の歪曲の第二がこゝに始まる。況んや統一は平和裡にはなされない、普墺何れかを武力を以て排斥する必要があるとしたならば、獨逸統一の槓杆となつた自由主義は、更に兵力と結合せねばならない、自由主義の今一つの歪曲を私は次々に辿るであらう。

大革命を以て始まる廿五年の動亂の後始末をつけたウィーン會議の後に、獨逸はいかなる姿を以て現はれたであらうか。希望した獨逸統一は果されなかつた。大小三十六の邦國に分裂した獨逸聯邦が生れたに過ぎない。墺太利を議長とする聯邦議會はフランクフルトに設けられたが、唯獨逸一般の問題を議する權限を與へられただけで、各國は夫々獨立權を留保した。內に各國を見ると、南獨逸だけは憲法を撤回し、戰役中に爲された自由主義的改革は逆戻りした。一八一五年露西亞皇帝を盟主として成立した「神聖同盟」は、露墺普三國皇室の自由主義運動を壓迫する重石となつた。戰場の篝火の中に自由と統一とを夢みた愛國者は、いかなる絶望を以て此の反動を眺めたらう。ナポレオンをライプチッヒで敗つた大學の學生は、歸來「學生團（ブルシェンシャフト）」（Burschenschaft）を組織して餘憤を漏らしたが、それさへやがては苛酷な彈壓の下に置かれた。反動の三十年は萎微沈滯享樂耽美を齎らした。浪漫主義とそれに續く唯物論とは、此の傾向を助長し少くとも阻止しなかつたのである。

然し自由は失はれても、自由主義思想が殘ることはありうる。若し自由主義といふ思想が殘されてゐるならば、死灰再び燃える時がないとは云へない、然らば獨逸の自由主義思想は反動期に於てどうなつたか。こゝで私

は讀者の注意をベンサムの思想的背景に向けたいと思ふ。元來十八世紀末の自由主義に二つの潮流があつた、一は大陸の自由主義であり、他は英國のそれであつた。大陸の自由主義は自然法の哲學と自然主義の哲學との混淆であつた、大革命は大陸の自由主義の爆發であつた。ルッソーによつて代表される此の自由主義は、矛盾する二つの哲學の混淆であるから、之を一元的に統一しようとするならば、二つの方向が考へられた、一は自然主義に於て徹底することであり、之が英國に於てベンサムの歩んだ路であつた。他は自然法を發展させることであり、之が大陸に於てカントの踏んだ路であつた。ルッソーと米國獨立と佛蘭西革命とから感動を受けたカントは、やはり自由主義者であつた。こゝに自由主義者としてのカントを語る余裕はないが、理想主義の哲人としてのカントには、說明の連絡上一言觸れる必要がある。ルッソーが個人意志と一般意志とを區別した着想に刺戟されて、カントはルッソーの一般意志を普遍的自我として、之に理性（ヴェルヌンフト）と云ふ名前を與へた、理性を神聖不可侵の王座に据ゑたことに於て、彼は理想主義的個人主義者であつた。カント以後フィヒテ、シェリングを經てヘーゲルに至る獨逸理想主義は、幾多の課題を擁して次々に之を發展させた點に於て、思想史上極めて興味があるが、その課題の重要なる一つは、カントにより確立された理性の所産たる理想が、いかに現實と關係するかと云ふことであつた。

ヘーゲルに至つて理性は現實に具現するとされ、「法律哲學」の中で「凡そ現實的なるものは理性的なり」と云ふ命題で表現され、更に現實的なるものの一としての國家に就ては、「國家はそれ自體に於て理性的である」と云ふ命題を以て表現された。こゝに云ふ「現實的なるもの」「國家」の意味に就ても、又ヘーゲルが果して立憲王政の讃美者であり資本主義の說明者であつたのか、或は又普魯亞の封建的國家の肯定者であつたかに就ては、當時に於ても後代に於ても議論の存する所であるが（拙著「グリーンの思想體系」下卷八六六―八九一頁參照）、私は當時の現存する普魯亞國家の肯定者であり、而して反動期の普國が封建的國家であつたことから云つて、ヘーゲルを以て封建主義の肯定者であつたと解するのが正當ではないかと思ふ。學說の解釋は何れなりとしても、少くとも當時の思想界に於てヘーゲルの哲學は、保守反動を是認するものとして效果を及ぼしたことは爭はれない。若しヘーゲル哲學から理念としての國家と現實としての國家との對立を導出して、現實を理念によつて批判すると云ふ方法を採れば、ヘーゲル哲學は社會改革の原理となりうるだらう、之がヘーゲル左派の試みた方向であつた。獨逸に於てはフォイエルバッハ、シュトラウス、ブルノー・バウエル、マルクス、エンゲルスはそれであつた、英國に於てグリーン等が之に相當する。ヘーゲル左派から出でて別個の方向に轉じたのが、マルクス、エンゲルスであり、最後までその立場を固守したのがラッサールであつた。私は後の項で此の點に觸れるであらう。たとへ「ヘーゲル左派」への發展は不可能ではないとしても、ヘーゲル哲學の正統は保守反動の肯定であつた。こゝに於て大陸の自由主義は、ルッソーからカント、フィヒテを經て、ヘーゲルに及んで封建主義是認にまで發展し、自由主義は自己の對立物に轉化して、自らを解消させて了ふと云ふ奇觀を現出したのである。之を英國に於ける自由主義と比較して見よ、そこでも佛蘭西大革命への反動はあつた、そしてエドモンド・バークの浪漫主義歷史

主義反動主義を生じた、然し之と對立して自由主義はベンサムの哲學を基礎として反動期を乘り越え、やがて活潑なる復興を迎へることが出來た。然るに獨逸では反動の襲來と共に、自由主義思想は雲消霧散して了つた、たとへ此の後に於て自由主義運動は起らうとも、それは自由の項目を各個的に要求する政策の寄せ集めであつて、遂に組織化され體系化された思想の發現ではなかつた、獨逸自由主義の慘な姿はこゝにも見出されなくてはならない。

唯こゝに看過してならないのは、自由主義の一部たる經濟的自由主義の運命である。反動期に於て自由主義が氣息奄々たる時に、經濟的自由主義のみは、命脈を保つことが出來た。一八一八年の普國の關稅立法の如きは、自由放任主義の表現であり、一八三三年の普魯亞を中心とした「關稅同盟」の成立も、同盟の外部に對しては高率の關稅を以て對抗するが、同盟に屬する內部では、今までの關稅障壁を撤廢する意味で、經濟的自由主義の勝利であつた。一般には獨逸の經濟學は反自由主義を以て特色とするが、意想外に經濟的自由主義の勢力のあつたことを忘却してはならない、固よりそれが支配的勢力となつたのは、反動期の末期から五六十年代に於てであるが、一般的自由主義とは獨立して此の種の自由主義のみは、反動の波に浚はれなかつた。それは何故かと云ふならば、經濟的自由主義は一般の自由主義と獨立する限りに於て、何等現存社會秩序と抗流するものではない、從つて封建的國家も亦自己の原理の上に立つて、國家の生產の發展策として經濟的自由主義を採用しうるのである。此の事は一般自由主義から孤立した經濟的自由主義が、いかに末梢的なるものたるかを示すと共に、曩に述べたやうに組織と體系とを缺いた獨逸の自由主義が、分裂した散漫の自由主義と化したことを物語るものである。獨逸の文獻のみに親しむ社會思想家が、結局自由主義といふ渾然たる體系を把握することが出來ないで、個個の自由主義のみしか理解しえないのは、こゝにその原因が伏在するのである。

(4)

反動三十餘年の間に、獨逸の社會階級の構成の上に徐々として變化が現はれて來た。近代的工業の發達に伴つてブルジョアの數と力とが增大し、手工業が衰頽の傾向を辿り、工業勞働者の數が增加した。今やナポレオン戰役の當時のやうに、自由主義は上からの贈與でなしに、下からの要求として抗爭すべく、漸く勢力が備はつて來た、そして勞働者がその戰列に加はるべく擡頭したことも注意すべきである。

之より先き西部方面は鐵道が敷かれてゐたが、東部にも敷設することが軍事上の急務であつた、その公債募集の爲には、普國國王は是非とも國會を召集せねばならない、而も國會は今後定期的に國會を召集する約束がえられないので公債募集を拒絶した。此の紛糾の間に一八四八年二月革命が巴里に勃發した。國王は狼狽して三月六日、國會の定期的召集を承諾する聲明を發したが、時は既に遲かつた。三月十三日ウィーンに革命暴動が起り、反動の大本山メッテルニッヒさへ身を以て逃れた。既に三月十三日から十六日にかけて伯林市街に小競合があつたが、三月十八日大規模の示威運動が行はれ、翌朝まで續いた軍隊と衝突の結果、軍隊は敗北して市外に退去した。國王は廿九日自由主義者カムプハウゼン（Camphausen）、ハンゼマン（Hansemann）に內閣を組織せしめ、

四月六日の法律は、出版集會等々の自由を保證する外に、今後一切の法律の制定、豫算の確立、租稅の徵集は、議會の同意を經べき旨を規定し、四月八日の法律は、普通平等秘密直接の選擧による議會によつて憲法を審議することを聲明した。普魯亞既に然り、獨逸各邦何れも風を望んで之に倣つた。かくして自由主義革命の多年の宿望は漸く達せられたかの如くに見えた、史上の所謂「三月革命」(Märzrevolution) 卽ち之である。此の革命もやがて間もなく瓦壞するのであるが、革命が支配階級に與へた衝撃は大きかつた、此の以後三月革命の記憶は惡夢の如くに彼等を脅かした。更に民衆の側から云へば、此の後の自由主義運動は新なものを獲得するのでなくて、三月革命に於て一旦獲得したものを回復するものと考へられた。かくて三月革命は獨逸社會史上に前後を劃する分水嶺であり、人が屢々「三月以前」(Vormärz) と「三月以後」(Nachmärz) とを區別する所以である。

扨三月革命の經過と自由主義の動向とを辿る爲には、私は二つに分けて、先づ獨逸全體を見ることとし、次で普魯亞の內部を見ることとしよう。獨逸全體を見るが爲には、フランクフルトの聯邦議會を見ろに如くはない。革命勃發の後には從來有名無實たりし聯邦議會も活氣を呈して、眞劍に獨逸の問題を審議することとなつた。五月一日に聯邦議員の改選があつて、特にフランクフルトに集合した議員は、殆ど獨逸全土の人材を網羅してゐた、獨逸に於て之ほどの各方面の能力が一堂に會したことはなかつたと云ふ。所が政治的鍛練の不足した獨逸人は、かかる緊急の議會を徒に辯論の應酬に浪費し、三月革命の瓦壞と共に、遂に元の木阿彌に戻つて了ひ、永く獨逸民衆に議會制度に對する不信任を植ゑ付ける事例を提供することとなつた。此の議會の議事を詳述することは今の

問題ではないが、唯此の議會に於て自由主義者の二分派が明白に對立して來たことが注意さるべきである。自由主義者は議會に於て壓倒的の多數であつたが、彼等の間には二つの問題に就て意見の對立が現はれた。一は統一さるべき獨逸は君主國なるべきか共和國なるべきかと云ふことである。他は若し君主國なりとすれば、墺普何れの國王に王冠を與ふべきかと云ふことである。第一の問題に關して、大多數は君主國說を採つた。それは獨逸統一が平和裡に行ひ得ざる狀態の下に於ては、民衆の力のみでは統一が不可能と思つたからである。だが極めて少數のものは共和國說を主張し、啻に國體の問題のみならず、自由主義の主張に就て徹底的な貫徹を固執した、之に對して君主國論者は他の主張に就ても穩健緩和に傾いた、前者は「民主主義者」(Demokrat) と云はれ、後者は「自由主義者」(Liberal) と云はれ、獨逸語に特有な用語例が之から始まつたのである。

第二の問題卽ち王冠を墺普何れの國王に與ふべきかに就ては、事情はよほど複雜であつた。墺太利說に不利なことは、過去の獨逸聯邦が墺太利中心であつた、而して墺太利の政策は獨逸を不統一狀態に置くことであつて、從つて墺太利說は現狀維持に過ぎないと云ふことがその一。墺太利國は獨逸民族のみならず、ハンガリーの如き異民族をも包含してゐるから、獨逸民族の純一性を妨げると云ふのがその二。墺太利は反動の大本山であつた、普魯亞も五十步百步であるが、後者の反動は前者の使嗾に基づくものと思はれ、普國は新時代に適應しうる能力があるかの如く思はれたことがその三である。かくして事態は普魯亞に對して有利であるが、南獨逸の諸國バヴアリア、バーデン、ウュルテンベルグ及びサクソニーの如きは、歷史的傳統を持つ墺太利國王の下に卽くことは

甘んずるが、新しい成り上りの普國王に屈するを嫌ふと云ふ嫉視と、普魯亞の封建主義に對する南獨逸の自由主義との對立が與つて、少數ではあるが有力な反對がある。更に若し普魯國王に王冠を與へるならば、墺太利は默視しまい、從つて普國王說には當然に墺太利を獨逸より排斥せよと云ふ主張が包含される、之に對して墺太利を包含せよと云ふ意見が對立した、前者は「小獨逸派」(Kleindeutsch)と呼ばれ、後者は「大獨逸派」(Grossdeutsch)と呼ばれ、自由主義者の重要な分岐點となつた。後に述べる普國國王の三月革命の彈壓と、一八六六年の普墺戰役とは、一層南獨逸の「大獨逸派」の反普的傾向を强め、普國中心の自由主義政黨「進步黨」に對して別の自由主義政黨たる「人民黨」(Volkspartei)を作らしめるに至つた。事は一八六〇年代の末期であるが、ラッサールの「全獨逸勞働者同盟」は「進步黨」の「小獨逸主義」を繼承し、リープクネヒト、ベーベルの「社會主義勞働黨」は「人民黨」より出でて「大獨逸主義」を繼承したことを思へば、「大獨逸」「小獨逸」の對立は、啻に自由主義者を分裂せしめたのみならず、後の社會主義者をも分裂せしめたのである。その波及する所大なりと云ふべきである。更に「小獨逸主義」者は墺太利を獨逸より排斥せんとするならば、武力を以てするの外ないことを意識した、自由主義は既に國家統一と結合したが、今や更に武力と結合せねばならなくなつた、之が獨逸自由主義の歪曲の第三である。歪曲された自由主義はビスマルクの鐵血主義と對立するや、その目的は同一であり、單に手續に於て異るのみとなる。後の憲法鬪爭に於て自由主義者がビスマルクと銳角的に對立し得なかつた原因はこゝに在る。

以上自由主義内の對立を示したが、結局大多數は普國國王に王冠を與へることを決議して、代表者は國王に謁見してその意を傳へた。國王は一面墺太利に憚る所もあつたのであらうが、普國國王は人民より王冠を受けないと云つて拒絶した。此の時代錯誤の返答を受けて、自由主義の代表者は呆然として君前を退去したと云ふ喜劇を殘して、フランクフルトの聯邦議會は、獨逸の社會的前景から姿を消した。

轉じて普國内部に於ける三月革命の經過を見よう。自由主義者は政權を掌握して、之から封建主義の殘壘を陷れようとする矢先に、自己の背後にある味方の陣列を見て、進退兩難に陷つた。曩に述べたやうに、三月革命には既にプロレタリアが登場してゐたが、之等のプロレタリアの大多數は盲目的に自由主義に沒入して他を顧みなかつたが、少數の自覺したプロレタリアは、獨自の階級的利害を意識し、ブルジョアと早晩對立の時機來ることを見透し、自由主義運動に參加しながら、次の社會主義革命への過程としてのみ、自由主義革命の價値を認めた。マルクス、エンゲルスは既に倫敦から巴里から後にはケルンから、此の意味のことを述べてゐた。自由主義者は下層階級に對する蔑視的感情と、利害關係の對立とから、同じ自由主義戰列の中に調和しえざる對立物を意識した。前に强大なる封建主義者あり、後に勞働者階級がある、腹背に敵を受けて何れかと妥協するに非ずんば、窮地に陷るより外ないと考へて、彼等は前方の封建主義者との妥協の路を擇んだ。彼等はこゝに於て自由主義の貫徹を斷念し、自己に必要なる限度に於て自由を要求するが、勞働者が使つて以て自己に對抗するが如き自由には制限を加へることとした。自由主義者のかゝる心理の變化と同時に、國王大地主軍隊官僚等の舊勢力は一旦は奇襲を受けて退却したが、やがて陣容を整理して機を狙つてゐた。軍隊退去後伯林の警備は民軍に任された

が、財産所有者ならざるもの卽ちプロレタリアは民軍から除外され、遂に內閣の同意の下に一旦退去した軍隊は、三月三十日再び伯林に戻つた。革命は既に一歩元に戻りかけた。

五月一日新しい選擧法による議員の選擧が行はれ、憲法制定議會は五月廿二日から開かれた。院內の分野を見ると、大體四派に分れた、右翼はグラボウ（Grabow）を首領とし、中央右翼はウンルー（Unruh）ドゥンケル（Duncker）等に率ゐられ、中央左翼にはブッヘル（Bucher）有名な經濟學者ロードベルツス（Rodbertus）シュルツェー・デーリッツ（Schulze-Delitzsch）チーグラー（Ziegler）等があり、左翼にヨハン・ヤコビー（Johann Jacoby）ワルデック（Waldeck）がゐた。此の中で左翼が曩に述べた「民主主義者（デモクラート）」と云はれ、自由主義者中で最も急進的であつた。自由主義者は院內の多數を支配したが、以上の如き心理から、封建主義の牙城を突くことを爲さず、茫茫として討論に時を浪費し、結局成立した憲法草案は國王の同意をうることが出來ず、紛紜を重ねてゐる間に、六月巴里の勞働者暴動が敗北するや、之が全歐洲に對する反革命の烽火となり、十月三十一日ウィーンの反革命が成功するや、伯林の反革命も亦機至れりとなして、十一月一日自由主義內閣は罷免され、ブランデンブルグ伯首相となり、十一月十日將軍ウランゲル（Urangel）二萬の兵を率ゐて議會を解散し、十二日戒嚴令が布かれ、十二月五日國王は自己の憲法を公布し、新議會は翌年二月廿六日に開かれて、此の憲法の審議を行ふ間に又も解散され、五月三十日國王は議會の同意を經ずして、選擧法を公布したが、それは三級間接選擧制度で、最も極端な制限選擧であり、而も間接選擧であつた。普通平等直接秘密の自由主義の目標と相去ること餘りに甚しい、之れラッサールが「憲法本質論」に於て之を痛擊して止まざる所以である。曩に國王の公布した憲法は多少の修正を經て、五〇年一月三十一日確定され、後の憲法鬪爭で問題となつたのは此の憲法の條章である、人は之を「欽定憲法」（oktroyierte Verfassung）と云ふ。三月革命は一旦成功した後、急坂を降るが如くに瓦壞し、獲得したものは欽定憲法と三級選擧法とであつた。普魯亞の反革命に次で獨逸全土に就て略々同樣のことが云へるが、獨逸大衆の全體がかくも容易に反革命に屈服した譯ではなかつた。之より先マルクスはケルンに在つて「新ライン新聞」に據つて、執拗に反革命と抗爭し、四八年十一月にラインランドに反抗が起り、翌四九年五月三日にドレスデンに、次でラインランド、バーデン、ファルツ等に反亂があり、之に參加したものの多くは勞働者とプチ・ブルジョアであつた。然し何れも普魯亞の軍隊に鎭壓され、その鎭壓の方法が殘忍であつたことが、南部獨逸の普魯亞反感の原因となつたことは曩に述べた。本文の主人公ラッサールも亦ラインランド反抗に登場一役を演じたが、反革命への鬪爭は次の項に於て述べることとしよう。

かくして又反動の十年がその次に來た。

(5)

五十年代の反動は前期の反動と比較して、著しい對照を爲してゐた。此の十年間に獨逸は萎微沈滯する所か、科學藝術經濟等の各方面に亙つて到る所に活氣が溢れてゐた。資本主義は急速に發達して、ブルジョアーの鬪爭力

の自信が增大してゐた。その時反動時代が去ると云ふ豫感を與へたのは、一八五八年十月八日國王の病氣の爲、皇太弟ウィルヘルム一世（後のウィルヘルム大帝）が攝政に就いたことであつた。皇太弟は豫てから自由主義的の人として知られたから、此の時に「新時代」（Neue Ära）が到來したと思はれた。攝政は十一月五日保守主義のマントイフェル（Manteuffel）內閣を免じ、自由主義的のアウエルスワルト（Auerswald）シュウェーリン伯（Graf Schwerin）の內閣を作らせた。當時いかに攝政に多大の期待がかけられたかは、十一月行はれた議會の選擧に、三月革命の「民主主義者（デモクラート）」ワルデックやヤコビー等が候補を遠慮したことにも窺はれる。

一八五九年の伊太利戰爭は、獨逸全土を興奮の渦中に投じたが、七月十九日ハンノーヴァーの自由主義者フォン・ベンニグセン（von Bennigsen）は檄文を發して、獨逸は露西亞と佛蘭西との脅威に曝されてゐる、外國から自由を奪はれるよりは、普魯亞の爲に自由を讓る方が優ると云ひ、獨逸の統一と獨立との爲に主張した。此の趣旨に基いて、八月十四日のアイゼナッハ、九月十六日のフランクフルトの會議を經て、主として中部獨逸の自由主義者により「國民同盟」（Nationalverein）が成立した。歐洲外交の動きに連れて、獨逸の統一は今や空論の域を脫して、當面の現實の問題と化した、自由主義者は豫ての國民主義的色彩を前面に推し出したのである。獨逸が內政外交の兩面に何となく新時代を意識した時に、その意識を强化しその意識を表白させたのは、一八五九年十一月十日のシルレルの誕生百年祭であつた。シルレルはカントと共に佛蘭西大革命の思想に共鳴した自由主義者であつた。又彼は「オルレアンの少女」に現はれる如くに祖國を熱愛する憂國の志士であつた。又彼は高き

に憧れて自己を鞭つ理想主義者であつた。自由と祖國と理想とを求める時、此の人の想ひ出は、獨逸全民衆に進軍の喇叭にも等しき感激を與へたのであつた。

一八六一年六月九日普魯亞の自由主義者を糾合して、自由主義政黨「進歩黨」（Fortschrittspartei）と云ふ、之が恐らく獨逸に於ける最初の自由主義政黨と云つてもよからう。三月革命直後の議會に列した古强者も亦續々として參加した。ヤコビー、ワルデック、シュルツェー、チーグラー、ウンルー、ドゥンカーの如き之である。唯ロードベルツスとブッヘルとが漏れた。ヤコビー、ワルデック等の「民主主義者（デモクラート）」は曾ては共和制を主張したが、十年の時間は普魯亞に君主制を採るの外なきことを悟らしめたので、三月革命當時の如き對立は解消した。三級選擧制を廢して普通平等秘密直接選擧制を採るべきは、苟くも自由主義政黨たる以上は、必要不可缺たりしに拘はらず、進歩黨はそこまで進むことが出來なかつた。ワルデック、ヤコビー等の往年の猛者さへもが、此の點を默過したことは誠に遺憾であつた。進歩黨が普通選擧を要求しなかつたことは、ラッサールを知るに際して銘記して置く必要がある。創立後間もなく十二月六日行はれた選擧に於て、進歩黨は百六十一の議席を獲得して多數黨となり、意氣軒昂として所謂「憲法鬪爭」（Verfassungskonflikt）を開始した。

元來ウィルヘルム一世は典型的の武人であつた。王は伊太利戰爭の際に普魯亞軍隊の缺陷を感じ、既に前年軍備擴張案を提出してゐた。之が爲には年々一千萬ターレルの經費を必要とするが、獨逸の統一の必要を信じ、統一の爲に軍備の充實の必要を感じてゐる自由主義者は、此の案を拒否することを好まなかつた。そこで進歩黨は正

面から軍備擴張に對立することを回避し、別の路を採つて議會の權威を高めようとした。欽定憲法は豫算は議會の同意を要する旨を規定してゐるが、政府の提出する豫算案は大雜把な項目のみを示し、款項內の融通が自由であつた、之は議會の豫算審議權の趣旨に反すると云ふので、政府に款項を詳細にせよと要求し、一八六二年三月六日此の決議案は一四三對一七一の多數を以て通過した。政府は之を不信任投票と看做して議會を解散したが、國王は早晩軍備擴張で進歩黨と一戰する外ないと覺悟して、自由主義內閣を罷免して保守主義の新內閣を作らしめた。

解散後の選擧ほど普魯亞全國の興奮を喚起したことはない。果然五月二日の選擧によつて、進歩黨は議員數三五二の中で二五八を占め、保守黨は十名に低下した。曾に進歩黨の數が增大したのみならず、黨を引率する首領は、三月革命の勇將ワルデック、その流れを酌むホーヴァーベック（Freiherr von Hoverbeck）等であることによつて、その質に於ても往年の所謂「民主主義者」（デモクラー）に近いものとして現はれた。此の時政府は既に豫算の款項を詳細にすることを承諾したので、前議會の爭點は消滅してゐた。そこで進歩黨は正面から軍備擴張案に突進した。黨は現役年限を三年から二年に短縮するならば、擴張案に贊成しても宜しいと云ふ意嚮であつたが、軍備擴張案は否決された。こゝに於て國王と議會とは正面衝突を爲し、何れか一方が讓歩するに非ざれば收拾の路なき窮境に陷つた。

然らば國王は讓歩するか。王は一旦讓位を決心されたが、然し皇太子の拒絕に合ひ、陸相ローンの勸告に從つて、飽くまで鬪爭する決意を固め、巴里駐在の大使オットー・フォン・ビスマルクを招き、十月八日彼は首相の印綬を受け、十三日議會を解散すると共に、議會の同意を經ずして、軍備擴張を斷行し租稅徵收を敢行した。

ビスマルクも亦封建大地主の一人であつた、從つて彼も亦他のユンカーの如くに封建主義者であつた。然し一般のユンカーの視野は單に內政に限局されてゐた。そこに封建主義を提げて自由主義と鬪爭するだけであるなら、彼等は自己の階級的特權を維持する利己主義者に過ぎない。然るにビスマルクの眼は遙かに內政を越えて、國際關係に注がれた。彼は獨逸の統一と云ふ目標を揭げて、此の目的に對する手段として封建主義を基礎付けた。封建主義は自己目的より逸脫して、最高目的に奉仕する用具となつた。彼は從來自由主義者の獨占物であつた獨逸統一を、敵の綱領より奪取して封建主義に一道の活氣を鼓吹した。之に對して進歩黨は、ビスマルクの標榜する目的と尖銳に對立するをえなかつた、何故なれば彼等は多年獨逸の統一を看板として來たからである。兩者の異る所は、唯手段としての封建主義と自由主義との對立に在る。既に目的に於て等しければ、手段の相違は著しく迫力を弱めざるを得ぬ、之が進歩黨の前面に抗爭する場合の弱味であつた、果然數年後に進歩黨より分裂した「國民自由黨」（Nationalliberal）は、ビスマルクの與黨としてその驅使に甘んじたのである。然らば背面に對して、進歩黨は自由主義の純粹性を誇ることが出來たか。三級選擧制に滿足して普通選擧を要求せざる進歩黨、資本主義を批判する限りに於ては集會結社言論の自由を制限する進歩黨は、凡そ自由主義の原理を貫徹するものと云ふことは出來ない、之が進歩黨の背面に對する弱味であつた。今若し人あつて一八六二年の普魯亞に身

を投じたなら、彼は一つの課題を腦裡に浮べざるをえないであらう。進歩黨は果して自由主義に忠實なるや否やと。此の課題に答へるが爲に、フェルヂナンド・ラッサールは獨逸の政治的舞臺にデビューしたのである。

(6)

以上の說明によつて、獨逸自由主義が奈邊まで進みうるか奈邊に於て停止するか、その正體は略々白日の前に描き出されたと思ふ。

こゝに思ひ起されるのは、カール・マルクスが一八四八年十一月に書いた次の一文である。（「岩波文庫」長谷部文雄譯「マルクス・エンゲルス傳」九七―九八頁による）

一六四八年および一七八九年の「革命」は、新時代の入口に立つてゐると云ふ限りなき誇りの感情によつて鼓舞されたのであるが、一八四八年に於けるベルリン人たちの誇りは、彼等が時代錯誤を代表してゐたと云ふ事實に基いてゐた。：ドイツのブルジョアジーの發達は極めて緩慢であり、遲々たるものであつたから、それが封建制度および專制政治に對して危險となり始めたときには、すでに他方に於て、プロレタリアート、および都市人口中の、プロレタリアートと利害および思想を同じくする諸層が、それに對立してゐた。ブルジョアジーの敵の中には、その「背後」にある階級のみならず、その前面にある全ヨーロッパがあつた。一七八九年のフランスのブルジョアジーとは違つて、ブロシヤのブルジョアジーは、現代社會の全體をば舊秩序の代表者たる國王、貴族に對抗して保護する階級ではなかつた。それは、すでに國王とも民衆とも衝突する階級に落ちてゐた。そしてどちらの敵に對する關係においても優柔不斷であつた。けだしそれは、常に腹背の敵に眼を配つてゐたからである。それは、最初から民衆を裏切つて舊社會の代表者たる國王と妥協しようとする傾向をもつてゐた。けだしドイツのブルジョアジーそのものが舊社會に屬してゐるからである。：保守主義者に對しては革命的であり、革命主義者に對しては保守的であり：眼もなく耳もなく齒もなく何者もないやがて亡ぶべき老衰した動物――之れが、「三月革命」以來プロシアの國家を導きつゝあつたプロシア・ブルジョアジーの地位であつた。

之を英國の自由主義と比較してみよ、それが順風に帆を揚ぐるが如くに躍進したるに反して、獨逸の自由主義は醉步蹣跚踏踟逡巡、マルクスの痛罵を買ふに値した。それでは何故に獨逸自由主義は、かくも慘な姿をとらざるを得なかつたか。

上來述べた所を要約して、私は次の四點とすることが出來ると思ふ。

(1) 獨逸の封建主義は、國王大地主軍部官僚の聯合體に擁立され、對敵の强大なること英國の比ではない、況んや獨逸資本主義の發達が幼稚な爲に、自由主義の負擔者の弱體なることも亦英國と著しく異つてゐた。

(2) 自由主義は近代國家成立を前提として現はれるのが常であるが、獨逸では統一國家が未だ成立せず、自由主義は國家の統一、國家の獨立の手段として使用され、國家主義國民主義軍國主義と接近する危險性が多く、純粹性を保持することが不可能であつた。

(3) 英國では自由主義革命が成功して後勞働者階級が擡頭し、革命後に於て勞資の鬪爭が行はれたるに反し、獨逸では自由主義革命の未だ成らざるに、勞働者階級は獨自の階級的利害を意識した爲に、自由主義は腹背に敵

を受け、前面の戰ひに全力を傾倒しえなかつた。

(4) 政治的經濟的等一切の自由主義を綜合して、之に哲學的基礎付けを與へる卓拔な自由主義思想家が缺けてゐた。英國に於けるベンサム、ミル、グリーンに匹敵する思想家は、獨逸に求めて見出すことが出來ない。たとへ獨逸の複雜なる事情は、自由主義の修正を餘儀なくしたらうとも、始めより大勢を洞察して修正を理論付ける思想家がゐたならば、その場その場で讓歩し妥協して、自由主義の戰列を混亂させる愚を免れえたであらう。荊棘に富む多艱多難な路を辿らざるをえざりし獨逸自由主義は、誠に同情に値する、だが一半はそれが自己の思想を明白に把握せざりし怠慢と、思想を貫徹する情熱の缺乏とに歸せねばならない。自由主義者の採つて學ぶべきもの、吾等之を英國自由主義史に見る。自由主義者の省みて警戒すべきもの、吾等之を獨逸自由主義史に見る。

こゝで私は「獨逸に於ける自由主義」を一應打切つて、次に「獨逸に於ける社會主義」に一瞥を投じよう。

(二) 獨逸に於ける社會主義

(1)

ラッサールの出現に至るまでの獨逸の社會主義を語るには、先づ十九世紀初期の獨逸の資本主義を語らねばならない。英國が十八世紀の後半から一八二五年までに、既に產業革命を終へたのに引きかへて、獨逸は十九世紀の初めにまだ產業革命の聲さへ聞えず、牧歌的情緒の豐かな農業國であり手工業國であつた。

當時獨逸はまだ農業國であり、穀物と工業原料品の輸出國であつて、その輸出先は主として英國であつた。英國が穀物の保護關稅を設けてゐた時、いかに獨逸が苦しみ、英國が穀物條例を撤廢した時に、いかに獨逸が喜んだかを知るならば、當時の獨逸が農業國であり、後年の露西亞やバルカン諸邦の如くに、西歐の穀倉であつたかが分るだらう。一八四九年に於てすら、普魯亞で都市に住居するものは、人口中僅に二八・〇四パーセントに過ぎなかつた。他の獨逸諸邦を見ると、此の割合は更に顯著である。之を十九世紀後半以後の都市住居者の次の割合の增加を見ると、いかに前半に於て人口の大部分が農村に住み農業に從事してゐたかが分る。

獨逸帝國に於ける都市住居者の全人口に對する割合

一八七一年	三六・一%	一八八五年	四三・七	一九〇〇年	五四・三
一八七五年	三九・〇	一八九〇年	四七・〇	一九〇五年	五七・四
一八八〇年	四一・四	一八九五年	四九・八	一九一〇年	六〇・〇

何故に獨逸の資本主義が立ち遲れたかといふならば、第一には中世紀に東洋との交通がライン、ダニューブの河流を利用してゐた時に、獨逸は歐洲交易の樞要の地位を占めてゐたが、東洋との交通が喜望峰を經て開かれ、米大陸が發見されて世界交易の中心が大西洋に移るや、獨逸は取り殘されたのである。第二には三十年戰爭（一

六一八―一六四八年）以來獨逸は常に歐洲戰爭の中心となり、土地は荒廢に歸して人は產業を營む平和に見捨てられた。第三に獨逸工業の特色は亞麻工業にあつたが、英國で產業革命が行はれ、機械を以て製造されるや、獨逸のそれは到底匹敵することが出來なくて、之さへ沒落するの外はなくなつた。かくして獨逸は英佛の如き先進國に立ち遲れて、農業國として後塵を拜してゐた。蒸汽機關の數は一八三七年に四二三、馬力數は七五一三であり、一八五二年となるも前者は二、八三二であり、後者は九二、四六二となつたに過ぎない。之を一九一六年の前者の一〇三、三三八と後者の七、八〇〇、〇〇〇と比較すると、いかに十九世紀前半の獨逸の資本主義が幼稚であつたかが分る。

近代的大工業がなかつたことは、工業が絕無であつたと云ふことではない、當時の獨逸の工業は手工業であつた。之が農業國たることと並んで、當時の獨逸の他の特色であつた。都市に於ける手工業は中世的の嚴重な特權（ツン）組合（ント）の統制の下にあつた。いかに特權組合が後々まで獨逸に殘存してゐたかは、千八百八十年代にビスマルクが勞働保險法を布いた時に、此の特權組合を利用したことを以ても知られる。徒弟は親方となるべく、色々の規律に服せねばならなかつた。その一つが一定の修業期間を終へた後の諸國の巡歷である。獨逸の手工業の徒弟が遠く瑞西や佛蘭西を遍歷して、急進思想に觸れて歸國し、それが獨逸社會運動の一役を占めたことは後に述べるであらう。シュモラー教授の名著「十九世紀獨逸小工業史」（G. Schmoller: Geschichte des deutschen Kleingewerbes, 1870）の云ふ所によれば、一八三一年迄は親方徒弟の數は停止してゐたが、三四年以來逐年增加したと。

獨逸の工業が擡頭した時に、手工業の形態に於て先づ榮えて、近代的大工業に及ぶにはまだ時が相當に必要であつた。農村に於ける手工業は家內工業的形態を採つてゐた。こゝでは請負人の下受をする手工業者は、農業を本業とする農民であつた。他の諸國に見られると同じく、此の下受は凡そ搾取を極めたものであつた。農民にとつては副業として手工業は必要であつた、だが副業であつて主業ではないから、副業から受ける賃銀は、生死を決する唯一の所得ではない、こゝに於て請負人は假借なく彼等の賃銀を切下げた。後年の獨逸都市勞働者の低賃銀はこゝに源するとも云はれる。而して獨逸が英國の如き先進資本主義國と競爭する場合に、唯一の賴みとする所は、手工業を以てしても可能であるやうな商品を以て、又先進國の勞働者の賃銀とは比較にならない低賃銀を以てするの外はない。かくして雜貨は當時の獨逸を世界に表徵する商品であり、獨逸が此の商品を以て世界に活躍しうる唯一の條件は、農村の手工業者を搾取することであつた。此の狀況はつい近くに至るまでの日本と趣を同じくしたと云つて差支へないと思ふ。雜貨を除いては都市農村を通じて手工業は國內の需要を目的とするもので あつた。要するに農業國にして手工業國、之が前世紀の中頃に至るまでの獨逸であつた。だが近代的大工業が必ずしも皆無であつたのではない、ライン川の左岸とサクソニーとには、纖維工業と鑛山業とが大規模に行はれ出してゐた。然し之は微々たるものであつて、僅に後年の萠芽を現はしたに過ぎないのである。

翻つて當時の社會構成を見ると、四種の階級を見出すことが出來る。最上層に位するのは封建的大地主貴族（ユンカー）階級で、その次に資本家（ブルジョアー）階級があり、第三位に中產（プチ・ブルジョアー）階級、最下層に勞働者（プロレタリア）階級があつた。封建的大地主はその數に

於て僅少であるが、當時の獨逸を支配してゐたのは此の階級であつた、彼等に就ては前項の冒頭で既に述べた。その數量に於て壓倒的な地位を占めてゐたのは、第三位の中産階級である。彼等が一九三〇年代に於てすら、全人口の四三パーセントを占めてゐるのを顧みるならば、十九世紀の初期に於ける彼等の割合を想像することが出來る筈である。彼等の内容は多種多様である、都市に於ける中小商人、手工業の親方、農村に於ける中小農民の外に、後年知識階級と稱せられる教授著作者醫師辯護士等をも包含する。彼等の特色は、相互に有機的聯關を缺く不統一性にあり、更に他の特色は上部に封建的大地主下部に勞働者を控へた中間的存在たることに在る。若し上部のみを注意するならば、彼等は現存社會秩序を改革して、彼等により有利なる秩序を翹望するであらう、此の點に於て彼等も亦進歩的分子たりうる。だが彼等にして下部の勞働者階級を注意するならば、それと同列に伍することは到底堪へ難い、彼等をして存在の價値を意識せしめるのは、せめて勞働者と區別される點にあるからである。こゝに於て彼等は中間的存在ではあるが、上部との差別意識よりも下部との差別意識はより深刻である。中間的存在は浮動性を帶び易い、而もその浮動は下部への方向よりも上部への方向に傾き易い。かくして彼等は一旦進歩的傾向に立たうとも、狀勢の進展如何によつては、躊躇し逡巡し、やがて現狀維持の保守的傾向に陷る危險性に富む、何れにしても彼等は進歩的運動にとつて依頼し難い分子である。況んや手工業の親方は、中世的の特權に依存するが故に、復古的であり守舊的である點に於て、封建的大地主と一抹共通するものがあり、農村に於ける中小農民はその教養の低位にあることと、大地主との接觸の密なることに於て、之も亦保守主義と無緣ではない。かゝる中産階級はその數に於て獨逸を壓倒する。獨逸のみならず、私の所謂中間國家にとつて、看過すべからざる要素がこゝに伏在するのである。

資本家階級はその向ふ所に於て明確である、彼等は上部の封建的大地主に對抗して、その政治的特權を打破して自らが政權に參與し、その發言權を利用して、社會生活の各方面に自由を要求することである。彼等の此の要求に該當するイデオロギーは、卽ち自由主義である。勞働者階級の生成と膨脹とは、資本主義の發展の如何に係る、此の點に於て彼等は資本家階級と運命を共通にする、從つて資本主義に反對する封建的分子に對立する限りに於て、彼等は資本家階級と共同の陣列を布くことが出來る、だがそれは共同の抗敵に對立する限りに於てであつて、その後に於て資本家階級と勞働者階級との利害は、前面に現出する、資本家の停止する所は、勞働者の出立を開始する所である。所が當時の獨逸の勞働者階級は、當時の中産階級と等しく、その内容に於て複雜であつた。近代的大工業の勞働者はその數に於て未だ少く、大部分は農村の勞働者と都市の手工業の徒弟職人であつた。農村の勞働者はその知識の程度に於て遲れ、手工業の勞働者は、中世的特權組合の埒内に於て親方と對立するのみで、特權組合に執着する限りに於て保守的たることを免れない。十九世紀初めの獨逸資本主義の幼稚なるだけ、資本家階級と近代的勞働者階級とは、僅に地平線上に姿を現はしたに過ぎない。

以上の四階級、封建的大地主貴族と資本家と中産階級と勞働者階級との對立、更にその各々の細分類を一瞥すれば、當時の獨逸の社會構成の複雜多岐なること、社會動向の不明確さが觀取されるであらう。だが獨逸が澱ん

だ水の如くに停止してゐないならば、先づ動きは現狀を支配する封建的勢力に對抗して現はれねばならない、而して自由主義の名に於て現狀打破が叫ばれた。その運動の根幹を爲すものは、資本家階級であつたが、その勢力は未だ大を爲すに至らなかつた、こゝに獨逸自由主義の弱性の原因がある。中產階級も亦現狀を變更する限りに於て、自由主義運動に參加した、だが彼等の中間性浮動性は、やがて運動を半途停止の不徹底さに置いた、之が前項に述べた一八四八年の三月革命の挫折した理由である。勞働者階級も自由主義運動に參加した、だが彼等の中の進步的分子たる近代プロレタリアはその數に於て力に於て微弱にして、自由主義運動に有終の美を濟すに足らない、加ふるに彼等の間に移植された先進國の社會主義思想は、自由主義未だ成らざるの時に於て、既に資本家階級との間に利害の對立を意識せしめ、資本家の注意を背面に注がしめ、一路前面に直進することを躊躇せしめた。三月革命で生誕した自由主義が、產後間もなく夭折したのは、その原因の一つがこゝに在る。では獨逸勞働者の中に、いかに社會主義が浸潤するに至つたか。

(2)

獨逸社會主義の起源を、フィヒテの「封鎖商業國家」(一八〇〇年)まで遡ることは、こゝでは必要でない。今吾々が問題としつゝある千八百四十年代から出發することで充分であらう。當時社會主義の普及の爲に地盤を用意した二人の文人を先づ擧げて置かねばならない、それはハイネとベルネとである。彼等は共に猶太人で、生れながらに迫害された民族の反抗的精神を相續した。更に獨逸の警察は彼等を祖國から追つて巴里に移住せしめた。彼等は何れも社會主義に多大の同情を抱いてはゐたが、眞實の社會主義者ではなかつた。寧ろ急進的民主主義者の列に入れらるべきものであつた。然しその巴里からの通信は、保守的な獨逸を進步的な先進國と對照せしめて、多數の青年の民主的傾向を培養し、更に社會主義の爲への溫床としての役目を果したのである。

社會主義として當時存在したものに、二つの種類がある、一は佛蘭西の空想的社會主義で、サン・シモン、フーリエー、ルヰ・ブラン等の思想は、主としてローレンツ・フォン・シュタインの「佛蘭西に於ける社會主義及び共產主義の歷史」(Lorenz von Stein: Der Sozialismus und Kommunismus des heutigen Frankreichs, 1842.)により獨逸に輸入されてゐた。マルクスが「ライン新聞」を去る時に、かすかな佛蘭西社會主義の聲が聞えたと云つたのは、彼等の思想を意味したのであらう。英國のロバート・オーウェンが少しも知られなかつたのは、獨逸と英國との知的交涉が稀薄であつたのと、大革命以來巴里が自由進步の都市として、獨逸知識階級の注意を獨占してゐたからである。空想的社會主義の系統に屬するものとして、獨逸人ウィルヘルム・ワイトリング(Wilhelm Weitling, 1809—1864)がある。彼は仕立業の職人として、あの巡歷をしながら巴里に來て、サン・シモンやフーリエーの思想に觸れて社會主義者となり、一八三八年には「人類の現在と將來」を、一八四二年には「調和と自由との保證」を書き、何れも社會主義を表明し、始めは瑞西の獨逸亡命者の間に、後には英國のそれの間に、輝かしい勢力を揮つたが、マルクス、エンゲルスの光彩の前に遂にその姿を消すに至つたのである。

第二の社會主義は「眞正社會主義」或は「獨逸社會主義」の名を以て呼ばれたそれである。此の派の代表者は、モーゼス・ヘッス（Moses Hess, 1821—1875）とカール・グリューン（Karl Grün, 1813—1887）とである。彼等は何れもヘーゲル派に屬してゐたが、空想的社會主義の影響を受けて、社會主義者となり、エンゲルスを始めて社會主義者に改宗せしめたのはヘッスであつたと云ふ。エンゲルスと共にエルバーフェルトで雜誌「社會の鏡」(Gesellschaftsspiegel) を發行して、一時ライン州の社會主義の中心となつたのも、マルクスと共に「ライン新聞」の編輯に從事したのも、何れもヘッスであつた。だがヘッスとグリューンとは、社會主義をヘーゲルのイデオロギーに於て書き改め、自由主義に對立するに急なるの餘り、自由主義の必要を理解しえないのみならず、自由主義を無用として封建主義に協同する傾向さへをも示した。之れマルクスが「共產黨宣言」の第三章で「社會主義及び共產主義の文獻」を論ずるに當り、その第一項を「反動的社會主義」と題してその中に「獨逸又は眞正社會主義」を加へて、彼等が自由主義に反對なるは、一面に於て資本主義より來る資本の集中を嫌ひ、他面に於て革命的プロレタリアの出現を怖れるが爲であると云ひ、彼等のプチ・ブルジョア的反動性を批判した所以である。此の批判の中に等しく自由主義に反對しながら、自由主義の存在せざることを好む社會主義と、自由主義と共に歩み然し自由主義を經て之を超克する社會主義との差別が、吾々の前に髣髴し來るであらう。時は自由主義か封建主義かの決定點の前に立つてゐた。社會主義は何れに去就すべきかが、人を惱ます課題であつた。此の時先づ自由主義を、然る後社會主義をと、問題を解決した所に、マルクス、エンゲルスの社會主義の特異性が存在する。

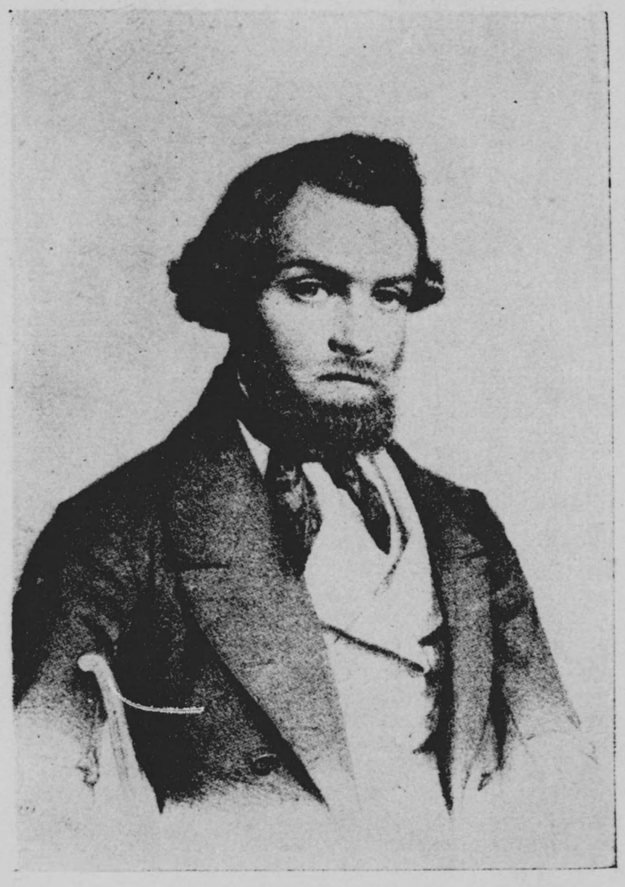
かくして前二者の社會主義を排して、獨逸社會主義を構成した所謂科學的社會主義が述べられねばならない。

こゝではマルクス、エンゲルスの思想體系の構成過程や、その體系の內容を語る暇はない、それらは讀者に既知のものとして豫定されねばならない。こゝに必要なのは、彼等が作つた「共產主義者同盟」と、その爲に書かれた「共產黨宣言」に關することだけである。一八四二年にはまだ急進的な民主主義者に止まつてゐた彼等は、一八四四年巴里に於て略々後年の思想體系の輪廓を完成し、社會主義を自己の信條となし、その實現の負擔者をプロレタリアートに見出すことに於て、その社會行路を確立してゐた。彼等は啻に世界を解釋する哲人たるのみならず、世界を變革せんとする哲人たるが故に、マルクスは巴里を追はれてブラッセルに落付くや、こゝで諸國の勞働者を糾合して、自己の信條を鼓吹し、エンゲルスは巴里に於て之と同一の仕事に從事した。所謂「共產主義者同盟」(Das Bund der Kommunisten)（此の時の共產主義とは現時の共產主義を意味するのではない。略々現時の社會主義と云ふと同じである）の成立に就ては從來色々の異說があつたが、最近のリァザノフの「マルクス、エンゲルス傳」（一九二三年）によれば、一八三三年頃巴里に於て、獨逸亡命者より成る「獨逸亡命者同盟」(Deutsches Bund der Geächteten) が作られたが、その中のシュスター一派は分離して別に「正義者同盟」(Das Bund der Gerechten) を作つた、之が一八三六年である。然るに同盟の人々は一八三八年五月十二日のブランキー一派の叛亂に參加した爲に檢擧され、同盟は遂に解散した。同志は散り散りに各國に分れたが、倫敦に渡つたものの中にカール・シャッペルがゐた。一八四五年ブラッセルに落付いたマルクスは、こゝで倫敦、巴

里、ブラッセルの舊同盟の人々を糾合して、勞働者の國際的結合の中心を作らうとして、盛に勞働者の間に活動してゐた。ステファン・ボルン（Stephan Born, 1824—1899）が先に巴里に於てエンゲルスの指導を受け、後にはブラッセルでマルクスの影響を受けたことは、こゝに特記して置く必要がある。やがて國際的結合の大會を倫敦で開くことが決定され、一八四七年の夏第一回の大會が開かれ、エンゲルスは巴里の、ウォルヘルム・ヴォルフはブラッセルの共産主義者を代表して出席したが、マルクスは出席しなかつた。大會では「共産主義者同盟」（Der Bund der Kommunisten）を形成することが決議され、同盟の綱領の草案を作ることとして、各地方支部から次の大會にその草案を持ち寄ることとした。エンゲルスの作「共産主義原理」は、此の目的の爲に作られたのである。第二回大會が同年末に同じく倫敦で開かれるや、今度はマルクスも亦出席し、幾多の紆餘曲折の後に、同盟の綱領草案の起草がマルクスに依囑された。かくしてブラッセルに歸來したマルクスは彫琢鏤骨の後に遂に「共産黨宣言」を脫稿し、之が倫敦で發表された。かくの如くしてマルキシズムの體系を力強き短篇に壓搾した「共産黨宣言」は成立した。だが「宣言」は巴里の二月革命に作用するには時期が遲れてゐた。又獨逸の三月革命に影響するにも至らなかつた、何故なればそれが獨逸に輸入されたのは、五六月頃であつたからである。又遙に後年の一八七〇年代に於てすら「宣言」は獨逸勞働者大衆に影響してはゐなかつた、何故なれば獨逸に於けるそれの頒布は極めて限られてゐたし、その內容は大衆に理解されるには、餘りに文字簡潔にして含蓄に富んでゐたからである。獨逸社會主義運動に與へた直接の影響は、そこで述べられた戰術が三月革命の直後に於て、獨逸に於てマルクスにより直接適用されたことと、「共産主義者同盟」の中に於て「宣言」の影響を受けた人々が、三月革命後の反動に對して果敢に抗爭したことである。マルクス、エンゲルスの思想は直接に大衆に作用はしなかつたが、先づ大衆を指導する有力なる領袖に作用し、かくして獨逸社會主義運動の動向を決定したのである。

(3)

一八四八年の三月革命は、封建主義に對する自由主義の宣戰の布告であつた。自由主義の陣營を形成したのは、資本家階級と中產階級と勞働者階級とであつた。多數の勞働者は單に封建主義を對敵の目標として、自由主義の陣列に加はつたであらう、だが勞働者の指導者と自覺せる卒伍とは、盲目的に自由主義を戰ふことは出來なかつた。彼等は自己の社會主義が、封建主義と自由主義との鬪爭に關して三角形的の地位を占めることを意識して、去就を決定せねばならなかつた。凡そ此の三角關係に對して、三種の立場が考へられるであらう、第一は自由主義を以て終始滿足することである。第二は自由主義と自己との對立を意識するの餘り、自由主義に反對して、結果に於て封建主義を消極的に援助することである。第三は自由主義を以て終始滿足するのではないが、自由主義は社會主義の爲に必要不可缺の條件なりとして、先づ自由主義を援けて封建主義を打破し、然る後に社會主義と自由主義との鬪爭の舞臺に入らんとすることである。大多數の勞働者は自ら反省することなしに、第一の



ステファン・ボルン

態度を採つた。先に述べた眞正社會主義者は第二の態度を採る。所がマルクス、エンゲルスの辯證法的發展の見方と、それの適用としての階級鬪爭理論とは、第一、第二を採らしめずして、第三の態度を採らしめた。今日に於てこそ敢て奇とするに足りないが、當時に於ての彼等の識見は敬服に値すると思ふ。

革命の前夜に書かれた「共產黨宣言」は、その第四章を題して「各種の反對黨派に對する共產主義者の立場」と云ひ、その中でマルクスは獨逸がブルジョア革命の直前に立つてゐると云ひ、此の革命は十七世紀の英國のそれや、十八世紀の佛國のそれよりも、歐洲文明のより進歩した條件の下に行はれることと、遙により發展せるプロレタリアと共に行はれることとの故に、一般の共產主義者の特殊的注意を惹くに値すると云ひ、獨逸の共產主義者はブルジョアジーが革命的行動に移るや、彼等と共同して、絕對王制と封建的土地所有と小ブルジョアと鬪爭せねばならないと鞭撻した。だが之と同時に附加することを忘れなかつた、プロレタリアはブルジョアと利害の敵對することを意識し、ブルジョアが政權を奪取して實現する社會的政治的條件をば、直に逆にブルジョアを打つ武器として利用せねばならない、反動的階級の覆滅するや否や、直にブルジョアに對する鬪爭が開始するのだと。本文の主人公ラッサールの見解も亦之と同樣であつた。彼は云つた「私と私の黨が、何より先づ社會改革に執着すると云ふことは事實である。吾々の確信の最高の表現は社會共和國である。だが今は吾々の理論を實現すべき時期ではない。その實現は未來に屬する。プロレタリアートは、今は市民諸君の自由、權利、法律を防衛する爲に諸君を助ける以上には、何物をも望んで居らぬのである」と。

自由主義の爲にブルジョアと共同戰線を布く、然しやがてプロレタリアはブルジョアと鬪爭を開始するのだと云ふ戰術は、實行の段取りとなると、二樣に分れる、一は出來うる限りブルジョアとの對立を隱蔽して、民主主義を以て共同の標識とすることであり、その二はブルジョアと共同するとしても、プロレタリアは隱す所なく自らの組織を進展させることである。第一の方針はケルンに於て「新ライン新聞」の編輯に從事したマルクス、エンゲルスの採つた所であり、第二は同じくケルンに於てモル、シャッパー等の採れる所で、早くも同地に「ケルン勞働者同盟」を組織した。更に第二の方針を大規模に實行したのが、先に述べたステファン・ボルンであつた。彼は革命の勃發するや、直に首都伯林に走り、そこに全國の勞働者を糾合する爲に、四月十九日中央委員會を作り、六月廿七日には獨逸國內國外の勞働團體に檄を飛ばして、全國勞働者大會を開くこととし、八月廿三日大會は伯林で開かれ、各大都市から三十五の勞働者團體が代表者を送り、會名を「勞働者同胞會」(Arbeiterverbrüderung)と稱し、機關雜誌「同胞」(Verbrüderung)を十月からライプチッヒで發刊することとなつた。之が獨逸に於て形成された最初の大規模の勞働者團體であり、その以前の機關誌「人民」(Volk)と「同胞」とは、獨逸勞働運動史上の貴重なる文獻である。更にこゝに特記すべきは、「勞働者同胞會」がその綱領として揭げたものの中に、普通平等直接秘密の選擧權と云ふ一項と、國家の信用による生產組合の設立の一項の存することである。後年ラッサールが「全獨逸勞働者同盟」を設立するや、その綱領として揭げた項目は、ボルンの前例を踏襲したものなることは記憶されねばならない。

マルクスの如くブルジョアとの對立を隱蔽せんとするも、ボルンの如く露骨にプロレタリアを結成するにしても、プロレタリアがブルジョアの思ひの儘に追隨しないならば、ブルジョアは失望せざるをえなかつた、況んや目由主義革命は第一段階の革命にして、やがて來るべき社會主義革命の序幕に過ぎないならば、ブルジョアとプチ・ブルジョアとは、プロレタリアの爲に火中に栗を拾ふ愚を演ずることとなる。さらでだに獨逸ブルジョアの勢力は微弱にして、前面の封建的勢力は壓倒的に巨大である。之に加へて背面更にプロレタリアの敵對を受けるならば、彼等は前進に躊躇せざるをえなかつた。進んで深傷を受けるより自重を選び、他日プロレタリアとの鬪爭に際して封建的勢力の援助を受ける伏線を設けることを考へざるをえなかつた。かくして三月革命はその成るや間もなく停頓の運命に立たされた。だが對立の現出したのは、ブルジョアとプロレタリアとの間だけではなかつた。四月廿二日ライプチッヒの手工業の親方達は、全獨逸の特權組合員に檄を發して、飽くまで特權組合を固執せよと云ひ、六月二日ハムブルグに於ける「北獨逸手工業者大會」は特權組合は唯一の救濟機關なりと云ひ、營業の自由は一切を破滅せしめるものだと云つた。更に七月中旬から一ケ月に亙つて、フランクフルトで開かれた二十四の聯邦からの百十六名の手工業親方の集會では、「營業の自由に對する嚴肅なる抗議」が決議された。之に對して同じフランクフルトで手工業の職人の大會が七月末から二ケ月に亙り開かれ、親方達を利己的であると非難したが、矢張り特權組合の維持に汲々たるものであつた。

プチ・ブルジョアの反動性の露出と、親方と職人との對立、職人とプロレタリアとの對立、之等がブルジョアとプロレタリアとの對立に加へて續々と暴露された時に、革命方の陣營の混亂は、封建的勢力の利用する所とならない筈はない。十一月のクーデターはかゝる狀勢の下に、無人の境を往くが如くに實行されたのである。だが反動は全國的には無抵抗ではなかつた。十一月のクーデターに對してライン州は革命を防衛する爲に起つた。マルクス、シャッパー等がケルンに於て、ラッサールがデュッセルドルフに於て、何れも陪審法廷に立たされたのは、暴動を煽動したとの嫌疑を以てであつた。更に翌年一八四九年の五月、愈々反動が猛威を逞うするや、先づドレスデンに於て革命が起り、こゝではボルンとバクーニンとがバリケードに於て苦戰したが敗北し、更に同月ライン州の右岸に於て、又バーデン・ファルツに於て叛亂が起り、後者にはエンゲルスも亦參加したが、何れも普魯亞軍隊の爲に壞滅させられた。之を要するに、三月革命は月足らずして流產した革命であつた。そこからはプロレタリアは何物をも獲る所なくして舞臺から退き、ブルジョアは封建主義の許容する限りの、而してプロレタリアの自己に對する鬪爭を抑制しうる限りの、自由を獲得することを以て滿足した。それは決して自由主義革命ではなかつた。三月革命は烏合の衆の革命であつた、そして革命によつて赤裸々にされたのは、封建的勢力の今更に强大なことと、獨逸の社會構成の復雜性とであつた。革命は此の複雜性の故に挫折した、それと同時に革命は、此の複雜性を加速度的に助長した。

プロレタリアがいかにブルジョアの卑怯怯懦の裏切を憤激したかは、前項の末尾に引用したマルクスの一文を以ても知られる。だが自由主義は社會主義者にとつて、必要不可缺の前提であつた、既にブルジョアと共に自

由主義を闘ふことが出來ないとすれば、プロレタリアは自らの双肩の上に、社會主義と共に自由主義をも負擔せねばならない。獨逸の自由主義も不運であつたが、獨逸の社會主義も亦それと伴つて不運である。彼等はその脆弱な身體を以て、自由主義と闘爭するさへ困難であるに、更に封建主義との闘爭をさへ重課されるに至つた。こゝに獨逸社會主義の苦難の旅が始められた。

(4)

三月革命後の反動は、自由主義への反動であると共に、社會主義への反動でもあつた。かくして反動十年の間、獨逸の社會主義は鳴りを潜めたのである。だが此の十年の反動時代こそ、獨逸の資本主義が始めて活潑に發展した時で、人は一八五〇年を以て獨逸産業革命が開始したと云ふ。獨逸國内の關稅同盟の成立と鐵道の敷設とは、重要なる發展の條件であつた。資本主義の發展はブルジョアの勢力を膨脹せしめ、「進歩黨」の結成となり、憲法闘爭の火蓋が切られた。こゝに再び自由主義と封建主義とは、干戈を交ふるに至つたが、ブルジョアを膨脹せしめた資本主義は、プロレタリアをも膨脹せしめた、かくしてこゝに再び又、封建的勢力とブルジョアとプロレタリアとの、三派鼎立が現出した。ブルジョアに對する失望は、曩に進歩した社會主義者の頭腦に於て完成してゐたが、勞働者大衆の間には必ずしもまだ完成してはゐなかつた。かくして三月革命當時の課題、卽ちプロレタリアはブルジョアを助けて封建主義と闘爭すべきや否やといふ課題が、こゝに再び時を異にして現はれるに至つた。

ラッサールの登場は、此の難問に答へるが爲であつた。

之より先きブルジョアは三級間接選擧制度を以て滿足し、言論結社の自由を徹底させない點に於て、プロレタリアの不滿を買つてゐたが、ブルジョアの結成團體たる「國民同盟」に、プロレタリアは加入することを許されず、彼等は「名譽會員」たるに甘んぜねばならなかつたので、プロレタリアの最大の不滿は、ブルジョアの社會問題に對する態度に在つた。當時のブルジョア經濟學者が盛に持て囃したのは、バスチアー（Bastiat）の「經濟的調和論」であつて、之によつて、勞資間の利害の對立を抹殺しようとした。然し社會問題の擡頭はバスチアーのみを以てしては不充分となつたので、こゝにシュルツェー・デーリッツ（Schulze-Delitzsch）の提唱する產業組合の設立を以て當つたのである。信用組合、原料購買組合、販賣組合、消費組合は盛に設立され、組合を組織することで勞働者の地位は向上すると云はれ、「自助」と云ふことが當時のブルジョアの合言葉であつた。當時シュルツェー・デーリッツがいかに勞働者の救世主として、赫々たる讃仰をえてゐたかは、今日の吾々の殆ど理解しえない所である。實にブルジョアは自助的組合を以て勞働問題の萬能藥と吹聽したのであつた。所が自ら事業を經營せざる勞働者にとつて、原料購買組合や販賣組合は何の役にも立たず、自己の日常の生活に汲々たる彼等に信用組合は所をえてゐない、消費組合は彼等にも亦役立たないではなからう、だが生產者としての條件を顧慮せずして、消費者としての商人から受ける僅少の搾取を防いでも、九牛の一毛にも足らない。所詮シュルツェー・デーリッツの自助的組合は、

大資本の前に沒落しつゝある手工業者の救濟手段ではあつても、勞働者の爲の施設ではありえなかつた。ロードベルツスはいみじくも云つた「シュルツェーは葡萄園を掘つても寶を掘出しはしないだらう、然し彼が掘つた後の葡萄園は確に寶のりが殖える」と。かくしてプロレタリアの自助的組合に對する懷疑檢討は早晩來らざるをえず、之と伴つてプロレタリアのブルジョアからの分離は必至的な運命であつた。而して不思議な事件が契機となつて、一八六二年にその時が到達したのである。

「國民同盟」の經費によつて獨逸の勞働者十二名が、倫敦の萬國博覽會に派遣されたが、彼等の報告を聞くことが機緣となつて、伯林の勞働者は十月七日大會を開き、全獨逸の勞働者の大會を開催することを決議し、大會の議題として幾つかの項目が決定され、大會への準備の爲に廿五名の委員が任命され、アイヒレル（Eichler）と云ふのが委員長となつた。委員會は大會開催の準備を進めたが、恰も同時にライプチッヒの勞働者の間にも全獨逸勞働者大會の企圖があつた。元來ライプチッヒには一八六一年二月以來、ブルジョアの統制の下に「勞働者教育協會」（Arbeiterbildungsverein）が存在したが、その中にベーベル——後にラッサールに對抗して社會主義政黨を作れる——を中心とするものと、より急進的なフリッツェー（F. W. Fritzsche）とファールタイヒ（J. Vahlteich）とを中心とする一派とが衝突し、後者は別に「前進協會」（Vorwärts）を組織し、之が伯林に於けると同樣に、全獨逸勞働者大會を開催する委員會を任命してゐたのである。アイヒレルは大會開催の打合せの爲に、十月廿三日ライプチッヒに來て、同地の委員と會談したが、その時彼は時のビスマルク政府は、若し勞働者がブルジョアの

「進歩黨」と分離さへするならば、勞働者の生產組合の設立に好意を表するであらう、現に機械工の生產組合の爲に三萬ターレルを提供する意圖を有すると漏らした。未だ「進歩黨」に執着してゐたライプチッヒの委員は、之を以て「進歩黨」と勞働者とを離間せんとする陰謀だと疑つて、容易にアイヒレルの口舌に迷はなかつた。後年彼はビスマルクの警察の手先であつたことが見出されたのである。

ライプチッヒの委員は、直接伯林に於て「進歩黨」の人々と會見することの必要を感じ、フリッツェーとファールタイヒとは伯林に出向いて、「進歩黨」の領袖達と會談した。選擧制度に就ては彼等の間に意見が分れてゐたが、要するに選擧法の改正を當面の重要問題と考へず、三級選擧制度を當分靜觀せよと云ふのであつた。伯林に於ける勞働者は依然としてシュルツェー・デーリッツに戀着するものだと云ふことが分つた。然し十一月二日に伯林で開かれた勞働者の會合では、全獨逸勞働者大會の開催を、ライプチッヒの委員會に依託することを決議し、但し曩の伯林大會の議題を主とすることを申合せた。ライプチッヒに歸來したフリッツェーとファールタイヒ等は、大會開催の準備を急ぎ、十一月中頃檄を全獨逸勞働者に飛ばして、翌年（一八六三年）の三月に大會を召集するが故に、代表者を派遣せよと要求した。此の以後「進歩黨」は勞働者の全國大會の開催を必死になつて妨害し、爲に混亂した經過が辿られたが、結局中央委員が最後に採つた手段は、全獨逸に於て唯一人の信賴しうる人として、ラッサールの腹中に飛込んだことであつた。

一八六三年二月初旬、中央委員會の二名の議長ファールタイヒとダンメル（Otto Dammer）とは、ラッサールに相

談すべく伯林に來り、ダンメルの友人ルドウィッヒ・レーヴェ(Ludwig Löwe)の立會の下に、會見はラッサールの家で行はれ、兩者の意見は直に一致した。中央委員會の名に於て、文書の形式を以てラッサールに質問すると云ふ手續が採られることとなつた。間もなくその文書はラッサールの手に屆いたが、それは次の如きものであつた。

伯林に於けるフェルヂナンド・ラッサール氏に。

拜啓、「現在の歴史的時代と勞働者階級の理念との特殊的關係」と題する貴下の小册子は、當地の勞働者の間に到る所で多大の喝采を以て迎へられました。そして中央委員會も亦貴下の高見に贊成なる旨を、勞働者新聞紙上で聲明したのでありました。他方各方面から、以下の問題に對して甚だ眞面目な疑念が發表されました、曰く、シュルツェー・デーリッツにより推奬される組合は、何ものをも所有する所なき勞働者に對して、果して充分に貢獻しうるや否や、又特に之によつて國家に於ける勞働者の地位は、當然にあられねばならぬが如き狀態に改變されうるものなるや否やと。中央委員會は勞働者新聞（第六號）に於て、之に關してその見解を次の如くに聲明しました、吾々の確信する所によれば、組合制度は吾々の現在の事情の下に於ては、決して充分なることを果しうるものに非ずと。然し今や到る所に於て、シュルツェー・デーリッツの思想は、勞働者階級――それを吾々は民衆の被壓迫階級と理解しますが――に對して權威あるものとして推奬されるが故に、又勞働者運動の目的、卽ち政治的、物質的及び精神的の諸點に於て、勞働者の地位を改善すると云ふ目的の達成の爲には、シュルツェー・デーリッツにより提出されたとは異る手段と方法とが、考へられうるが故に、中央委員會は去る二月十日の會議に於て、滿場一致を以て次の如くに決議しました。

勞働者運動に關し、又運動が活用すべき手段に關し、並に全く何ものも所有せざる階級に對して組合の有する價値如何に關し、貴下の見解を何らか貴下の好まれる形式に於て發表されんことを望むのであります。

吾々は貴下が前記の小册子に於て發表された見解に對して、最大の價値を置くものであり、その故に貴下の今後の所見を十全に評價することを知るものであります。最後に吾々は、貴下が吾々の願意を出來うる限り急速に御聞き屆けあらんことを切望するものであります、何故なれば勞働者運動の發展を促進することは、吾々にとつていとも重要なことでありますから。敬具

一八六三年二月十一日ライプチッヒに於て、

全獨逸勞働者大會招集中央委員會代表者オットー・ダンメル。

三月一日附を以て此の文書に答へたのが、ラッサールの「公開答狀」である。之によつて彼は始めて社會主義運動に身を投じた、又之によつて彼はブルジョアと進歩黨とに對して、決然たる別離を宣告したのである。

私は前項に於て獨逸の自由主義をラッサールの登場まで辿り、今本項に於て獨逸の社會主義を語つてラッサールの勞働者運動への出立に迄及んだ。前提は長きに過ぎたかも知れないが、こゝで漸くラッサールその人を語ることとしよう。

（四）生　立

(1)

フェルヂナンド・ラッサールは一八二五年四月十一日シレジアの主都ブレスラウに生れた。マルクスの誕生に遲れること七年である。家は富裕な猶太人の商人である。兩親に對する此の息子の愛着は、かなりに濃やかなものであつたことは、息子が父に宛てた手紙や手記等によつて判斷することが出來る。猶太人の家庭に生れたことは、ラッサールの生涯にとつて決定的の影響を與へたやうである。彼れ自身は家が富んでゐた爲に、格別の侮辱を周圍から受けなかつたが、迫害された此の民族に對する同情と、强者に對する反抗とは、少年時代に彼に根深く植ゑ付けられ、基督教徒に對する反抗は、やがて現存社會秩序に對する不滿反抗に轉化したと云へないではない。吾々はハイネにベルネにマルクスに此の例を見るのであるが、ラッサールの場合も亦之に洩れない。始めブレスラウの中學校に通つたが、こゝでは放縱の學生として學校から嫌はれ、一八四一年五月ライプチッヒの商業學校に移つたが、こゝでも「危險な（ゲフエールリッヒ）」學生として扱はれ、校長も教師も何とかして彼を放逐せんものと考へてゐた。

彼は一八四〇年から一八四一年にかけて、卽ち十五歳から十六歳に亙つて、丹念に日記を書いてゐたのが、後にバウル・リンダウによつて編纂されてゐる。此の日記は色々の點に於て、少年ラッサールを物語ると共に、後年のラッサールをも髣髴せしめる所が多い。次の日記は猶太民族に對する同情と、自己の將來を空想する彼に特異な性癖と、その空想の中に朦朧として浮ぶ自己の優越した地位を樂しむ傾向とを窺はしめるであらう。

一八四〇年二月二日。……プルウァーの作レーラの中のあの猶太人の如くに、猶太民族を現在の壓迫された境遇より救濟せんが爲には、私は身命をも賭することが出來るだらう。若し私にして彼等を再び尊敬される民族たらしめることが出來るならば、武器を手にして彼等の先頭に立ち、彼等を獨立ならしめることは、私の常に好む想像である。……

强烈な自我意識と、自己評價の高いこととは、ラッサールの特徴であるが、之を示すのは次の日記である。

一八四〇年三月廿四日。……此の友人は既に去る木曜の晩、私の虛榮心の爲に材料を與へてゐた。彼は特に私に云つた、彼は私に多大の關心を持つ、私は天才である、若し私の精神が誤れる方向を辿るなら、彼をどれだけ悲しませるか知れないと。更に彼は云つた、私は既に早くから彼れの注意を惹いてゐた、何故なら私は世の常の少年ではなかつたからと。此の友は誰よりも私の信賴しうる人間である、何故なら彼は決して世辭追從を云はないから。のみならず彼は最も常識に富む男である。……

だがラッサールは決して無反省な少年ではない、次の日記は、彼れの鋭き自己內省と自己批判とを物語る、それと共に晩年まで彼に付き纏ふ優越慾權勢慾の自己告白でもある。

一八四〇年七月十九日。私は芝居に往つた。レーヴェがフィエスコを演じた。嗚呼ラヴァニアの伯爵の何と偉大な性格であることよ。私は今こそ革命主義者——民主主義者——共和主義者であらうとも、若し私がラヴァニア伯の地位に置かれたなら、彼と同樣に進退したであらうこと、ジェヌアの第一の市民たることで滿足せず、進んで王冠に私の手を差延べたであらうことを感ずる。之から考へてみると、若し事態を自日の下に眺めるならば、私は單に一自我主義者（エゴイスト）たるに過ぎない。若し私が公侯の家に生れたなら、私は骨の髓まで貴族主義者たるのであらう。

ライプチッヒ時代に彼れの愛讀したのは、ハイネとベルネとであつた。同じく猶太人たる此の二人から、彼は

民主主義共和主義革命主義を鼓吹された。ラッサールの社會主義に先づ成育の素地を供したのは、此の兩文人であつた。彼等を通して少年の憧憬は佛國と巴里とに注がれた。

一八四〇年八月廿四日。……おゝ佛蘭西、私の憧憬の國私の夢想の國よ。嗚呼いかに私は汝に惹き付けられることよ。汝の所には自由がある、汝は自由を闘ひ取つた。而も今でも汝は武器を擲ちはしない。汝は知る、尚爲さるべきことが殘されてゐると、そして汝は不信の貴族の口約に欺かれて、眠り込んではゐないのだ。

彼がライプチッヒの商業學校に入學したのは、父の業を繼いで商人とならうとしたからであつた。ゲーテのウィルヘルム・マイスターを讀んだ時の次の一節は、職業選擇に就て胸中尚去り難き惱みを示してゐる。

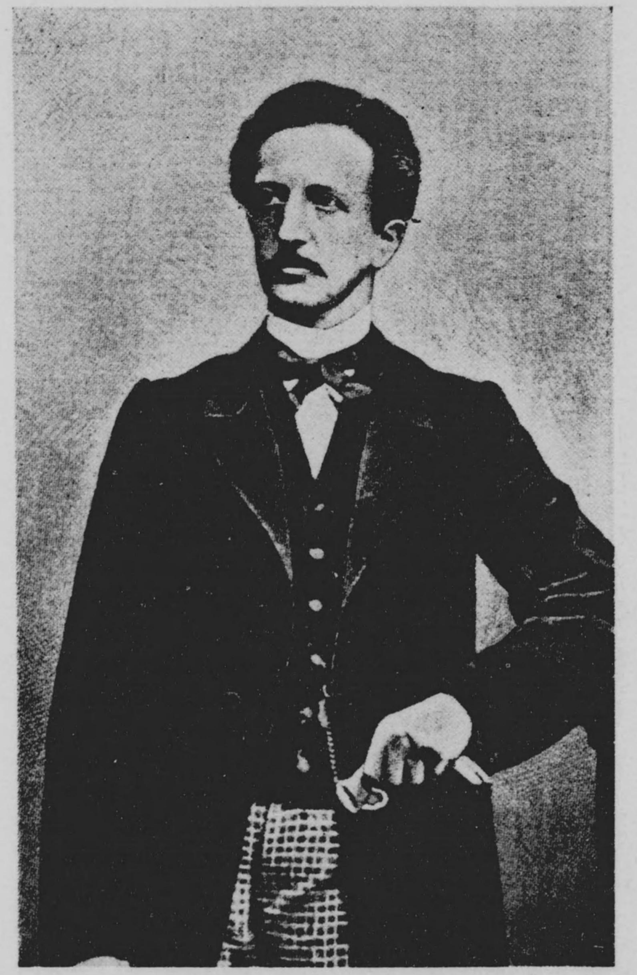
一八四〇年八月三日。ウィルヘルム・マイスターを讀む。不思議なことだ。二三の嗄ひ違ひを除いては、私自身がマイスターの中で描寫されてゐるが如くに信ずる。私も亦三ヶ月前に此の人生の分岐點に立つたのであつた。私の心も亦唯藝術の爲にのみ生きてゐた。商賣を選擇した爲に、その藝術を少くとも外見上は捨てねばならなかつた。だが何といふ差が吾々の間にあることよ。マイスターの場合には、彼れの所謂「夢」を捨てる爲に、父と母と友人とが壓迫したのだ、そして彼を商人階級に移したのだ、それでも彼は强制を脫して自らを藝術に委れた。然し私の場合には、兩親が忠告し私を勉學の方に向はせようとしたに拘はらず、私の自由意志を以て、店者となる爲に一切の美的生活を放擲したのであつた。：事實を包まず云へば、公的の美的の又は政治的の生活を放擲する爲に、私は決して强制されたのではないことを信ずる。私は唯假りに商賣を把んだ、そして私は固く信ずる、偶然が或は寧ろ攝理が、私を店舗から引き出して、私の活躍の出來る舞臺に私を載せるであらうと。……

だがラッサールが商人となることは想像しえない、遂に方向轉換の時が來らざるをえない。

一八四〇年八月廿四日。何故かしら私は兩親に云ひ知れない憧憬を感ずる。今私の中に二つの極端が鬪爭してゐる。私は世に躍り出て自らの手で自己の幸福を獲得してみたい、然し一方には、古き知人に圍まれた家庭の平和な靜かさより も、より望ましいものはないと思はれる瞬間もある。同じく他の二つの極端が、私の內部に於て鬪爭する。私は世渡りに就て怜悧で御上手であつた方がよいのか。私は日和見をして偉い人に追從して、手際のよい陰謀で利益と信用とを盜み取つた方がよいのか、それとも最も果敢な共和主義者の如くに、眞理と道德とに執着し、あらゆる一切の他のものに目を吳れず、貴族主義に死の打擊を與へることのみを志した方がよいのか。否私は卑しい意氣地のない宮廷の臣下にはなりたくない、たとへ私にその才能があつたにしても、私はあらゆる國民に自由を告げ知らせたい、そしてその企ての半途に於て仆れた方がよい。私は星の下に神の前にそれを誓ふ、若し私にして此の誓ひに不忠であつたら、私の上に呪あれ。

かくして彼は商業學校を去り、大學に於て歷史の研究をしようと父に申出でた。父の希望は法學か醫學かに在つたが、子供は之に答へて云ふ「醫師も辯護士も共に知識を賣る商人に過ぎない。自分は著作に身を捧げたい、人類の神聖なる目的の爲に戰ふべき時が來た」と。吾が子のみが特に殉教者たらざるべからざる理由奈邊に在るかと云ふ父の嘆息に對して、彼は次の如くに答へた。之によつてラッサールの前途は決定されたのである。

父の言いかにも尤もである。數多き人の子の中で何故に私が特に殉教者とならねばならないのかと。けれどもすべての人皆かく云つて、任を他人に求めるならば、いつの日にか戰士は現はれよう。何故に私が特に起つて殉教者となられねばならないか。外でもない、神は私の胸裡に吾自らを呼び起たしめる聲を授け、神は戰ふべき力を私に與へたからである。私は崇高なる目的の爲に戰ひ且つ忍ぶ力を有するからである。神が特に授け給へる力を、他に用ひてその意に反くことを欲しないからである。一言にして云へば、他に如何ともすべからざればなり。



フェルヂナンド・ラッサール

(2)

一八四一年八月ラッサールがライプチッヒを去つてから、一八四六年ハッツフェルト伯爵夫人の訴訟事件に關係するまでの約五年間は、彼にとつて最も重要な成育期であつた。ライプチッヒからブレスラウに歸來して、二年は大學入學試驗準備の爲に費し、次で一八四三―四四年の春はブレスラウ大學に、一八四四―四五年の春は伯林大學に、一八四五年の夏は再びブレスラウに、四五―四六年の冬は伯林の大學に送られた。此の期間に彼は一は哲學に於て一は社會思想に於てスツルーム・ウント・ドランゲを經過したのであつた。彼れの後年の思想體系の輪廓は、此の時代に既に構成されたと云つても過言ではない、私は哲學と社會思想とに分けて、それを語ることとしよう。

彼が商人たることを拋棄して、學問に自己の行路を決定した時に、彼れの學問とは、「最も偉大にして最も包括的なる世界の研究、卽ち歷史の研究」であつた。歷史を以て世界の研究とすることそのことが、既に單なる歷史家を志すものでないことを示してゐる。彼れの求めたのは、世界の一切の謎を解くことであつた。世界の歷史的發展を、それ自身思惟する絕對精神の不斷の辯證法的過程であると說く哲學こそ、彼れの闇を手探る如くに求めてゐたものであつた。かくしてヘーゲル哲學は既に彼れの前に豫定されてゐたのである。だが彼が始めてヘーゲルを知つたのは、大學入學試驗の準備の最中であつた。一八四四年五月十三日の彼れの手紙は、人間の最も内部

的なるものを構成する啓示を語るが如き語調に於て此の事を述べてゐる。曰はく、「二年半以前に、三度目に私は私の皮を剝いだ。哲學は私に近づいて、今一度私を產んで呉れた、精神に於て新しきものとして呉れた。此の精神的更生は私にあらゆるものを與へた。私に明確性を自己意識を與へ、內容として人間精神の絕對的威力を、道德の・理性の・客觀的實體等々を與へた。一言にして云へば 哲學は私をして自己自身を把握する理性、卽ち自己を意識する神たらしめた」と。之れ以來ヘーゲル哲學は、彼れの終生を通じて搖がぬ地盤となつた。

ヘーゲルの影響を始めに受けたことに於て、フォイエルバッハもマルクス、エンゲルスもラッサールと異る所はなかつた。唯前三者はヘーゲルから出て唯物論の方向に進路を採つたのである。それではラッサールも亦此の先蹤を辿つたかどうか。彼がブレスラウ大學にゐた時分に、大學の「學生團體（ブルシエンシヤフト）」は急進的の思想に包まれてゐて、その集會で好んで討論されたのは、フォイエルバッハの「基督教の本質」、ベネディーの作物、ヘルウェーの詩、就中ルーゲとエヒテルマイエルの編纂した「ハレー年誌」であつた。社會主義共產主義の思想もサン・シモン、フーリエー、ルヰ・ブラン等の手によつて知られてゐた。學生界の空氣は渦卷きつゝある外の世界の縮圖であつた。ラッサールは此の團體に加入して直に同輩の注意を集めたが、學界に於ける新舊學派の對立は遂に、ブレスラウ大學に於てもある教授が文部大臣の命により、教授の地位を奪はれることとなつた。その時ラッサールは教授を擁護して手腕を認められ、後哲學者ブラーニッツが講義中にフォイエルバッハの哲學を攻擊した時に、多數を占めてゐたフォイエルバッハ崇拜の學生は、講堂で示威運動を試みて之に抗議したのであつた。一學

生が此の行動を新聞紙上に非難するや、學生大會が開かれてその學生の審判が爲されたが、ラッサールも亦その審判者の一人であつた。彼が大衆の前に現はれて雄辯を揮つたのは之が最初であつたらう。當時の學生界の空氣より判斷して、彼はフォイエルバッハその他の「若きヘーゲル學徒」の文獻に親しんだに違ひない。又上述の行動から推して、彼がフォイエルバッハに同情の態度を持したことも想像される。だが結局彼は唯物論に向はなかつた。伯林大學に通つた時、勿論マルクスはゐなかつたが、他の若きヘーゲル學徒は、哲學の論爭の形態を借りて、政治、社會の問題を批判してゐたのであるが、彼は之等の人達と多くの交涉を持たずに、獨自の路を歩んでゐたもののやうである。彼は一八四五年卽ち未だ漸く廿歲に達した時に、新しき「精神の哲學」(Philosophie des Geistes)を起草し、自己の哲學體系を展開しようと計畫した。父親に宛てた手紙では、二年の後に「私の體系の創作」に筆を着けると書いてあるが、十五年の後に「既得權の體系」を著はした時にも、新しき體系を作る計畫が、一八四四年以來机上に横はると稱してゐるが、それは遂に發表されなかつた。若しその計畫の輪廓だけでも發表されたら、彼がいかにフォイエルバッハの哲學と交涉し、いかに之と相違したかが明白になつたであらう。然し要するに、マルクス、エンゲルスにあれほどの影響を與へたフォイエルバッハは、彼に對して先師ヘーゲルの理想主義的根本基調を打破するに足りなかつたことは事實である。外界の刺戟に對して敏感であつた彼に於て、當時若き靑年を搖り動かしたフォイエルバッハから動かされなかつたのは、異數のことと云はねばならない。かくして彼はマルクス、エンゲルスの唯物論と對立して、ヘーゲルの理想主義を以て終始した。

飜つて現存社會秩序に對するラッサールの態度、卽ち彼の社會思想を見よう。彼が大學の入學準備を營んでゐた頃社會主義的思想は漸く擡頭してゐた。四二年にはシュタインの「佛蘭西に於ける社會主義及び共產主義の歷史」が刊行され、「ライン新聞」にはモーゼス・ヘッスによつて眞正社會主義が書かれ、四三年には社會問題に關する多くの單行本が現はれたし、同年五月には「シレジア新聞」にウィルヘルム・ウォルフ(Wilhelm Wolff)——後にマルクスが「資本論」第一卷を獻じた——が、ブルスラウ市の貧民窟の住宅狀態を描寫して時人の注目を惹起した。後年ハウプトマンの作「織匠」(一八九二年)で有名となつた織物勞働者の一揆がシレジアに起つたのは、一八四四年であつた。ブレスラウ大學の學生界の雰圍氣が、いかなるものであつたかは曩に述べた。之等の狀勢の中に敏感なラッサールが社會主義に贊成か反對か何れかの立場を夙に採つたであらうことは、容易に想像せられる所である。一八四三年末に彼は既に「確乎たる社會主義者」(entschiedener Sozialist)となつたと語つてゐる。更に一八四四年六月十二日の父宛ての手紙には當時のシレジアの織物工業界の動搖に就て、次の如くに書かれてゐる。曰はく「それは恐ろしく切迫しつゝある、富者に對する貧者のあの鬪爭の端初である。それは理論的にも實踐的にも吾々の血管を滿たし脈打つた、あの共產主義の最初の擡頭であり發動である」と。

又更に同年九月父に送つた手紙には稍詳しく共產主義が論ぜられてゐる。それによれば、主觀性の理念、絕對人格性の理念は、全近世史を貫徹する推進力であつた。基督敎があらゆる人格の絕對的神聖性の原理を揭げるや、之を現世の生活に實現したのが佛蘭西大革命であつた。然し此の原理は、單に人格の卽ち主觀性の實現可能性

を與へるに止まり、實現性自體を授けるものではなかつた。その限りに於て、それは抽象的無內容的であつた。こゝに於て各個人は形式的の獨立性を獲得しただけでは滿足出來ないで、自己の存在は必要なる條件、卽ち財産、所有、貨幣を獲得することにより、その實現性を滿足させねばならなかつた。かかる條件を獲得することに對しては、國家は何等の干涉をしないことになつてゐたから、財産、所有、貨幣の角逐鬪爭が始まり、かくして物質主義が擡頭し、自由競爭の組織の中に萬人の萬人に對する戰ひが始まつた。此の戰ひに於て財產卽ち客觀的なるものは、新しき權力となり、折角獲得された主觀的なるものの獨立は侵害されるに至つた。今や產業過程は二つの部分に分裂する。一は形式化された主觀的の力のみを持つ主觀的なるもので、それが勞働者であり、他は死せる客觀的の物質を持つ權力であり、それが資本家である。後者が自由競爭の組織に於て、非資本家を壓倒することは卽ち、資料の・貨幣の・客觀的の物質性が、主觀的の活動に對し、人格性に對する優越を物語るものである。そこから勞働者の窮乏が出發を開始する。曾ては物財から獨立してのみ人格性が考慮された。然し今や人格性は、資料・物財・貨幣の客觀性を自己に從屬せしめて後、始めて眞に人格性に於て全きをうる。それが取りも直さず共產主義である。あらゆる人をして平等の所有を爲さしめる共產主義に於て、主觀性の理念は、その最高頂に到達するのであると。此の手紙は書くに三日を必要とし、七本のペンを使ひ盡し、三十九本のシガーを喫したと云はれてゐる。主觀性と客觀性との止揚と云ふ考へ方に、ヘーゲルの辯證法的思惟方法が窺はれ、その止揚を共產主義に求めたことで、彼れの社會思想が略々確立したことが觀取されるであらう。

當時の交友の語る所によると、此の前後に彼は好んで社會主義文獻を耽讀してゐたやうで、ワイトリングの「調和と自由との保證」、カール・グリューンの「佛白兩國に於ける社會運動」や、エンゲルスの「英國の勞働者階級の狀態」、モーゼス・ヘッスの論文や、スチルナーの「唯一者とその所有」等が、彼れの机上に置かれた。然し彼は空想的社會主義者、眞正社會主義者、マルクス、エンゲルスから示唆をえたであらうとも、その何れにも全的に追從したのでなくて、彼獨自の路を通つて共產主義に往き著いたもののやうである。だが等しく共產主義と云つても二樣の區別が考へられる。一は自己の境遇から來る體驗や、周圍の生活に對する憤激から、そこに到達するもので、他は書齋に於ける思索の結果として理論の歸結として、同一の結果に來るものである。彼は決して第一の意味での共產主義者ではなかつた。彼は冷靜なる觀照者として、一歷史哲學者として、共產主義の思想を把握した。從つて未だ共產主義は彼を人格的に構成する思想ではない、自らの內より湧く衝動により、止むに止まれぬものが、彼を共產主義に押し出したのではない。だが年少の時猶太人の先頭に武器を執つて、同胞の獨立を圖らうと夢みたラッサールは、思想としての共產主義を實踐にまで轉化する可能性は充分にある、況んや一八四五年九月の「世界に對する鬪爭宣言」(Kriegmanifest gegen die Welt) に於て、自己實現の橫溢せる意欲を漏らしてゐるに於てをや。然し彼を共產主義の舞臺に驅るには、今少しの時間の經過を必要とする。

彼は伯林大學の卒業論文として「ヘラクライトス」(Herakleitos der Dunkler)を題材として選んだ。由來難解を以て聞えてゐるヘラクライトスを擇んだのは、ヘーゲル學徒としてヘーゲルの希臘の先驅者といふ點からは理

解されないことはないが、常人の容易に爲さざる仕事に着手する好奇心、難事に突撃せんとする闘争心、此の闘争に成功して自己の優越を誇らんとする名譽心が、彼にこのテーマを擇ばしめたことは疑はれない。始め彼は大學に奉職しようと云ふ希望を抱いてゐたが、やがて此の希望は拋棄したが、學究として續けることは斷念することなしに、一はヘラクライトスの論文を完成する爲に、又一は知見を廣める爲に、四五年の秋から四六年の一月半ばまで巴里に滯在した。マルクス、エンゲルス等の「獨佛年誌」「フォアウェルツ」は既に禁止され、彼等は追放されてゐた。ルキ・ブランとも接近がなかつたやうである。唯カール・グリューンと親しみ、それを通してプルードンと知り合つた。若し彼が巴里へ來る前に共産主義者でなかつたなら、彼れの巴里旅行は彼に決定的の影響があつたと見られるが、ラッサール傳の近來の豐富な資料は、それ以前に於ける彼れの共産主義を語つてゐるから、巴里旅行はさまで大きな影響がなかつたと見てよいと思ふ。唯こゝで彼は少年時代に一時憧憬して止まなかつたハイネと交はつた。彼がヘーゲル學徒となつてから「ヘーゲルによるハイネの驅逐」(Verdrängung Heines durch Hegel)を果した後ではあつたが、尙ハイネに面接することは嬉しかつたに違ひない。當時のラッサールが此の詩人に與へた印象はこゝに特記に値する、ハイネはいふ、

> 友人ラッサール氏は、最も卓越した天賦の青年である。今まで私の前に現はれた内で、最も深き學識と最も廣き知識と最も優れた洞察力と最も豐富な表現の才能とに加ふるに、意志の力と處務の巧妙さとを以てし、それは私が驚嘆せしめる。若し私に對する彼れの同情にして變らないならば、私は彼から最も有能な援助を期待する。兎に角知識と實行力と、才能と性格との之ほどの結合は、私にとつて喜ぶべき現象である。……ラッサール氏は、あの諦めとか讓遜とかを眼中に置かない新時代の特筆すべき子である。……

巴里から獨逸に戻つた彼は、普通ならば一路ヘラクライトスの論文完成に努力したであらう。だが思ひもかけぬ事件が、彼れの進路を轉ぜしめ、公私すべての方面に、之より後の彼に影響を與へた。一八四一年八月から四六年に亙る約五年の勉學は、彼を哲學に於てヘーゲル學徒たらしめ、社會思想に於て共産主義者たらしめたが、事件は之れ以上彼を靜かな學窓に籠らしめずして、公の舞臺に押し出したのである。

(3)

ハッツフェルト伯爵夫人(Gräfin Sophie Hatzfeldt)の離婚訴訟事件は、ラッサールの人物を躍如たらしめる點に於て、又後々まで彼に色々の影響を與へた點に於て、稍詳しくこゝに語る必要がある。ハッツフェルト家は獨逸有數の名門である。宗家公爵から支家伯爵に嫁した時、夫人は十五歳であつた。伯爵の遊蕩と浪費と虐待とは、殆ど結婚生活の初期から既に始まつたと云ふ。親戚の切諫も伯爵を改悛せしめることは出來なかつた。又夫人の離婚訴訟は親戚の名譽心が許さなかつた。前途を絶望し切つてゐた夫人は、一八四六年の始め恰も巴里から歸來したラッサールに會つた。具に夫人の同情すべき境遇を聞いたラッサールは、奮然として夫人の離婚訴訟を援助しようと申出でた。當時の心情は後年彼れの物した「魂の告白」の中に次の如くに書かれてゐる。

之は單なる一個人の生活ではあるが、此の生活のその人の中に、私は古く腐れ切つた世界の一切の憎むべき不正の具體化を、弱者に對して向けられた威力と權力と富との一切の濫用の具體化を、吾々の社會秩序の一切の壓迫を、私の前に見出したのであつた。私は前からかのロベスピール派の革命家である、彼れロベスピールはその憲法の中に書いた、たとへ唯一人が壓迫されるのであつても、そは社會的の壓迫であると。私は貴族社會の全き利己主義と全き卑劣さとを見た。……

私は人類の爲に恥ぢた！

守るに由なき婦人に對するすべて此の兇暴と壓迫！

私は吾が國民を恥ぢた！

確かに吾が國民——私は下層民衆を云ふのではない、之は多分の俠氣を持合せてゐる——獨逸の貴族とブルジョアジーには、騎士道の痕跡が跡方もなく消えてゐる、然らずんばどうしてかうした事がありえよう！

かくて私は自分自身に向つて云つた、汝はすべて之等の事を知りながら、而も彼の女を助けることなくして、此の婦人を徐ろに絞殺すると、人をして云はしめる勿れ、若し汝にしてそれを爲すならば、いかなる權利を以て、他人の利己心と卑怯さとを非難することが出來ようかと。

私は當時廿歳の青年であつた。私は丁度大學を出たばかりで、そこでは哲學を勉強してゐたので、法律に就ては何にも分らなかつた。だが何ものも私を逡巡せしめることは出來なかつた。

當初は彼れの親友二人が彼を助けたが、名家の出身の親友は後には何れも家庭の切望によつて事件から手を引いた。ラッサールの父親も亦愛息の身を案じて、シレジアからデュッセルドルフまで走つて、百方彼を說いたが彼を如何ともすることが出來なかつた。彼は云ふ「若し私にして私の約束を與へたなら、それは永遠に互つてである。私の父は獨り家鄕に戻らざるをえなかつた」と。之から一八五四年まで前後九年間、彼は唯一人として、伯爵の門閥と全貴族階級と富の威力と政府と官僚とを敵として、換言すれば全獨逸を敵として戰つた、而して遂に勝利者として戰場から歸つた。夫人は訴訟に勝つて離婚が宣告されたからである。夫人は彼よりも年に於て廿を長じてゐた、然し美貌と聰明とを惠まれた此の婦人と青年ラッサールとの間に、世人は當然に戀愛關係があるものと推察した。然しラッサールの多くの傳記者は、彼等兩人の間に戀愛關係はなかつたと云ひ、ラッサール自身も亦、かゝる想像こそ主義と良心とを缺く世人の淺薄さを物語るものだと云ひ、夫人に對する自己の愛情に就て、その「魂の告白」の中で具に語つてゐる。それによると、魂の高さと感情の大きさとに於て、かほどの婦人を曾て見たことがないと云ひ、彼れの愛情の中に多分の尊敬が含まれてゐることを漏らし、又彼と夫人とは十年間共に鬪爭と危險とに身を曝した、彼にとつて夫人は共に戰場を馳驅した戰友であつた。又夫人は人類の罪を背負うて十字架にかゝつた基督の如くに、苦しみ惱む人類を代表してゐる、かくも長きに亙つて氣高く强く苦惱を耐へ忍んだ婦人に對しては、鐵の如き心を持つ男子と雖も愛と敬とを持たざるをえない。更に夫人と始めて知合つた時に、彼は無名の弱冠の青年であつた、然るに彼に對して夫人は云つた「私はあなたを信じます」と。夫人は彼にとつて知己であつた、彼は此の一言に對して夫人の信賴に背くことは出來ない。最後に彼は夫人に對して恩義を感謝する、彼は優れたそして溫き心の持主ではあつたが、又他面に於て野性的の本能を持つてゐた、夫人は彼れのよきものを延ばして呉れて、惡しきものを壓へて呉れた、彼れの今日あるは一に夫人の御蔭であると。

一言にして云へば、彼れの夫人に對する愛情は、甘へる息子の母親に對するが如くである、將來自分が結婚した場合に若し出來るならば、夫人と妻と三人で睦じく一家に住みたいと云つてゐる。私の判斷によれば、兩者の關係は世の常の戀愛關係ではない、戀愛的の分子を含んではゐるが、戀愛以上の分子を多分に交へる一種特異の關係である。人若しラッサールの訴訟事件をば、一婦人に對する戀愛からと說明するならば、それは當をえてゐない、又訴訟で勝つた後の報酬を意圖したと云ふならば、之も固より誤りである。彼れの訴訟事件には、多少の獵奇的の冒險性が與からないではない、又生涯の使命を顧みざる無軌道性が窺へないでもない、だが吾々は此の中に見る、不正に對する止み難き義憤の念、弱者に對する一片の俠氣、敵の愈々多きを見て愈々燃える戰鬪的精神、一度乘り出すや飽くまでも屈せざる强靱の性格を。ラッサールの學的著作の行間に躍動するパトス、勞働者政黨の陣頭に立つた時のパトス、そのパトスが異る姿を以てこゝに現はれてないと、誰が云ひ切ることが出來ようか。

それではハッツフェルト夫人との因緣は彼にとつていかなる影響を與へたであらうか。惡い方面から擧げるならば、九年の歲月は學徒としての彼に對しては、損害であつたに違ひない。ヘラクライトスの著作は、その爲に一八五七年までを待たねばならなかつたのである。又相手が至らざるなき迫害を加へただけ、彼も之に對應して、策略を弄し陰謀を企らむの外止むをえなかつた。彼れの目的の爲に手段を擇ばざる性癖は、此の事件から育成されたと云はれてゐる。更に夫人を通じて貴族社會と接觸し、爛れた古き上層階級の思考習癖に自然と感染して、新興階級を擔ふ改革者に似合はしい潔癖性を失ふに至つた。後年彼とビスマルクとを結んだのは、夫人であると云はれてゐる。だが然し彼に對して喜ばしい結果は、更により大きいと云へる。先づ訴訟が勝つてから、夫人は莫大な財產を伯爵家から受取つたが、彼はそれから每年四千ターレルを貰ふこととなり、爾來衣食の資に煩はされることなく、終生獨立の生活を維持することが出來た。次に最に述べたやうに、夫人は彼に對して感情上に於て慰安者であり鼓舞者であつた。啻にそれのみでなく、政治的才能に惠まれた夫人は、彼にとつて公共生活の助言者でもあり智囊でもあつた。彼が政治的舞臺に乘り出してから上流階級や宮廷からの情報が夫人の手を經て彼に傳へられたのである。更に夫人の財產は彼れの政黨にとつての金穴であり、彼れの死後に及ぶまで變らなかつた。彼れの亡き後に夫人は自らを、ラッサールの遺鉢を傳へる最大の親友と思ひ、彼れの後繼者シュヴァイツァーと拮抗して、自ら「ハッツフェルト夫人黨」なるものを組織したことさへある。此の夫人と獨逸社會主義政黨史とは、ラッサールとの關係を抜きにしても、離れ難き關係がある。最後に此の事件は獨逸全土の注目を集めただけ、始めて彼れの名を公衆に銘記せしめたと云ふことが出來る。「魂の告白」は云ふ。

私が惹き起した電流の如き感銘に就ては、何物を以てしてもその概念に近いものさへも與へることは出來ない。全市と全州の全人口が、いはば感激の大波に乘つて泳いだ。民衆は唯一人の顏を見守つた。彼等は私を理解した。だが啻に民衆のみではない、あらゆる階級、全ブルジョアジーが興奮に醉つた。……夫人と私とが、デュッセルドルフに到着した時に、その町の住民は殆ど耳を聾する喝采を以て私を迎へた。彼等は夫人と私とを載せた馬車の馬を引き外づして、自ら吾吾の馬車を曳いて吳れた。事件は本來何等政治的のものではないのに拘らず、民衆はよく見抜いた、之は言葉の最も深い意味に於て政治的である、そして之こそ壓迫に對する叛逆であると。

私は曾に無罪であつたのみならず、私の敵に對して決定的の打撃を與へた。此の日はライン州に於て、並ぶものなき雄辯家の名聲と、限りなき精力の男子だと云ふ名聲とを、私に與へた。そして新聞は全王國を通じて此の名聲を傳へた。すべてのものは私を讃美して、全世界を向ふに廻はして、唯獨り戰ふ力ある人間となした。ライン州に於ける民主黨が、その首領の一人として私を認識したのは此の日以來である。

ラッサールが自己を語る此の言は、多少の誇張があるだらう、だが此の事件以來、フェルヂナンド・ラッサールの名が、全獨逸の看過しえざる存在となつたことは確かであらう。そして私の考へる所では、此の事件に於て彼が樣々の壓迫と鬪爭した間に、彼が腦裡に構成した共産主義が、始めて彼れの血と肉となり、彼を動かす人格的の所有物と化したと云へないであらうか。若しかく云ふことが許されるならば、歷史哲學者が書齋裡に描いた共産主義は、今こそ現存社會に働きかくべき實踐的の原理となつたのである。

訴訟事件が始まつてから、二年の後、一八四八年の三月革命が起つた。此の革命とその後の反革命とには、ラッサールの全力的の活躍を見なかつた、蓋し彼れの手は事件によつて囚はれてゐたからである。だが彼が全然姿を現さなかつたのではない。マルクスがケルンで「新ライン新聞」を起すや、彼はデュッセルドルフからの寄稿者となり、之で彼とマルクスとは相知の間柄となつた。彼は後々まで自らをマルクスの門弟と呼んださうであるが、彼がマルクス殊に「共産黨宣言」から多大の示唆を受けたことは、後に述べるが如く、その作物から容易に窺知することが出來る。十一月伯林にクーデターが起り三月革命の結果が晝餅に歸するや、彼は十一月廿一日ノイスに於ける民衆大會で、武裝防衞を主張した、その爲に二十二日デュッセルドルフで逮捕され、王權に對して武裝を市民に煽動したとの廉で起訴された。翌年五月三日同地の陪審法廷で、彼は無罪を宣告されたが、別に「官吏に對する暴力的反抗煽動」の廉を以て、有給判事のみの裁判で、七月五日に六ケ月の禁錮を宣告され、五〇年の十月一日から五一年の四月一日まで監獄に囚はれたのである。彼が陪審法廷で自己を辯護した「陪審演說」(Assisen-Rede)は、印刷されて今も殘つてゐるが、恰も二月八日ケルンに於てマルクスも亦、陪審法廷で辯護演說を爲した。二者を對照すると、後者の簡潔端的なるに比して、前者は冗長に失して餘りに自己を語り過ぎてゐる。フランツ・メーリングが「ラッサールが刀を大上段に振りかぶつてゐる間に、マルクスは致命的な一突きで止めをさした」と云つたのは、肯綮をえてゐる。此の演說でラッサールは三月革命と反革命との意義を論じ、クーデターに對する議會の無能を詰責してゐる。彼は前項で引用したやうに、此の時既に自分の理想を社會共和國だと云ひ、マルクスと同じく社會主義の前に自由主義革命の必要を認識してゐたが、反革命に對するブルジョアジーの無氣力を眺めて失望と憤慨を感じたに違ひない、だが彼自らが此の失望と憤慨とを、ブルジョアジーとの絶緣に於て漏らすに至つたのは、尙十四年の時日の經過を必要としたのであつた。

(4)

一八五一年四月彼は監獄から出た、五四年の八月には訴訟事件は落着した。之から後の約八年間は彼にとつて

勞作と社交との靜な時代であつた。彼は巴里から歸國した當時に立ち戻つて、ヘラクライトス研究の完成に着手した。その時分彼は從來と同じくデュッセルドルフに住んでゐたが、研究の片手間には附近の進歩的勞働者を集めて政治的の講演をやつてゐた。丁度國王の腦病が重つて、進歩的な皇太弟が攝政に卽くだらう、そして宮廷や政府の方針が變化するだらうと云ふ情報が伯林の伯爵夫人から屆いたので、彼は豫ての知人であつたアレキサンダー・フォン・フムボルトの斡旋によつて、一八五七年デュッセルドルフから伯林に移住することが出來た。彼が反革命に對する「陪審演說」で國王に對する復讐を云々したので、伯林政府は今まで彼れの移住を許さなかつたのである。移住して同年末に、彼れの傑作「ヘラクライトスの哲學」(Die Philosophie Herakleitos des Dunklen von Ephesos) が出版された。私は此の書を通讀したことはないが、傳記者ベルンシュタインの云ふ所によれば、專門家の間にも評價は區々に分れ、或は劃期的の文獻なりと云ひ、或はヘーゲルにより旣に書かれた以上の何ものもないと云ふ、然し後者に屬する批評家も、之が頗る優秀な作物たることは爭はないやうである。全篇を貫く思想はヘーゲル的であり、後に彼が力說した國家觀は、旣に此の中に述べられてゐると云ふ。二年後に戲曲「フランツ・フォン・ジッキンゲン」(Franz von Sickingen) が現はれた。宗教改革當時の獨逸君侯に反抗したジッキンゲン (1481—1523) を主題としたのではあるが、作者がより以上に重點を置いたのは新教の改革者ウールリッヒ・フォン・フッテン (Ulrich von Hutten, 1488—1523) であつた。彼は戀人に送つた「魂の告白」の中で、自己が世上の非難憎惡の的たることを述べた後、次の如くに云ふ。

あゝゾフィー、いゝかれ、いかなる幸福な人間も親しむことを敢てしない寂しい人達が、此の世にはゐるものだ。あなたは私の悲劇を讀んで欲しい。私があなたにこゝで云ひうるすべてのことを、私はフッテンをして云はしめた。フッテンも亦あらゆる誹謗とあらゆる種類の憎惡とあらゆる敵對を耐へ忍ばねばならなかつた。私は彼によつて私の魂の映像をこしらへた。そして私が之を爲しえたのは、彼と私との運命が完全に同一であり、驚くべきほど類似してゐるからである。唯後の世のみが、彼れの如き人に對して公正である。その故に、あらゆる眞の現實の幸福を斷念することによつて、悲しい幸福を作り出すことを、人は餘儀なくされるのである。

一八五九年伊太利が佛蘭西と同盟して墺太利と戰端を交ふるや、獨逸はいかなる態度を採るべきかが、當時の喧しい問題となつた。彼は同年「伊太利戰爭と普魯亞の使命」(Der italienische Krieg und die Aufgabe Preussens) を出版して、墺太利が伊太利に敗られることは、墺太利の獨逸に對する壓力を減じ、爲に獨逸の統一を容易ならしめるものだと論じ、此の戰爭に中立の態度を守るべきことを勸めた。此の戰爭はナポレオン三世の獨逸に對する挑戰なりと云ひ、墺太利がポー河に於て敗れることは、やがて獨逸がライン河に於て敗れることを意味する、從つて獨逸は佛蘭西に宣戰すべしと云ふ議論が有力であつた。ラッサールの墺太利排斥の傾向卽ち普魯亞を中心とする「小獨逸主義」は、此の中に現れてゐる。社會問題を生涯の使命とする人々が、當時の獨逸の如き國に於て、國民問題をも關心事とせざるをえない一例として、此の書はエンゲルスの「ポーとライン」(Po und Rhein, 1859) 及び「サヴォーイ、ニースとライン」(Savoyen, Nizza und der Rhein, 1860) と共に、併せ讀まるべきである。

次で現はれたのは、六〇年夏の「フィヒテの政治的遺言と最近の現代」(Fichtes politisches Vermächtnis und die neueste Gegenwart)で、更に翌年には「レッシング」(Gotthold Ephraim Lessing)が出た。彼はルーテルを以て獨逸の最初の解放者とし、レッシングを以て之に次ぐものとし、當時の獨逸は第三の解放者を必要とすると云ひ、暗に自らを以て之に擬し、「ジッキンゲン」のフッテンに於て自己を語れると同じく、「レッシング」に於ても亦自己を語つてゐる。一八六一年彼れの他の傑作「既得權體系、實定法と法律哲學との融合」(Das System der erworbenen Rechte. Eine Versöhnung des positiven Rechts und der Rechtsphilosophie)が現はれた。ハッツフェルト夫人の訴訟事件まで法律に就て門外漢たりしラッサールは、あの事件以來法律學を研究し、遂に此の大著を爲すに至つた。私はこの書も讀んだことがないが、法律哲學上に於ては、今でも第一流の文獻と目されてゐるさうである。こゝでもヘーゲル的立場は全二卷を貫徹し、「一切の法制の文化史的進化は、愈々個人の所有範圍を制限し、愈々多くの對象を私有財產の埒外に置くことに存する」と云ひ、精細にその發展を記述する邊は、最も光彩を放つ部分であり、全き歷史哲學的綱領であると云はれてゐる。以上の如き勞作を引續き公表することによつて、彼は學徒としての名聲を獲得し、その邸宅は一部社交界の中心として、知名の人々の客間として喜ばれたのである。本文で頻りに引用される「魂の告白」の中で彼は云ふ「既に數年來私は學界に於て、非常に大きな名聲を享有したが、その名聲は引き續き增大しつゝある。吾が國の有する名流、フムボルトやベックの如きが、私に敬意を表して、自己の友人と呼んで呉れた。既に世に出た勞作の反響により、又今後尚現はるべき勞作によ

り、私の名聲は更に大きく、否愈々增大するであらう」と。

一八六〇年の夏彼は痼疾の療養の爲にアァヘンに赴き、そこで父に伴はれて來てゐた露西亞の少女ゾフィー・フォン・ゾンツェフ(Sophie von Sontzew)と知り、彼れの感情は急速に戀愛にまで發展し、遂に結婚の申込を爲すに至つた。彼れの云ふ所によれば自分は今まで多くの女性を知つた、然し結婚にまで自分を動かしたことはない、結婚とは運命を共にすることである、それは自分にとつて容易ならざる大事である。そして自分の如き特異の性格を夫とするには、通常の意味に於ける愛を以ては不充分である、眞に自分を理解し、その上での戀愛でないならば、女性の運命を不幸ならしめ、それは又當然に自分を不幸にすると。こゝに於てラッサールなるものの理解の爲に、愛人に向つて僞りなき自己描寫を試みた。之が本文で屢々引用した「魂の告白」(Seelenbeichte)の一篇であつて、印刷に附して三十五頁に餘る長文である。彼が十五歲から十六歲に亙つて書いた「日記」と同じく、此の中に彼は正直に自己を告白し自己を批判してゐる。誠にラッサールの人物と當時の彼れの心境を知るに、此の上なき貴重なる文獻である。

彼は箇條書きに自己を語つてゐるが、第一に斷つてゐるのは、彼が社會改革者たることである。彼は云ふ。

> 何よりも先づ充分に考慮して欲しいのは、私は神聖なる問題、民衆の問題に、その窮極の歸結まで、全生存を捧げた男だと云ふことである。此の問題は吾々の世紀の內に於てすら勝利を占める運命にある、だがその黨派を尙屢々重大な敗北と危險とに曝すだらう。此の鬪爭に於て私は恐るべき難境に立つかも知れない、いかなる愛情も私からこの難境を遠ざけ

ることは出來ない。私の財產、私の自由、私の生命すら、蹔えず危險に陷るだらう。私の許に何ものも一として安全なるものはない。あなたは私と結婚することによつて、あなたの存在とあなたの家屋を、噴火山の頂上に打ち建てるのだ！あなたは失敗の場合に、あらゆることを耐へ忍ぶ勇氣を持つであらうか、追放と投獄と沒落と貧乏と死までも。更により惡しきもの、恐らくは全き窮乏の生活をも。

第二に彼は自己が猶太人たることを云ひ、自分の妻は偏見を抱いてはならないと述べて、興味ある自分の志望を漏らしてゐる、曰はく「……私は政治に從事する男である、そうして更に云ひたいのは、私が一政黨の首領だと云ふことである。私のものである政黨は、決して偏見に囚はれてはならぬと云ふ原理を堅持すべきである、何故なればそは唯卑怯と云ふものだから、又その政黨は僞善の行爲を犯してはならない」と。第三に彼は自己の社會的地位に就て、次の如くに語る。

殆ど吾々の全社會は、私に關して二つの黨派に分れる。一の黨派は——全貴族階級とブルジョアジーの大部分と、更に往々にして生嚙りの自由主義者とが、之に屬する——私を恐怖し私を憎惡する。ブルジョアジーの殘餘と民衆とが屬する他の黨派は、私を敬し私を愛し、私を崇拜することさへ稀ではない。此の派の人々にとつて、私は最大の天才と殆ど超人的の性格の男である、私よりして彼等は最も偉大なる行爲を期待する。あの敵黨も亦固より私から偉大なる行爲を期待する。だが私を誰よりも恐怖する正にそのことの故に、彼等は筆紙に盡くしえぬほど私を憎惡する、此のあらゆるものを食ひ盡さずんば止まない憎惡に就て、私はあなたに正しき概念を與へることが出來ないほどである。

彼を憎惡する黨派は彼に對してあらゆる誹謗中傷を流布せしめる、之に就て云ふ。

だが彼等は內心私を尊敬する正にその故に、彼等は常にそれだけ益々私を誹謗することを試みた、何故ならば徐ろに死に近づきつゝあることを自ら感ずる此の腐れかかつた黨派にとつて、誹謗こそ唯一の武器だからである。それ故に私は常に昂く額を擡げ、唇に輕蔑を浮べて手に武器を提げて、不斷に虛言を粉碎し、誹謗を撹亂し憎惡を脚下に踏まへて、常に勝利を誇つて前進した。然し私はそれによつて一層多くの憎惡をば、私の身の上に倍加した。何故なら憎惡が私に對して無力であればあるほど、憎惡は愈々狂的になるからであり、又私は自分に向けられた一切の攻擊から、常に愈々純粹に愈愈光彩を放つて脫出したからである。あなたが知られる如く、世に無力と敗北ほど、愈々憎惡を養ひ育てるものはないからである。

第四にゾフィーは自分と結婚することによつて、貴族社會からは排斥され、民衆からは彼ほどの人物の愛を獨占することの爲に、嫉妬羨望を受けるだらう、孤獨は彼女の覺悟するものでなければならないと云ひ、「尙その上にあなたが全日私を所有することが出來ないとしたらどうか。何故ならば、私の半日は常に科學的勞作の爲に捧げられねばならない。私は斷じて科學を斷念することは出來まい。それ故此の半日では、あなたは恐らく折々孤獨退屈を感ずるだらう！　あなたは自身にとつてかほどに値なき運命を擇んだことを、決して後悔しないであらうか」と云ふ。第五に彼は財政的狀態に就て語る。年收は四千ターレルあり、兩親の死後は、更に年二三千ターレルを加へることとならうと云ひ、自分は金の値ひを知らないものではない「あなたと語り合つてゐるのは、奇矯な思想を持つた若者ではない。年齡に於てこそ三十五に過ぎないが、その經驗に於ては九十を數へる成熟した男性である。」だが金は手段にして決して目的ではないと云ふ。最後に「吾が生涯の勝利に移る」と云つて、曩に引

用したハッツフェルト夫人の訴訟の經緯を語り、終りに夫人と自分との間の愛情の性質を論じてゐる。

此の長文の告白を受取つたゾフィー・フォン・ゾンツェフは、數週の猶豫を乞うて熟慮した後、遂に結婚の申出を拒絶した、思ふにかゝる夫を持つことの不安に堪へなかつたのであらう。「魂の告白」の中に、ラッサールの驚くべき過重の自己評價と、自己の優越を得々として語る矯慢の性格とは、遺憾なく躍動してゐる、だがそれにも拘はらず、女性に對する深い配慮と、正直に僞らず自己を語らんとする眞實性とは、掩ひ隱すことは出來ない。彼れの如き鋭角的の性格の持主は、その善とその惡とを、到る所に表現せざるをえないのである。こゝに注意すべきは、彼が自分は一政黨の首領だと云つたことである。一八六〇年の夏に於て、勿論之は彼れの幻想であつて現實ではない。だが三年の後に、社會主義政黨の首領の地位が、彼れの頭上に落ちようとは、神ならぬ身の知る由もなかつたらう。

(五) 運動

(1)

前項でラッサールの生涯を辿つて來た私は、こゝで本篇第二項「獨逸に於ける自由主義」に戻らねばならな

い。一八六一年の十二月の總選擧で多數黨となつた進歩黨は、意氣軒昂として憲法鬪爭に突進した。ラッサールが六一年の晩夏からハッツフェルト夫人と共に伊太利を旅行し、六二年一月伯林に戻つた時は、鬪爭の眞最中であつた。彼は社會主義の實現の前提條件として、自由主義を必要とするものであり、封建主義に對して先づ自由主義を鬪ひ取る爲に、進歩黨と協同することを躊躇しなかつた。三月革命は彼をしてブルジョアジーに失望せしめたとは云へ、未だ尙彼等と絶緣するには至らなかつた。今や封建主義と自由主義との鬪爭が開始された、彼は直に自由主義の陣營に身を投じたのである。六二年四月十六日彼は伯林の進歩黨の地方支部に招かれて、一場の講演をすることとなつた。彼の擇んだテーマは當面の憲法問題である、然し學術的の形態を借りて、直接黨の採るべき方針には觸れなかつた、之が「憲法本質論」(Das Verfassungswesen) である。彼は云ふ、憲法とは現存する事實的權力關係の表現に過ぎない、事實的權力關係のある所卽ち旣に憲法が存在するのであり、かの所謂憲法と稱するものは、此の關係を表現する一片の紙たるに止まる。從つて事實的權力關係に何等かの變動の起るや、必ずや憲法の變動は起る。一八四八年の三月革命は、獨逸の社會の事實的權力關係に變動の生じた結果である。あの革命後の憲法制定議會にして、若し憲法の何たるかを理解したらんには、國王の握れる權力關係に直進して、それを改革すべきであつた、然るに紙片としての憲法の云々に時を浪費してゐる間に、國王の事實的權力關係は反革命を成功せしめたのである。所謂事實的權力關係の中には、色々のものを包含するが、その中に軍隊を決定的なるものとして注意した。かくして彼は當面の軍備擴張案に就て直接觸れないが、心あるものには擴張案が何

を意味するかを悟らしめたであらう。「憲法本質論」は、その表現の平易なること、論述の明快なること、唯物史觀的思想を利用してゐることに於て、ラッサールの數多き講演の中で、白眉として數へらるべき一つである。講演は非常なる喝采を博しはしなかつたが、引き續き各地方で行はれたことで、聽衆に要求されたことは推知される。「憲法本質論」は當面の問題に對する概論に止まつて、差し迫れる鬪爭の具體的の指針を示してはゐなかつた。然るに憲法鬪爭は更に發展して、九月進歩黨が軍備擴張案を否決するや、十月ビスマルクは議會を解散して、軍備擴張を決定し、議會の同意を經ずして增稅を斷行した。こゝに於て彼は十一月十七日伯林に於て、憲法に關する第二の講演を行つた、之が「當面の任務」(Was nun?) である。こゝでは彼は端的に當面の議會の任務を捉へた、彼れの提議したのは、議會が自ら停會に次ぐに停會を以てし、事實上議會の存在せざることを中外に知らしめよと云ふのであつた。議會の同意が無視されたならば、既に事實上議會は存在しないのである。而も封建主義者は事實上存在せざる議會を、形式上保存して立憲國たる外觀を保たんとするのである。故に當面の急務は名實議會が存在せざることを明かにし、普魯亞が絶對專制の國たることを公示するにあると云ふのである。後にエンゲルスも書いた如く、政府は外國の信用を維持する爲に、議會の存在を必要としたのである。ラッサールは敵の裏を掻いて敵を屈せしめんとするのであつた。所が進歩黨は彼れの提案に耳を貸さなかつたのみならず、彼は權力を以て法律の上に優越せしめるものであり、かくては徒に封建主義を援助するに止まる、議會はあくまでも法律を以て權力の上に置くべきだと反擊した。こゝに於て彼は第三回目として、一八六三年二月七日、「權力と法律」(Macht und Recht) を印刷して公表した。こゝでは權力と法律との關係に正面から觸れずして、若し法律を神聖視するならば、三月革命後の四月六日と八日との法律こそ、神聖視さるべきである、然るに現進歩黨の人々は、あの法律が反動により蹂躙されることを默過したのである。かかる人々がいかにして法律の神聖を云々する資格あるや、之を云ひうるものは唯當時の「民主主義者」あるのみと云ふ。

進歩黨と共に自由主義の戰線に加はつたラッサールは、かくして進歩黨と行路を異にせざるをえなくなつた。三月革命の反動時代に自由主義者を痛罵した彼は、今は再び自由主義者に失望せざるをえなかつた。當時存在した三角關係、卽ち封建的分子とブルジョアジー、プチ・ブルジョアジーと、プチ・ブルジョアジーとは、自由主義を標榜して封建的分子と鬪爭してゐた、プロレタリアの大多數は盲目的に自由主義者に追隨したが、その中の進歩的分子は社會主義の爲に自由主義を前提條件とし、そして自由主義者の自由主義の妥協不徹底に失望してゐたのであつた。ラッサールはプロレタリア中の此の分子を代表するものである。然らば彼は三角關係をいかに處理すべきであるか。封建的分子と結合すること、之は固より論外である。それでは依然としてブルジョアジーとプチ・ブルジョアジーに追從するか、彼等の手に於て自由主義の成らざるを如何せん。彼は社會行路の分岐點に佇立した、而して決然として、プロレタリアを糾合して、自由主義を鬪ひ取り社會主義を實現せんと企てた。だが之は自由主義者と絶緣することであつて、自由主義と絶緣することを意味しない。自由主義を進歩黨より奪つて、プロレタリアの手に擔ひ上げようと云ふのである。ラッサ

ールによつてルビコンの河は渡られた、而して彼と共に獨逸勞働者階級の先頭も亦ルビコンの河を渡つたのである。

こゝで私は第三項の「獨逸に於ける社會主義」に戻らう。ライプチッヒの全獨逸勞働者大會中央委員會が議長オットー・ダンメルの名を以て、勞働者階級の採るべき態度に關しラッサールに對して解答を求むる手紙を送つたのは、一八六三年の二月十一日であつた。その手紙の示すが如く、彼等とラッサールとを繋いだのは、彼れの小冊子「勞働者階級の理念と現今の歷史的時代との特殊關係」であつた。ラッサールの名は三月革命を以て多少は進歩的分子に知られたかも知れないが、事は餘りに古い。ハッツフェルト夫人事件は、新聞の社會面を賑はしたであらうが、彼と勞働者階級とを結ぶものではない。憲法に關する三個の論文も、直接勞働者を問題としてはゐない。前記の小冊子こそ彼が勞働者階級の前に自己を現出した最初のものであつた。此の講演は一八六二年の四月十二日——「憲法本質論」の講演に先だつ四日——伯林郊外のオラニエンブルグの「手工業者組合」(Handwerkerverein)の爲に爲されたもので、後小冊子として公刊され、名づけて「勞働者綱領」(Arbeiterprogramm)と云ふ。「手工業者組合」と云ふも事實に於て機械工場勞働者の組合であつた。その中で彼は云ふ、いかなる時代も支配的原理を持つ、中世の支配的原理は土地所有であつた。然るに近世當初から產業革命は進行し、動產の所有者即ちブルジョアジーが擡頭し、遂に動產所有を以て支配的原理とした、之が一七八九年の大革命であつた。然るに彼等は財產所有者たることの故に、之を以て自己の特權となし、財產資格を以て選擧權を制限し、間接稅を課して自らは免稅され、新聞紙の發行に保證金制度を設けて發行を困難ならしめた。所が一八四八年四月廿四日の革命を以て勞働者階級が始めて自己の原理を社會の支配的原理たらしめる時代は開始したのである。だが中世の土地所有者近世の資本家と異り、彼等は特權となすべき何等の排他的獨占的要素を持合さない、從つて彼等が支配することは、すべての人の支配に外ならない。それでは勞働者階級の原理はいかに實現さるべきかと云ふに、彼は普通直接選擧制度を擧げてゐるが、之に就て多くを云はない。人は或は勞働者階級の原理が支配的原理となることは、道德上の退歩と思ふかも知れない、然し從來の階級は特權階級なりしが故に、その特權を維持せんとする利己主義に陷るが、勞働者階級は特權を主張すべきものを持たざるが故に、常に全國民の進歩と發展とに一致する。最後に勞働者階級は特殊の國家觀を有する、ブルジョアジーは國家を以て自由と財產とを防衞することのみを目的としたが、彼は之を「夜警說」と呼び、かくては弱肉强食の修羅場を演出するのみ、國家の目的は人類をして積極的發展、間斷なき進歩を遂げしめることにある。別言すれば人類の使命即ち文化を實現せしめること、更に換言すれば、自由に向つて人類を敎化し發展せしめることにある。而して勞働者階級は本來窮乏にして、國家の援助を受くべき地位にゐるが故に、强き本能によつて國家の使命を直觀するのである。一八四八年を以て始まる新時代の原理を擔當するものは勞働者階級である、勞働者諸氏こそ實に今日の殿堂がその上に建立さるべき盤石である。之が「勞働者綱領」の骨子である。

講演は聽衆に對しては、さまで感動を與へなかつたやうである、思ふに聽衆の理解力が不足してゐたのであら

う。だが今日吾々が之を繙く時に、その文章の平明暢達なると古典的の表現の美しさとに打たれざるをえない、その歴史を大觀して支配階級隆替の意義を論じ、現代に於ける勞働者階級の歴史的使命を語る所、誠にラッサール講演中の傑作である。人は直に此の中にマルクスの「共產黨宣言」の影響を觀取するであらう、だが後者の唯物論に對比して、ヘーゲルの理想主義は全篇の論述基調に於て又國家論に於て、前者を貫徹してゐる。若し「宣言」が全歐洲に適用すべきものならば、「綱領」は特に獨逸に適用した「宣言」とも認められる。だが「勞働者綱領」は、まだ歴史哲學的の文獻であつて、當面の勞働者階級の指針となるには、尙餘りに抽象的である。恰も「憲法本質論」に對する「當面の任務」がなければならないが、此の要求を充たしたのが「公開答狀」(Offenes Antwortschreiben an das Zentralkomitee zur Berufung eines Allgemeinen Deutschen Arbeiter-Kongresses zu Leipzig) である。

一八六三年三月一日附を以て發送された「公開答狀」は、先づ冒頭に於て云ふ、政治的關心を有することと進歩黨に從屬することは別個の事柄である、進歩黨が信賴に値せざる點は數多く、勞働者階級は宜しく獨立の政黨を組織すべしとして、後の照應の伏線とす。次で進歩黨の社會問題に對する金科玉條たるシュルツェー・デーリッツの自助的組合の批判に移る。信用組合や原料組合は、獨立者の爲に役立つであらうが、勞働者階級の爲に何の效果もありえない。而も之等の組合の役立つ手工業は、工場工業との競爭に於て結局沒落の外なき運命にあると斷じ、殘るは消費組合であるが、勞働者にとつて主要なるは生產者としてであつて、消費者としてではない、然るに勞働者の賃銀に關しては賃銀鐵則なるものあり、今日の狀態に於ては「平均賃銀は一國に於て、勞働者の生存及び繁殖に習慣上必要とされる生活費に歸着する。」之れ以下なることもなき代り、之れ以上たることも出來ない。誠に之こそ彼等を就縛する鐵鎖の如きものである。從つて消費者としての場合を見ても、生活費の節約は賃銀の低落を來すから、結局消費組合も亦彼等を利するに足らない。かくシュルツェーを批判した後、然らば之に代るべき對策如何と云ふに、勞働者は生產組合を組織し、自ら生產者とならねばならない、然し資力なき勞働者の自助的組合は到底不可能なるが故に、國家が自己の信用を生產組合に與ふべきであると云ひ、彼が「ヘラクライトスの哲學」以來堅持する國家觀を提げて、之こそ正に國家の使命なりと云ひ、更に詳細に生產組合の組織方法を說く。それでは勞働者のかかる要求を實現する方法は如何。國家とは人口の大部分を占める貧困の階級・苦惱の階級に屬するのである。若し獨逸の立法機關にして、普通直接選擧權により成立するならば、人口の大部分を占める階級は、國家をしてその使命を果すべく規定することが出來るだらう。普通直接選擧權こそは啻に政治的の根本原理たるのみならず、亦社會的の根本原理である。それは勞働者階級の物質的境遇を改善する唯一の手段である。普選の實行の爲には、全獨逸勞働者同盟を組織せよ、若しその黨員にして十萬を數へるならば、既に動かすべからざる威力たるだらう。君等は右顧左盼してはならない、普通平等直接の選擧權、唯之のみに視點を集中せよ。之が君等が勝利を占める旗幟である。君等にとつて之れ以外何ものもないと。

「勞働者綱領」を以て歷史哲學的文獻とせば、「公開答狀」は、現在社會を解剖分析する社會科學的の、又未來社會を指示する社會思想的の文獻である。又前者を以て總論とせば、後者はそれを適用した各論である。その平明簡潔直截は勞働者にも理解し易く、その筆力の雄勁と表現の華麗は、後年の讀者をも魅了する力がある。ラッサール講演中の逸品たるを失はない。今や勞働者階級は進歩黨と獨立した政黨を組織すべきこと、その政黨は普通平等直接選擧權の獲得を目標とすべきこと、之を手段として差當り實現すべき社會的目標が、國家の信用による生產組合の設立なるべきことが明かにされた。自由主義政黨が躊躇逡巡進みえざりし普選は、取つて勞働者政黨の手に拾はれた。なるほどその中には社會主義は少しも觸れられてゐない。然し當時の官憲の取締りの峻嚴さと、當時の勞働者の知識的水準とを考へて、彼は自ら意識して回避したのであらう。若しマルクスをして彼に代らしめたらば全く別種の提案をしたに違ひない。然しマルクスよりもラッサールは、よりよく獨逸を把握してゐた。彼は國家信用の生產組合の設立が、差當り勞働者に直接的な具體的な目標として適當であると考へた。況んやそれは一八四八年のステファン・ボルンの「勞働者同胞會」以來俚耳に親しんでゐたのである。

「公開答狀」を受取つたライプチッヒの中央委員會は三月十七日之を討議して採用することを多數を以て決定し、全獨逸勞働者大會を開く爲の中央委員會を自ら解體し、別にラッサールの綱領を持つ全獨逸勞働者同盟を建設することを聲明し、同地方の勞働者の會議に之を諮つた、會議は千三百五十票對二票の多數を以て之に贊成し、直に同盟への組織に着手した。所がハムブルグとライン州の勞働者はラッサールに贊成したが、之に反對する聲は小さくなかつた。こゝに於てラッサールは自ら出馬して、自己の綱領を說明する必要を認め、四月十六日のライプチッヒを皮切りとして、伯林は進歩黨の强固な根據地であるだけ失敗したが、フランクフルトとマインツとの勞働者大會では輝かしい成功を收め、遂に一八六三年五月廿三日ライプチッヒに於て、十一都市を代表した十二名が集まり「全獨逸勞働者同盟」(Allgemeiner Deutscher Arbeiterverein) は成立した。ラッサールとその友人チーグラーにより起草された規約第一條は云ふ「吾が同盟は、普通平等直接の選擧權によつてのみ、獨逸勞働者階級の社會的利益が充分に代表され、又社會に於ける階級對立を眞正に除去することが遂行されうるものとの確信より出發して、平和的にして且つ合法的の方法により、殊に輿論の說得に成功して普通平等直接の選擧權の獲得に努力する目的を追求せんとするものである」と。而してラッサールは五年の任期を有する會長に選擧され、夥しき權限が會長に與へられ、彼は宛然同盟の獨裁者となつた。後年の「獨逸社會民主黨」はこゝに成立したのである。

ラッサールの「公開答狀」を發表するや、之を以てウィッテンベルヒの敎會の鐵扉に揭げたルーテルの抗文に比したさうだが、後年に亙る影響を考へるとき、此の比較は必ずしも失當ではない。一八四〇年猶太民族獨立の爲に武器を取つて陣頭に立たんと夢み、一八六〇年自らは一政黨の首領だと云つた彼は、「レッシング」に於てルーテル、レッシングに次いで獨逸を解放するものを以て自らを擬した彼は、今やその夢を實現しえたのである。

(2)

だがラッサールの前途は、砥の如き坦々たるものではなかつた、幾多の荊棘が横はつてゐたのである。十萬の黨員を期待した同盟は、成立の年の秋に漸く千に達したに過ぎない。勞働者の冷淡と無關心とは、彼をして「深刻にして苦き失望」を感ぜしめ、更に「內心の擴まりゆく憤懣」をさへ惹起した。又彼にして起てば同志は彼を援助すると豫期したに拘はらず、必ずしもさうは出來なかつた、殊にロードベルツスの反對は、最も彼を嘆かしめたと云ふ。黨內の幹部間に不和は絕えなかつた、始めて彼を出馬させたファールタイヒは遂に除名さへされた。更に資金の缺乏があり、彼に對する檢事の起訴は、相次いで行はれた。今一々之を述べるに堪へないが「勞働者綱領」の如きに對してさへ、所有階級に對する無所有階級の憎惡と輕蔑とを煽動した廉で起訴されたのである。吾々は法廷に於ける辯護演說として「科學と勞働者」(Die Wissenschaft und die Arbeiter)「間接稅と勞働者階級の境遇」(Die indirekte Steuer und die Lage der arbeitenden Klassen)の如き名篇を持つことは出來たが、彼としては應接に暇なかつたらう。同盟の會長として事務を處理する外に、反對黨の反駁に答へる爲に筆を執らねばならず、此の繁忙の中に「バスチア・シュルツェー」(Bastiat-Schulze von Delitzsch)の如き長篇が物されてゐるのである。元來殆ど無より有を作るが如きラッサールの運動は、容易に成果を期待すべきではなかつた、ラッサールは難事に屈せざる強者であつた、だが彼は恒久性と堅實性と持續性とに乏しかつた。之に乘じて危險なる陷穽が彼を誘惑したのである。

私は再び曩に述べた三角關係に戻らう。こゝに國王、大地主、官僚、軍部を一團とする封建主義者と、ブルジョアジーの自由主義者と、プロレタリアートの社會主義者とがある。ラッサールは自由主義者が自由主義に不忠實なることを責めて、プロレタリアートの獨立の政黨を組織した。全民衆を背後に負うて封建主義者と鬪爭してゐた自由主義者は、思ひもかけぬ異分子を背後に見出して、周章狼狽し憤慨激怒した。彼等は之を裏切者と云ひ反動の間諜と罵つた。かくして自由主義者と社會主義者との溝は深められ、自由主義者は自然に封建主義への鬪爭を緩和せざるをえなくなつた。封建主義者は自由主義戰線の攪亂を見て歡喜した、何故なれば漁夫の利を占めうるからである。彼等は社會主義者を自由主義から離間しうる限りに於て、誘ふに好餌を以てするであらう、況んや封建主義者の中のビスマルクの如き卓越した辣腕家が、此の狀態を傍觀する筈がない。社會主義者は自由主義者より自由主義を奪うて、自らの旗幟とした。だがその勢力は未だ微弱にして獨力を以て自由主義を鬪ひ取るの力がない。況んや自由主義者から敵對の地位に置かれて孤立に陷つた。彼等は反自由主義者の故を以て封建主義者に接近する可能性がある。ラッサールの前に展開された三角關係はかくの如きものであつた。彼は三角關係の一角に身を置いて、往くべき路を思案した。人間屢々この分岐點に立つことが多い。而してラッサール・今や焦慮し功を急いだラッサールは、遂にビスマルクに接近して、上からの革命によりて普選と生產組合とを實現しようと考へた。曩には十萬の威力を以て鬪ひ取らんとしたものを、今や封建主義者の袖に縋つて、恩惠として下賜

されることを夢みるに至つた。

一八六三年から六四年に亙つて、彼はハッツフェルト夫人の媒介によつて、屢々ビスマルクと會見した。話題が普通選擧と生産組合とであつたことは云ふを俟たない。ラッサールは迂遠な學究ではない、彼はビスマルクと共に俗世を馳驅しうる現實的政治家である。だがラッサールには自己の優越性を誇示せんとする稚氣がある、此の稚氣を垢拔けして現實に徹底しうる限りに於て、ビスマルクはラッサールよりも卓越する政治家である。ビスマルクは後年議會に於て云つた「ラッサールは決して共和主義者ではなかつた。——彼れの思想は明かに國家的君主主義的であつた。……獨逸帝國がホーヘンツォーレルン家を以て終るか、又ラッサール朝を以て終るかは、恐らく彼にとつて疑問であつたらうが、彼れの思想に至つては、徹頭徹尾君主主義者であつた」と。此の一句ビスマルクの炯眼皮肉を遺憾なく表現すると共に、政治的取引に於てラッサールはビスマルクに及ばざることを示すではないか。かくて兩者の關係はやがて絶えるのであるが、それまでの間ラッサールはビスマルクに期待を續けたのである。人は之をラッサールの「戰術上の轉向」と云ふ。轉向によつて彼は獨逸に於ける自由主義の實現を延期せしめ、後のベーベル、リーブクネヒトの社會主義政黨との對立を釀し、プロレタリア戰線をも攪亂せしめたのであつた。

一八六三年の九月彼がライン州のバルメン、ゾーリンゲン、デュッセルドルフの諸市に、所謂閱兵を試み、「祝祭、新聞紙及びフランクフルト議員會議」(Die Feste, die Presse und der Frankfurter Abgeordnetentag) を演

說するや、その攻擊する相手は常に進步黨のみであり、封建主義者に對しては一言も批判を加へなかつた。之れ既に轉向の證左であるが、ゾーリンゲンの演說會が進步黨に屬する市長に解散されるや、彼はビスマルクに電報を發して、卽刻嚴重なる處置を懇望したのである、之れ亦轉向の他の例である。更にその會場で二人の勞働者が、會場を妨害した進步黨を傷つけたと云ふ廉で、四ケ月の有罪の宣告を受けた時、ラッサールは赦免願を國王に提出すべきであると云つた。之も亦轉向の例である。だがその勞働者はきつぱりと拒絕して云つた、たとへ四年間監獄に繫がれようと、國王の恩義を蒙ることは自分達の考と矛盾すると。ラッサールが轉向した時に、卒伍の黨員は寧ろ目覺めて進步しつゝあつたのである。

一八六四年五月九日ライプチッヒを振り出しに、彼は再びそして最後の閱兵旅行に立つた。ゾーリンゲン、バルメン、ウェルメルスキルヘンを巡つて、五月廿二日ロンスドルフに於て、「全獨逸勞働者同盟」成立一周年の記念演說を爲した。此の演說旅行は到る所成功を收め、聽衆に多大の感激を與へた。若し新しき宗敎が生れる時あらば、かくもあらんかと思はれるほどであつた。近づきつゝある死を豫感したかの如く、彼れの演說も亦哀調を帶びてゐた、殊にロンスドルフに於ては、「吾若し中道にして倒るゝとも、希くば吾が志を繼ぎ吾が仇を報ずるもの、吾が枯骨より生れ出でよ」と云ひ、又「此の文明の國民的大運動をして、吾が一身と共に亡びしめることなかれ。汝等の一人にして尙息ある限り、吾が點じたる此の火をして更に遠く燃え廣がらしめよ」と云つた。

過度の心痛と勞働との爲に、心身疲勞困憊した彼に、既に死病がとりついてゐた。彼は療養の爲に瑞西リギに

赴いた。之より先一八六二年伯林で彼が知合つたヘレーネ・フォン・デンニゲス（Helene von Dönniges）は、此の時ジュネーヴに滯在してゐたが、婚約者ラッコウィッツァ（Janko von Razkowitza）あるに拘はらず、リギにラッサールを訪ひて結婚を約した。然しヘレーネの父は彼との結婚を許さないので、彼は百方父の意を動かさうとしたが遂に效なく、やがてヘレーネの情も亦冷めるに至つた。ラッサールは百計盡きて父と婚約者とに決闘を申込み、父は拒んだがラッコウィッツァは之に應じて、八月廿八日ジュネーヴの郊外で、ラッサールは彈丸に打たれ、三日の後一八六四年八月三十一日遂に絶命したのであつた。

此の報獨逸に傳はるや、勞働者は有閑階級の閑事だとは取らなかつた。彼はその主義の爲に政敵の陰謀により仆れたのだと解した。その遺骸が生前彼と因緣深かりしライン州の都市に運ばれるや、帝王の葬儀も之れ以上とは思はれないほど、多數の民衆が情を籠めて、彼に告別したのである。彼れの主義と性格と情熱と雄辯と風采と、特に最後のロンスドルフの演說を想起して、こゝに「ラッサール崇拜」（Lassalle Kultus）なるものが捲き起り、永らくラッサール黨員を支配し、更に全獨逸勞働者階級に及び、ラッサールの想ひ出は、一種の神秘的な感激の源泉となるに至つた。

肉のラッサールは瑞西に於て倒れたが、靈のラッサールも亦之と共に消えたであらうか。願はくば吾々を山頂に齎らして、脚下に展開する獨逸社會黨史を俯瞰せしめよ。彼亡き後の「全獨逸勞働者同盟」はシュワイツァーに引率されて、ラッサールの遺志を固守した、やがて「同盟」とベーベル、リーブクネヒトの率ゐる「社會民主勞働黨」とは、一八七五年ゴータに於て合同し、その綱領はラッサールの思想を保持した。一八九一年新しい「エルフルト綱領」が作られた時には、ラッサールの思想は削除されて、純然たるマルキシズムのみが殘つた。かくしてラッサール主義は愈々影を薄くするかの如くに見えたが、やがて一八九九年黨内に修正運動が擡頭するや、ラッサールによるマルクスの修正が叫ばれた。歐洲大戰が勃發するや、獨逸勞働者は干戈を執つて戰場に赴いたが、此の時彼等を支配するのが、マルクスの國家觀ではなくて、ラッサールのそれであることが反省させられた。戰後勞働界が混亂に陷るや、ラッサールは力强く甦つて、一九二一年の「ゲルリッツ綱領」はラッサール主義の下に作製された。一九二五年の「ハイデルベルグ綱領」では、ラッサールは聊か後退したかの氣味があるが、だが國民問題が民衆の注意に上る時、回顧は常に彼れの上にあつた。かくてラッサールから導かれる一筋の金線は經と緯となつて、獨逸社會民主黨史を貫いてゐるのである。

（六）批　判

フェルヂナンド・ラッサールの獨逸勞働者運動に與へた功績——彼のみに歸せらるべき功績——は、果して何であらうか。私は之を次の三點に要約することが出來ると思ふ。第一に彼が半ば眠れる獨逸の勞働大衆を覺醒さ

せ、自己の歴史的使命を意識させたことである。マルクス、エンゲルスも亦此の功績を分たないではない、然し彼等の適所は、既に覺醒せる尖鋭分子を教育することにあつて、未だ充分に醒めず、半ば眠れる大衆を搖り動かすには、ラッサールの思想內容と、平明暢達の文章と、その特異の性格と雄辯とのみが、必要であり又可能であつた。第二に彼が普通平等直接の選擧權獲得と云ふ單一の旗印を標榜したことである。その後に於てこそ普選の必要を疑ふものはないが、當時に於て普選の効果に就てはマルクス、エンゲルスの意見も確定的ではなかつた。だがラッサールは疑ひ惑ふことなしに、決然と普選を摑んで、之を大衆運動の目標とした。獨逸社會民主黨の發展が、彼によつて提唱された普選の實行に負ふものなることは、何人も否定することは出來ない。而も彼に多とすべきは、三月革命以來大衆に親しめる普選のみを、單一の目標となし、視點を多岐に分散せしめず、此の一點に集中して、大衆の統一を企圖したことである。若しマルクスをして彼に代はらしめば、より微妙精緻な綱領を作つたであらう、だが彼はマルクスよりも、獨逸の勞働者に而も初期の運動に、よりよく適中してゐたのであつた。第三に彼は普選を標榜することにより、大衆の注意を議會に集中せしめ、今日の所謂議會主義を確立した。マルクスに育てられたリーブクネヒトは、ラッサール亡き後までも、議會主義に反對して暴力革命主義を主張した。否マルクス、エンゲルスさへも、勞働大衆に選擧權なき當時に於ては、議會に對する態度が不明であつた。此の點に於てラッサールは、獨逸勞働者運動の社會民主主義の基礎を据ゑたと云ふことが出來る。

彼は、自由主義を唱へながら半途に彷徨する進歩黨から、自由主義を奪取して自らの旗印とした。之は必要でもあり又止むをえなかつたであらう、だがプロレタリア政黨は之によつて、社會主義と自由主義との二つを自己の肩上に擔ふこととなつた、こゝに獨逸社會主義の苦難の路が始まる。先づ進歩黨を愈々右傾化させて、自由主義の陣營を分裂させた、かくて獨逸の自由主義の勝利は、大戰後のワイマール憲法まで廷期されたのである。次に封建主義と社會主義との接近と云ふ陷穽が待つてゐた。ラッサールは此の誘惑に敗れたが、獨逸の如き狀勢に於ては、獨り彼のみならず何人もともすれば、此の危險な穽にかゝり易い。若しビスマルクが「社會黨鎭壓法」を以て社會主義を彈壓しなかつたら、獨逸社會主義界は尙永く此の妖魔に囚はれてゐたかも知れない。現に吾々は世界に否日本に於て、まのあたりそれを體驗してゐるではないか。だが以上の二點よりもより大なる不幸は、社會主義政黨自體が擔ひ上げた自由主義と社會主義との中間を彷徨することである。二つの主義は必ずしも本質的に對立せずして濟む、然し一應は互に矛盾し對立し反撥する。自由主義に重點を置くものは、社會主義に反對して改良主義に走り易く、社會主義をより重要視するものは、改良主義に對立する爲に自由主義に反對して、暴力革命と無產者獨裁に走り易い。吾々は獨逸に於て、一度は修正主義運動に際して之を見、再び世界大戰後の分裂に之を見た。自由主義と社會主義とを對立狀態に置くならば、混亂と分裂とは斷え間なく起るだらう。往くべき路は、此の二つを止揚して渾然たる統一的體系に持ち來すことに在る。ラッサールによつて自由主義は拾ひ上げられたが、その自由主義と社會主義とは、對立のまゝに放任された。獨逸社會主義運動の悲劇は、一にこゝに基因する。だが之は獨逸のみではない、凡そ一切の中間國家の社會主義に負はされた悲劇的運命であらう。日本亦

その例に漏れない。

獨逸勞働者運動に於ける二元的不統一性は、曾に以上に限られざるが如くである。半ば眠れる勞働者を搖り動かして、社會主義へ目覺めしめる最も有力な宣傳文書は、マルクス、エンゲルスの著作ではなくて、ラッサールの「憲法本質論」と「勞働者綱領」と「公開答狀」であると云ふ。マルキシストの間に弘く讀まれたベーベルの「吾等の目的」(Unsere Ziele, 1869.) すら、ラッサールの思想を以て書かれたのである。ラッサールのかくも大なる啓蒙的教育的能力は、どこに原因するかと云ふに、表現の平易文章の華麗にも依らうが、私は思ふ、彼れの思想基調が理想主義たることに在ると。實に獨逸の勞働者は先づラッサールの理想主義の洗禮を受け、次で之を克服することなしに、マルクス、エンゲルスの文獻に親しむのである。ラッサールの理想主義とマルクスの唯物論とは、對立のまゝに放任され、現存社會を說明する場合にはラッサールに賴る。私によれば、觀照者として說明者としてはマルクスに負ふものが多大であらうとも、實踐者として行動者としては、人は結局理想主義を採らざるをえないのである。獨逸勞働運動史に屢々繰返される「ラッサールに返れ」と云ふ合言葉は、勞働者の否人間の本能的要求が理想主義を呼ぶことに外ならない。然るにラッサールとマルクスとを止揚することなしに、兩者は對立のまゝに放置された。獨逸勞働運動の分裂は、此の二元的不統一に源すると云ふべきである。

だが二元的混亂の恰當の適例は、ラッサールその人の性格であらう。彼は曾て自ら云つた「自分は神聖な問題民衆の問題の爲に、全存在を捧げた男である」と。又「勞働者綱領」の中に云ふ「此の使命の高き世界的榮譽は、諸君の一切の思想を要求しなければならない。被抑壓者の不善も、思慮なき者の怠惰なる遊樂も、又小人の無害なる浮薄も、最早皆何れも諸君にふさはしからぬものである」と。かゝる言葉は當然に、その人の沒我獻身の生活を吾々に聯想せしめる。所が彼曾てある席上で、アレキサンダー・フォン・フムボルトとヘーゲルに就て激論した、フムボルトは歸宅してから自己の誤謬に氣付き、文を使者に托してそれを詫びた。然るにラッサールはその文を投げ捨てて云つた、何れが正しいかは問題ではないのだ、碩學フムボルトを向ふに廻して議論したことが重要なのだと。又晩年ヘレーネ・フォン・デンニゲスに、自分が共和國の大統領として、六頭の白馬に曳かれて、行列を練つて伯林に入城するさまを物語つたと云ふ。誠に彼れの性格を特徵付けるのは、强烈なる主我意識と優越欲と名譽欲と權勢欲とである。だが彼ほどの學問と才腕と精力と筆舌とを持つたらば、現存秩序の上の成功者として、名譽と權勢と優越とを恣にしえたであらう、然しラッサールはそれを爲さなかつた。彼は神聖なる問題民衆の問題に生涯を捧げることによつて、之等の欲望を滿足させようとした。之は吾々の看過してならない點である。所詮彼れの性格は、二元的の混亂不統一であつた。唯その各々が常人よりも力强く線太く幅が廣かつた。その故に最後まで統一し止揚することが出來ないで、あの悲劇的運命に終つた。人は自ら省みるならば、多かれ少かれ、彼と類似する二元的分子の相剋抗爭を體驗しないものはあるまい。若し統一の努力の前に、あるがまゝの事實の認識が必要だとするならば、彼こそ吾々に潛在する二元性を、擴大鏡を以て、認識せしめるもの

だらう。惱み悶える人間の姿を、全獨逸的に表現したる人、その名をフェルヂナンド・ラッサールと云ふ。

附　研究文献

（一）　ベンサムの文献

ベンサムの全集は晩年の祕書ボーリングにより編纂されてゐる。

(1) The Works of Jeremy Bentham, 11 vols., 1838-43.

全集の編纂に助力したヒル・バートンは、全集の重要な抜萃を刊行してゐる。

(2) Benthamiana: or Select Extracts from the Works of Jeremy Bentham, edited by J. Hill Burton, 1843.

ベンサムの特殊研究者とならない限り、浩瀚なる全集を通讀する必要はないと思ふ、是非とも繙くべきで又容易に手に入るのは、次の三書である。

(3) Fragment on Government, edited by F. C. Montague, 1891.

(4) Introduction to the Principles of Morals and Legislation, 1907.

(5) Bentham's Theory of Legislation, edited by C. M. Atkinson, 1914.

當時の社會的狀勢を描いたものとして、次の書は極めて適當である。

(6) A. V. Dicey: Law and Public Opinion in England, 1905, 2nd ed., 1917.

(7) Elie Halévy: Histoire du Peuple Anglais au XIXe Siècle, vol. I. L'Angleterre en 1815, 1912 (English translation: A History of the English People in 1815, 1924.)

(8) Adolf Held: Zwei Bücher zur sozialen Geschichte Englands, 1881.

ベンサムに關する傳記としては、(1)の全集第十卷と第十一卷とにボーリングの筆になる傳記があるがその記述は一般に不正確だとされてゐる。最も白眉と云ふべき傳記は次の(9)で、之はスチーフンがその「十八世紀英國思想史」三卷の續編として書かれたもので、その第一卷をベンサムに第二卷第三卷を夫々ジェームス・ミルとジョン・スチュアート・ミルに宛て、單にその人を傳へるのみでなく、その周圍を詳細に敘述した點に於て十九世紀英國思想史と見るべきである。恰も之に匹敵するのは、佛人アレヴィーによつて書かれた(12)である。アトキンソン、グラハム・ワラスの傳も亦夫々特色がある。

(9) Leslie Stephen: The English Utilitarians, 3 vols., 1900.

(10) C. M. Atkinson: Jeremy Bentham, 1905.

(11) Graham Wallas: Jeremy Bentham, 1922.

(12) Elie Halévy: La Formation du Radicalisme Philosophique, 3 vols. 1901-1904. (English translation: The Growth of Philosophic Radicalism, by Mary Morris, 1928.)

次篇のミルに關する文獻の多くは、ベンサムに觸れる所が多いが、次の三書はベンサムに關係する點が特に多い。

(13) John Stuart Mill: Autobiography, 1873.

(14) Alexander Bain: James Mill. A Biography, 1882.

(15) 〃 John Stuart Mill. A Criticism: with Personal Recollections, 1882.

次のハズリットはベンサムと時代を同じくするだけ、その本のベンサムの項は他の諸家に關する項と併せて味があり、マッカーンの書の第一篇はベンサムに當てられ、之はベンサムに關する一應の知識を豫定してゐる。評傳としては出色の文字だと思ふ。

(16) William Hazlitt: The Spirit of the Age, 1825 (Everyman's Library, No. 459.)

(17) John MacCunn: Six Radical Thinkers, 1910.

一般にベンサムの思想を題材とした文獻として注目すべきは次の著書論文である。

(18) John Stuart Mill: Bentham (in "Dissertations and Discussions, vol. I."), 1838.

(19) 〃 Coleridge (〃), 1840.

(20) Henry Sidgwick: Bentham and Benthamism (in "Miscellaneous Essays and Addresses"), 1877.

(21) Henry Sumner Maine: Ancient Law, 1861.

(22) 〃 Popular Government, 1885.

(23) 〃 Lectures on the Early History of Institutions, 1895.

(24) Roylance Kent: English Radicals, 1899.

(25) Seth Pringle-Pattison: Philosophical Radicals, 1900.

哲學史上にベンサムを特殊題目とした文獻は尠いが、次の英國哲學史はベンサムに觸れる所が多い。

(26) F. M. Forsyth: English Philosophy. A Study of its Method and General Development, 1910.

(27) James Seth: English Philosophers and Schools of Philosophy, 1912.

(28) W. R. Sorley: History of English Philosophy, 1920.

(29) A. K. Rogers: English and American Philosophy since 1800, 1922.

(30) Harald Höffding: Einleitung in die englische Philosophie unserer Zeit; übersetzt von H. Kurella, 1889.

(31) Else Wentscher: Englische Philosophie, ihr Wesen und ihre Entwicklung, 1924.

(32) E. von Aster: Geschichte der englischen Philosophie, 1927.

倫理學上から彼を扱つたのは次の三書であり、何れも傑出した力作である。

(33) Leslie Stephen: English Thought in the Eighteenth Century, 2 vols., 1876, 3rd ed., 1902.

(34) Ernest Albee: History of English Utilitarianism, 1902.

(35) Friedrich Jodl: Geschichte der Ethik, Bd. II. 3te Aufl., 1923.

法律家としてのベンサムを扱つたのは次の二書と(6)のダイシー教授の著であるが、殊にダイシーのはベンサムの思想が立法に及ぼした影響を叙述したものとして、英國思想史英國立法史の何れより見ても白眉である。

(36) Roland K. Wilson: History of Modern English Law, 1875.

(37) Coleman Phillipson: Three Criminal Law Reformers, 1923.

政治思想上より扱つたものとして次の二書があるが、ダヴィッドソンの作は凡庸に過ぎない。

(38) William Graham: English Political Philosophy from Hobbes to Maine, 1889.

(39) W. M. Davidson: Political Thought in England from Bentham to Mill (Home University Library), 1915.

一般に獨逸では次の三書を除いては、ベンサムに關する文獻は尠い。

(40) Robert von Mohl: Geschichte und Literatur der Staatswissenschaften in Monographien dargestellt. Bd. III, 1858.

(41) Oskar Kraus: Zur Theorie des Wertes. Eine Bentham-Studie, 1902.

(42) Siegwart: Benthams Werke und ihre Publikation ("Politisches Jahrbuch der schweizerischen Eidgenossenschaft", 1910, SS. 285-403.).

尙ベンサム自身の著作目錄と彼に關する文獻の目錄とは、(12)のアレヴィーの英譯の卷末に掲げられてゐる。

邦文としては

(43) 中島力造　英國功利說の研究

(44) 島本愛之助　英國の政治道德の基調としての功利主義の發達

(45) 河上肇　經濟學大綱

(46) 河合榮治郎　社會思想史研究　第一卷

(11) ミルの文獻

ミルの全集は編纂されてゐない。彼れの著作を年代順に列擧すれば次の如くである。

(1) Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy, written in 1831, published in 1844.

(2) System of Logic, Ratiocinative and Inductive, 1843.

(3) Principles of Political Economy, 1848.

(4) On Liberty, 1859.

(5) Considerations on Representative Government, 1861.

(6) Utilitarianism, 1863.

(7) Examination of Sir William Hamilton's Philosophy, 1865.

(8) August Comte and Positivism, 1865.

(9) Inaugural Address at the University of St. Andrews, 1867.

(10) England and Ireland, 1868.

(11) On the Subjection of Women, 1869.

(12) Autobiography, 1873.

(13) Three Essays on Religion, 1874.

(14) Dissertations and Discussions, 4 vols., 1859-1875.

(15) Socialism, edited by W. D. P. Bliss, 1891.

(16) Letters Inédites de John Stuart Mill à August Comte, publiées par M. Lévy-Bruhl, 1899.

(17) Letters, edited by H. S. R. Elliot, 2 vols., 1910.

右の中でアリッスの編した「社會主義」は、ミルが社會主義に就て書いた遺稿を、ヘン・テーラーが序文を附して一八七九年の二月から四月に亙り Fortnightly Review に連載したのを中心として、彼れの著書中の社會主義に關係ある部分と併せて出版されたもので、今日之を手にすることは殆ど不可能であり、右の遺稿はゴンペルツの獨逸譯の全集 (John Stuart Mills Gesammelte Werke, übersetzt von Theodor Gomperz, 1869 ff.) を見るの外はない。以上の著作の外にミルは一八六九年、父の Analysis of the Phenomena of the Human Mind に註解を附して出版してゐる、此の註解は彼れの心理學說を知るに必要な文獻である。

邦譯としては (4) に柳田泉の「自由論」があり、(12) に今泉浦次郎石田憲次共譯の「ミル自敍傳」と西本正美の「ミル自傳」(岩波文庫) とがあり、(2) の一部が「社會科學の方法論」として伊藤安二により譯されてゐる。(14) の論文集四卷は他の著作の何れにも劣らざる重要さを有するが、次に列擧する論文は、特に必要なるものである。

(18) Professor Sedgwick's Discourse on the Studies of the University of Cambridge, 1835 (vol. I.)

(19) Bentham, 1838 („)

(20) Coleridge, 1840 („)

(21) M. De Tocquiville on Democracy in America, 1840 (vol. II.)

(22) Bailey on Berkeley's Theory of Vision, 1842 („)

(23) Michelet's History of France, 1844 („)

(24) The Claims of Labour, 1845 („)

(25) Guizot's Essays and Lectures on History, 1845 („)

(26) Dr. Whewell on Moral Philosophy, 1852 („)

(27) Thoughts on Parliamentary Reform, 1859 (vol. III.)

(28) Bain's Psychology, 1859 („)

(29) Austin on Jurisprudence, 1863 („)

(30) Plato, 1866 („)

(31) Thornton on Labour and its Claims, 1869 (vol. IV.)

(32) Professor Leslie on the Land Questions, 1870 (〃)

(33) Maine on Village Communities, 1871 (〃)

(34) Berkeley's Life and Writings, 1871 (〃)

(35) Papers on Land Tenure, 1870-1873 (〃)

ミルの傳記として最も原本的なるは(12)の彼れの「自敍傳」であるが、此の外に次のものがある。前三者はベンサムの項で既に擧げられたが、カロリン・フォックスの「追憶記」は同時代の人々の交遊を知るに貴重な文獻である。

(36) Alexander Bain: John Stuart Mill, 1882.

(37) 〃 James Mill, 1882.

(38) Leslie Stephen: English Utilitarians, vol. III. 1900.

(39) W. L. Courtney: Life and Writings of John Stuart Mill, 1888.

(40) Samuel Sänger: John Stuart Mill, sein Leben und Lebenswerk, 1901.

(41) Caroline Fox: Memoirs of Old Friends, 1882.

ミルを繞る時代の社會的變化を語る文獻は、一般經濟史に於ける産業革命に關するものに相當し、それを列擧すれば枚擧に遑がない。唯當時の政治史として次の二書を擧げるに止める。マルチノー文史はベンサム一派の哲學的急進派に屬するだけ、その人の眼に映じた十九世紀前半期の記錄として興味がある。

(42) Justin McCarthy: History of Our Own Times, 5 vols., 1905.

(43) 〃 Short History of Our Own Times, 1907.

(44) Harriet Martineau: History of the Thirty Years' Peace 1816-1846, 4 vols., 1849.

ミルの人物思想を併せた追憶的の評傳として見るべきものに次の三書がある。

(45) Theodor Gomperz: Zur Erinnerungen an John Stuart Mill ("Essays und Erinnerungen", 1905).

(46) John Morley: Critical Miscellaneous, 3 vols., vol. III. 1909.

(47) John MacCunn: Six Radical Thinkers, 1910.

ベンサムの哲學と社會思想に關して擧げた文獻は、略々ミルにも妥當するから、重複を避けて擧げないが、次は特にミルのみを主題とした哲學上の文獻である。

(48) James M'Cosh: Examination of Mr. John Stuart Mill's Philosophy, 1866.

(49) W. L. Courtney: Metaphysics of John Stuart Mill, 1879.

(50) H. A. Taine: History of English Literature, English translation by H. Van Laun, vol. II. 1886.

(51) Charles Douglas: John Stuart Mill, a Study of his Philosophy, 1895.

(52) 〃 Ethics of John Stuart Mill, 1897.

(53) Siegfried Becher: Erkenntnistheoretische Untersuchungen zu John Stuart Mills Theorie der Kausalität, 1906.

(54) Elsa Freundlich: J. St. Mills Kausaltheorie, 1913.

(55) Else Wentscher: Das Problem des Empirismus dargestellt an John Stuart Mill, 1922.

(56) Erich Thieme: Die Sozialethik John Stuart Mills, 1910.

ミルの社會思想に關する文獻を擧げる。

(57) D. G. Ritchie: Principles of State Interference, 1902.

(58) L. T. Hobhouse: Liberalism, 1911.

(59) G. D. Ruggiero: History of European Liberalism (English Translation, 1927).

(60) Albert Lange: J. S. Mills Ansichten über die soziale Frage, 1866.

(61) Sidney Webb: History of Trade Unionism, 1894, 2nd ed., 1920.

(62) 〃 Socialism in England, 1889.

(63) Max Beer: History of British Socialism, 2 vols., 1919-1920.

(64) E. R. Pease: History of Fabian Society, 2nd ed., 1925.

(65) Hans Gehrig: John Stuart Mill als Sozialpolitiker. (Conrads Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik, 3. Folge, Bd. 47).

(66) Frida E. Gotthelft: Die sozialpolitischen Wandlungen von John Stuart Mill (Schmollers Jahrbuch für Gesetzgebung und Verwaltung, Bd. 41).

邦文としては

(67) 河上肇　經濟學大綱

(68) 大泉行雄　社會思想家としてのジョン・スチュアート・ミル

(69) 河合榮治郎　社會思想史研究　第一卷

(70) 同　一社會改革者の內的煩悶（「學生生活」に收む）

(71) 同　ミルの「自由論」を讀む（「ファッシズム批判」に收む）

(72) 同　英國に於ける土地社會主義（近刊「英國社會主義思想史」に收む）

(三) グリーンの文獻

グリーンに關する文獻は、私の「トーマス・ヒル・グリーンの思想體系」に殆ど網羅されてゐる、卽ちグリーン自身の著作に就ては同書の上卷二三一——二四五頁に、時代に關しては、上卷四三頁、六八——六九頁及び八五——八六頁、グリーンに關する文獻に對しては、二八二——二九五頁がそれである。こゝにはその內の重要なるものゝみを擧げ、更に同書の出版以後に現れた數冊の文獻を附加することゝしよう。

彼れの著作の中で次のものは全集に收められてゐない。之には明治三十五年西晉一郎譯「グリーン倫理學」があり、更に最近に友枝高彥、近藤兵庫共譯「グリーン倫理學序論」がある。

(1) T. H. Green: Prolegomena to Ethics, 1883.

全集は三卷より成り（1）を除きすべてを網羅してゐる。

(2) T. H. Green: Works, 3 vols., edited by R. L. Nettleship, 1885-1888.

全集第一卷に收められたヒュームの「人性論」に關する序文二個は、グリーンとグロッスとの編纂になる次の「人性論」の卷頭に揭げられたのである。

(3) David Hume: Treatise of Human Nature, 2 vols., edited by T. H. Green and T. H. Grose, 1875.

全集第二卷の中の長短二個の論文は、別に學生の教科用として次の書として出版されてゐる。

(4) T. H. Green: Lectures on the Principles of Political Obligation, 1901.

全集第三卷に收められた數個の論文は、別に次の單行本とされてゐる。

(5) T. H. Green: Four Lectures on the English Revolution, 1912.

(6) 〃 The Witness of God and Faith. Two Lay Sermons.

全集第一卷と第二卷とは純哲學的論文を收めるが、第三卷は一般讀者を相手とする二十餘の論文を集め、グリーンの性格と學風とを偲ぶには、此の中に却て捨て難きものが多い。

十九世紀後半の社會的變化を知るには、次の文獻は適當である。

(7) G. R. Porter: Progress of the Nation, brought up to date by F. W. Hirst, 1912.

(8) William Page: Commerce and Industry, 2 vols., 1919.

(9) A. L. Bowley: Short Account of the England's Foreign Trade in the 19th Century, 1905.

(10) 〃 Wages in the United Kingdom in the 19th Century, 1900.

(11) M. Tugan-Baranowsky: Studien zur Theorie und Geschichte der Handelskrisen in England, 1901.

(12) George Howell: Labour Legislation, Labour Movements, and Labour Leaders, 2 vols., 1905.

(13) Sidney Webb: Towards Social Democracy, 1916.

グリーンに關する傳記としては、彼れの全集第三卷に編纂者の物した「追憶記」が掲げられてゐるが別に單行本となつてゐる。

(14) R. L. Nettleship: Memoir of Thomas Hill Green, 1906.

此の外に次の二書の中にグリーンに關する評傳があり、ウォード夫人の小說の主人公として彼を描寫してゐる。

(15) James Bryce: Studies in Contemporary Biography, 1911.

(16) John MacCunn: Six Radical Thinkers, 1910.

(17) Mrs. Humphry Ward: Robert Elsmere, 1888, 44th ed., 1914.

グリーンを主題とした著作としては、次の數種がある。

(18) W. H. Fairbrother: Philosophy of T. H. Green, 1896.

(19) W. D. Lamont: Introduction to Green's Moral Philosophy, 1934.

(20) J. H. Muirhead: The Service of the State, Four Lectures on the Political Teaching of T. H. Green, 1908.

(21) Y. L. Chin: Political Theory of T. H. Green, 1920.

(22) 中島力造　グリーン氏倫理學說（明治四十二年）

(23) 島本愛之助　グリーン對シジウィックを論ず（「英國の政治道德の基調としての功利主義の發達」の附錄）

特にグリーンを題材としたのではないが、彼れの哲學に觸れる部分の多いものとして、次の諸著作がある。

(24) J. H. Muirhead: Platonic Tradition in Anglo-Saxon Philosophy, 1931.

(25) Henry Jones and J. H. Muirhead: Life and Philosophy of Edward Caird, 1921.

(26) Seth Pringle-Pattison: Hegelianism and Personality, 1887.

(27) R. Mackintosh: Hegel and Hegelianism, 1913.

(28) Hiralal Haldar: Neo-Hegelianism, 1927.

(29) Otto Pfleiderer: Development of Theology in Germany since Kant and its Progress in Great Britain since 1825, 1890.

(30) John Tulloch: Modern Theories in Philosophy and Religion, 1884.

(31) Henry Sidgwick: Lectures on the Ethics of T. H. Green Mr. H. Spencer and J. Martineau, 1902.

(32) 〃 Lectures on the Philosophy of Kant and Other Philosophical Lectures and Essays, 1905.

(33) 大島正德　イギリス新理想主義哲學（「哲學講座」第一—第三）

グリーンの社會思想に觸れることの多いものとして、次の著作を擧げることが出來る。

(34) Ernest Barker: Political Thought in England from 1848 to 1914, 1915, revised ed., 1928.

(35) David G. Ritchie: Principles of State Interference, 1891.

(36) Bernard Bosanquet: Philosophical Theory of the State, 1899.

(37) L. T. Hobhouse: Metaphysical Theory of the State, 1918.

(38) Harold J. Laski: The State in the New Social Order (Fabian Tract, No. 200), 1922.

(39) 〃 The State in Theory and Practice, 1935.

(40) G. H. Sabine and W. J. Shepard: Introduction to H. Krabbe's "Modern Idea of the State," 1922.

(41) L. T. Hobhouse: Liberalism, 1911.

(42) G. D. Ruggiero: History of European Liberalism, 1927.

(43) Ivor Brown: English Political Theory, 1920.

(44) G. E. M. Joad: Introduction to Modern Political Theory, 1924.

(45) Lewis Rockow: Contemporary Political Thought in England, 1925.

ベンサムの項で擧げた英國哲學史がグリーンを述べることは勿論であるが、その外に次の哲學史が特にグリーンに言及する所が多い。

(46) Aliotta: Idealistic Reaction against Science, 1914.

(47) G. D. Ruggiero: Modern Philosophy, English translation, 1921.

(48) 大島正德　英國哲學史

最後に私の「トーマス・ヒル・グリーンの思想體系」上下二卷は、グリーンの思想體系を全面的に叙述した唯一のものである。

(四) ラッサールの文献

ラッサールの全集はベルンシュタインの手により編纂されてゐる。各文には一々編者の詳細なる序文を附してゐるので便利である。

(1) Ferdinand Lassalle: Gesammelte Reden und Schriften, herausgegeben und eingeleitet von Eduard Bernstein, 12 Bde., 1919-1920.

此の全集に漏れたラッサールの初期の作物と書簡とは、別にグスタフ・マイヤーにより編まれてゐる。

(2) Ferdinand Lassalle: Nachgelassene Briefe und Schriften, herausgegeben von Gustav Mayer, 6 Bde., 1921-1925.

別にラッサールとビスマルクとの往復に就ては、マイヤーの次の書が出されてゐる。

(3) Gustav Mayer: Bismarck und Lassalle. Ihr Briefwechsel und ihre Gespräche, 1928.

彼れの少年時代の日記は（4）に、又本文で屢々引用された「魂の告白」は（5）に見出すことが出来る。

(4) Paul Lindau: Ferdinand Lassalles Tagebuch, 1892.

(5) Hans Feigl: Ferdinand Lassalle. Reden und Schriften, Tagebuch, Seelenbeichte, 1911.

（1）の全集中に收められた著作論文の中で、特に注意すべきものを年代順に列擧する。

(6) Meine Verteidigungsrede wider die Anklage der Verleitung zum Kasettendiebstahl, gehalten am 11. August 1848 vor dem Königlichen Assisenhofe zu Cöln und den Geschworenen. 1848.

(7) Meine Assisenrede, gehalten vor den Geschworenen zu Düsseldorf am 3. Mai 1849 gegen die Anklage, die Bürger zur Bewaffnung gegen die Königliche Gewalt aufgereizt zu haben. 1849.

(8) Die Philosophie Herakleitos des Dunklen von Ephesos. 1857.

(9) Franz von Sickingen, ein historisches Trauerspiel, 1859.

(10) Der italienische Krieg und die Aufgaben Preussens, 1859.

(11) Fichtes politisches Vermächtnis und die neueste Gegenwart, 1860.

(12) System der erworbenen Rechte. Eine Versöhnung des positiven Rechts mit der Rechtsphilosophie, 2 Bde. 1861.

(13) Die Philosophie Fichtes und die Bedeutung des deutschen Volksgeistes. Festrede, 1862.

(14) Herr Julian Schmidt, der Literarhistoriker, mit Setzer-Scholien herausgegeben, 1862.

(15) Über Verfassungswesen. Ein Vortrag. 1862.

(16) Arbeiterprogramme. Uber den besonderen Zusammenhang der gegenwärtigen Geschichtsperiode mit

der Idee des Arbeiterstandes, 1862.

(17) Was nun? Zweiter Vortrag über Verfassungswesen. 1863.

(18) Macht und Recht. Offenes Sendschreiben. 1863.

(19) Die Wissenschaft und die Arbeiter. Eine Verteidigungsrede vor dem Berliner Kriminalgerichte, 1863.

(20) Der Lassallesche Kriminalprozess, II. Heft, 1863.

(21) Die mündliche Verhandlung nach stenographischem Bericht, 1863.

(22) Der Lassallesche Kriminalprozess, III. Heft, 1863.

(23) Die indirekte Steuer und die Lage der arbeitenden Klassen. Eine Verteidigungsrede vor dem Königlichen Kammergericht zu Berlin, 1863.

(24) Offenes Antwortschreiben an das Zentralkomitee zur Berufung eines allgemeinen deutschen Arbeiterkongresses zu Leipzig, 1863.

(25) Zur Arbeiterfrage. Lassalles Rede bei dem am 20. April 1863 in Leipzig gehaltenen Arbeiterversammlung, 1863.

(26) Arbeiter-Lesebuch. Rede Lassalles zu Frankfurt a. M. am 17 und 19. Mai 1863.

(27) Die Feste, die Presse und der Frankfurter Abgeordnetentag. Eine Rede, 1863.

(28) An die Arbeiter Berlins. (Flugschrift.) 1863.

(29) Herr Bastiat-Schulze von Delitzsch, der ökonomische Julian, 1864.

(30) Der Hochverratsprozess wider Ferdinand Lassalle vor dem Staatsgerichtshofe zu Berlin am 12. März 1864.

(31) Die Agitation des allgemeinen deutschen Arbeitervereins und das Versprechen des Königs von Preussen. Eine Rede, 1864.

(32) Der Prozess wider Ferdinand Lassalle vor der korrektionellen Apellkammer zu Düsseldorf am 27. Januar 1864.

右の中で邦譯のあるのは、(16)に對する小泉信三の「労働者綱領」(岩波文庫)と、(15)(17)(18)に對する淡徳三郎の「憲法の本質」とである。

彼れの著作の中から事項別に文章の一節一節を抜萃したものに、次の二書がある。

(33) Franz Diederich: Lassalle-Brevier, 1920.

(34) Eduard Bernstein: Lassalle und der Sozialismus, 1920.

ラッサールの評傳として先づ讀むべきは、次の(35)であらう。之は(1)の全集に附屬して作られたもので

ある。ベルンシュタインの(36)は前著の後にラッサールに對する評價を高め書き改めたものと云はれてゐる。オンケンの書はより大部でありより網羅的である點に於て、ラッサール傳の白眉であらう。

(35) Eduard Bernstein: Ferdinand Lassalle. Eine Würdigung des Lehrers und Kämpfers, 1891, 2te Aufl. 1919.

(36) 〃 Ferdinand Lassalle und seine Bedeutung für die Arbeiterklasse, 1904, 2te Aufl. 1919.

(37) Hermann Oncken: Lassalle. Eine politische Biographie, 1923.

尚次の評傳は幾多のラッサール傳の中で特色を有する。ブランデスのは精緻な心理描寫を試みたものとして、ドーソンのは著者が獨逸研究者として知られた英國人であることに於てである。

(38) Georg Brandes: Ferdinand Lassalle. Eine kritische Darstellung seines Lebens und seiner Werke, 1876, 2te Aufl. 1888. 尾崎士郎譯「フェルディナンド・ラッサルレ」

(39) W. H. Dawson: German Socialism and Ferdinand Lassalle, 1891.

(40) Bernhard Harms: Ferdinand Lassalle und seine Bedeutung für die deutsche Sozialdemokratie, 1909.

彼れの思想を主題として扱つた文獻としては、次の如きものがある。此の中で私はトラウトワインを以て出色のものだと思ふ。

(41) Eduard Rosenbaum: Ferdinand Lassalle. Studien über historischen und systematischen Zusammenhang seiner Lehre, 1911.

(42) Carl Trautwein: Über Ferdinand Lassalle und sein Verhältnis zur Fichteschen Sozialphilosophie, 1913.

(43) Karl Vorländer: Marx, Engels und Lassalle als Philosophen, 1920.

(44) Gustav Mayer: Lassalle als Sozialökonom, 1894.

(45) L. O. Brandt: Ferdinand Lassalles sozialökonomische Anschauungen und praktische Vorschläge, 1895.

(46) Julius Vahlteich: Ferdinand Lassalle und die Anfänge der deutschen Arbeiterbewegung.

當時の政治、經濟、社會を語るものとして、次のものが推奬さるべきである。

(47) Franz Mehring: Geschichte der deutschen Sozialdemokratie, 4 Bde., 11te Aufl. 1921.

(48) Georg Kaufmann: Politische Geschichte Deutschlands im 19. Jahrhundert, 1900.

(49) Arthur Rosenberg: Die Entstehung der deutschen Republik, 1930.

(50) Werner Sombart. Die deutsche Volkswirtschaft im 19. Jahrhundert und im Anfang des 20. Jahrhunderts, 5te Aufl. 1921.

(51) Fritz Sternberg: Der Niedergang des deutschen Kapitalismus, 1932.

(52) Theobald Ziegler: Die geistigen und sozialen Strömungen im 19. und 20. Jahrhundert, 7te Aufl. 1899. 伊藤吉之助飯田忠純共譯「現代獨逸の精神的社會的潮流」

ラッサールを知るにはマルクス、エンゲルスの角度から見ることも必要である。兩人の傳記として次の二つだけを擧げて置く。

(53) Franz Mehring: Karl Marx, 2te Aufl. 1919.

(54) Gustav Mayer: Friedrich Engels, 2 Bde., 1920-1934.

邦文としては尠い。

(55) 小泉信三　フェルヂナンド・ラッサールと獨逸勞働運動（「社會問題研究」第一章）

(56) 同　「勞働者綱領」と「共產黨宣言」（「勞働者綱領」附錄）

17.6.2

社會思想家評傳　奥付

昭和十一年六月一日印刷
昭和十一年六月五日發行

定價　貳圓五拾錢

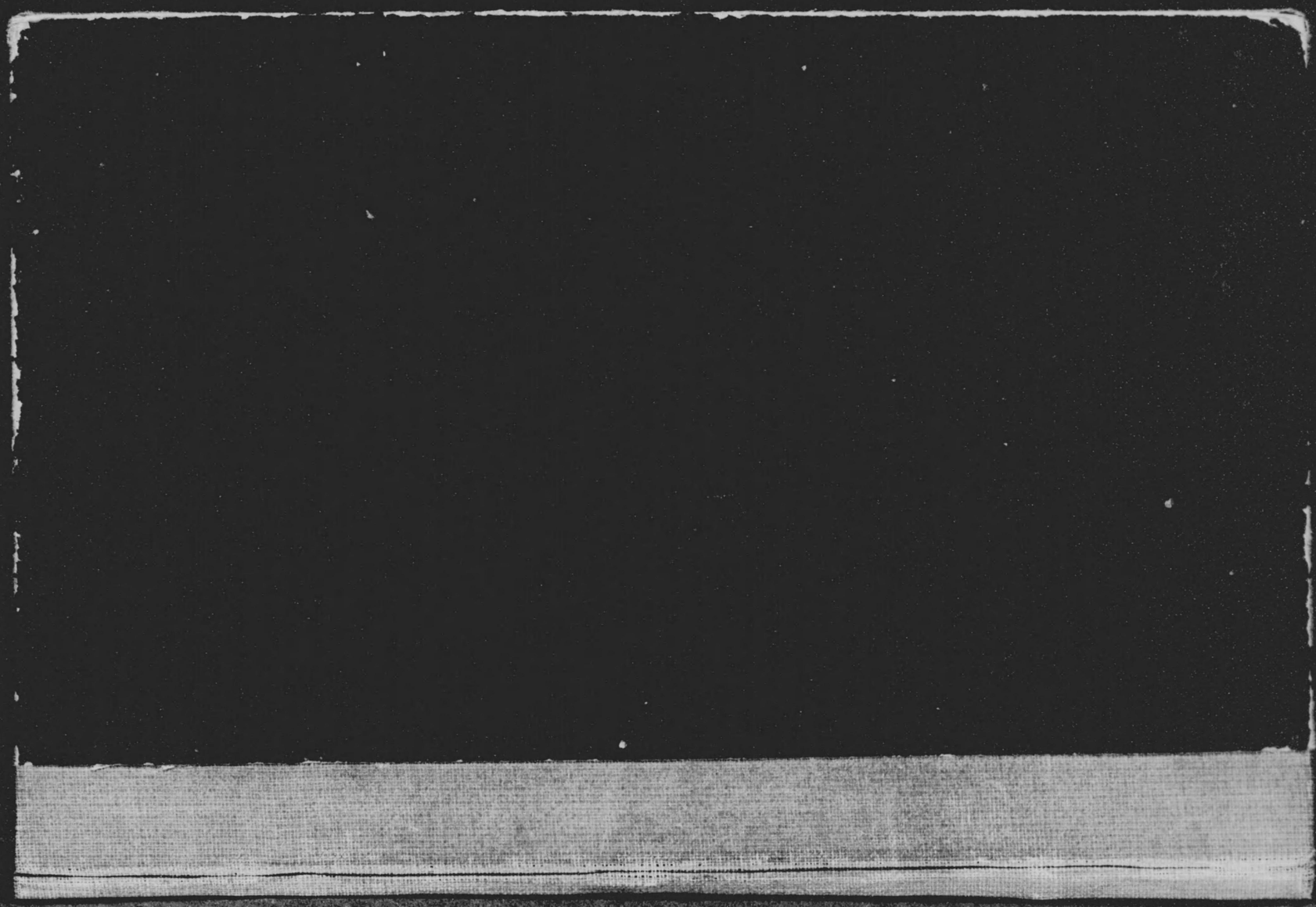
著者　東京市品川區大井庚塚町四九四八　河合榮治郎

發行者　東京市京橋區京橋三ノ四　鈴木利貞

印刷者　東京市小石川區久堅町一〇八　君島潔

發行所　東京市京橋區京橋三ノ四　株式會社　日本評論社
電話京橋六一九一―四
振替東京一一六

河合榮治郎著作目錄

一	勞働問題研究（絶版）	大正九年	五・〇〇	岩波書店
二	社會思想史研究（第一卷）	大正十三年	三・〇〇	岩波書店
三	在歐通信	大正十五年	二・〇〇	改造社
四	英國勞働黨のイデオロギー	昭和四年	〇・五〇	千倉書房
五	トーマス・ヒル・グリーンの思想體系（上卷）	昭和五年	四・〇〇	日本評論社
六	トーマス・ヒル・グリーンの思想體系（下卷）	昭和五年	五・〇〇	日本評論社
✓七	社會政策原理（絶版）	昭和六年	一・五〇	日本評論社
八	大學生活の反省	昭和六年	一・八〇	日本評論社
九	書齋の窓から	昭和七年	一・二〇	日本評論社
✓十	學生思想問題（鹽山教授との共著）	昭和七年	〇・四〇	岩波書店
十一	歐洲最近の動向	昭和九年	二・五〇	日本評論社
十二	ファッシズム批判	昭和九年	一・八〇	日本評論社
✓十三	改訂社會政策原理	昭和十年	四・〇〇	日本評論社
✓十四	學生生活	昭和十年	二・〇〇	日本評論社
✓十五	社會思想家評傳	昭和十一年	二・五〇	日本評論社

711
22